
渡り鳥

てんびっと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渡り鳥

【Nコード】

N3860U

【作者名】

てんびつと

【あらすじ】

可愛い妹を持つ主人公の武尊を不幸が襲う。そして、未来から二人の美少女が現れる。オタクな親友（男）、優秀な幼なじみ（女）を巻き込み、武尊の数奇な人生が始まった。

pixivにも転載しております。

第一章 ルナ

「ヘリコプターか……」

微かなローターの音に気付き、玄関先で空を見上げた。幼い頃、空を舞うヘリコプターを見て、十年も経てば空一面に飛んでいるんだろうな、なんて思っていた。現実とは言えば、ヘリコプターを一日に、そう何台も見てもんじゃない。

十年という月日は長いように思える。だけど、実際、そうだろうか？ 人類が誕生したのは、六百万年前だったわけ……地球にいたっては、四十六億年も前に誕生していたそうだ。比べられる事じゃない、それは分かっているけど、十年……ちっぽけな時間じゃないか？ 産まれた子供が、今年小学四年生になるんですよって言ったら、それにはやっぱり十年掛かっている訳で、それが十年という長さを表すのに適しているかと言えば、そうでもないと思う。

携帯電話だってそうだ。これが十年前の携帯電話だ、と見せられたら、古臭い！ なんて思うだろうけど、俺は十年間寝ていた訳ではない。その携帯電話の、日進月歩の進化の過程を見ている訳だから、そんなに驚きはしない。

驚きがないってのは、寂しい話ではあるが、それも仕方がない事だ。だいたい、世の中、そんなに驚くような事ばかり存在したら、身が持たないっての！

「……………ちゃん。お兄ちゃん！」

「ん——ああ……すまんすまん……」

つつい感傷に浸ってしまっていたな。秋ってやつは恐ろしいもんだ……

「色々あったから、疲れてるのかな？ 大丈夫？」

うつむく俺の顔を覗き込むようにして、妹が見ている。

「んー、大丈夫だ。ほら、タイ曲がってるぞ」

常磐色のセーラー服がよく似合っている。首に巻かれたタイが、今にも解けそうになっていたので、巻き直してやった。

妹の名前はルナ。本当に同じ種と畑から産まれてきたのか？ そんな疑いを持ちたくなるほど、俺とは全然似ていない。ルナは正真正銘、美少女だ。兄馬鹿だなんて思ってる奴がいたら、見せてやりたいくらいだね！

大きな漆黒の瞳に、長く艶のある淡藤色の髪。右目の下には、チャームポイントの涙ぼくろ。背と胸が小さい事を嘆いているが、そんなのは贅沢な悩みだ。それに、まだ成長期なんだし、そんなに気にする事はない。

「もう、お兄ちゃんったら……子供じゃないんだから。自分で出来るよ」

怒ってもいないのに、頬を膨らませるルナ。中学生といったって、女は女なんだなってしみじみ思う事がある。

「ふん！ 偉そうに言ったら。まだ中三のくせに」

「一つしか変わらないじゃない！ それに背だってほら！」

ルナが自分の頭の上に乗せた手を水平に移動させると、俺の頭に乗せた。

おいおい……お前さ、俺に階段が見えてないとも思ってるの？ 一段上に、いるからじゃん。

「その一つがな、世の中、決定的な差になる事だってあるんだ。日本は未だに、年功序列から脱却出来てないんだぞ」

そんな俺の発言を聞き、

「何それ？ 変なの！」ルナはいぶかしげな顔で俺を見ていた。

変ではないだろ……実際そうだって、テレビでも言ってるじゃん。そんな俺をよそに、ルナは強引に話を変えた。

「あ、そうそう晩ご飯のおかずは何が良い？」

唐突だな、おい！ んー、晩ご飯か……病院食は薄味で、いまいちボリュームに欠けていたしな……

「じゃあ、ハンバーグ！」

「アハッ！ 子供みたい！」 白い歯が零れた。

小馬鹿にされているのは承知しつつも、その無邪気な笑顔が眩しくて、目眩がしそうだった。

「うるせえよ。好きなんだから仕方ないだろ。ホラ！ 早く行かないと、遅刻するぞ！」

ルナは通学カバンを重そうに肩に引っ掛けると、

「ワーカーリーマーシーター！」 表情を消して言った。

「じゃあ、気を付けてな！」

んつとに……反抗期も困ったもんだね……

腕を組み、顔をしかめていると、ルナは、そんな俺の顔に、顔を近付けてきた。

ルナの唇と、俺の唇が重なる。

ルナは三段ある階段を、タタツと降り、振り返ると、

「行ってくるね！ あ、そうそう、洗濯物、干すの忘れちゃダメだよ！」

笑顔で言うと、元気良く手を振った。俺もつられて手を振り返した。

分かってるって……ってか、洗濯物ぐらい、干してくれても良いのによ。

ルナを送り出すと、肌寒さにTシャツ一枚で外に出た自分を恨みながら、玄関へと入った。視線が自然と、下駄箱の上に置いてある写真立てに移る。それは親父が、どこかのノミの市で買ってきたものだ。アンティーク調の、細かい彫刻が施してある代物だった。その写真立てには、旅先で撮った、一枚の家族写真が入っている。夕焼けを背景に、親父と母さんと俺とルナが笑っている、そんな一枚だった。

「なんで、こんな事になっちゃったんだろ……」

思うだけに留めたつもりが、つい呟いてしまっていた。それはや

はり、自分の身に降りかかった不幸が、余りにも衝撃的だったからだろう。

駄目だぞ！ 俺よ……もっとポジティブシンキングで行かないと！ そうだ！ 今日やる事を考える事にしよう……えーっと、役所に行って手続きだな。これは絶対にやっておかないと。後は、研究所に礼を言いに……

「あー、頭痛え！」

クソッ！ ポジティブになんか、なれるかっての！ 無理だよ、無理！ 絶対に無理！

靴を脱ぎ、スリッパに履き替えると、廊下のどこを見るでもなく、見ていた。頭の中には、二日前の出来事が、今も鮮明に残っている。本当なら、その前の二週間の記憶も残っているはずなのだが、俺の記憶にはない。少なくとも今の俺には、病院のベッドの上で目覚めてからの記憶しか、残ってはいなかった。

第二章 生きていてくれて、ありがとう

ベッドの上で、ふっと目が覚めた。ここがどこだか分からなかった。ぼんやりと霞んだ視界には、白を基調にした、清潔感溢れる、こぢんまりとした部屋の中が映っていた。

ん？　なんだ？　足下に、重みが……

不思議に思っで見ると、その重みの正体は、ベッドの横に置かれた椅子に座って、こちらに突っ伏している、ルナだった。楽しい夢でも見ているのだろうか、ルナは微笑を浮かべながら、心地良さそうに寝ていた。

「おい……こんな所で寝てたら、風邪引くぞ！」

俺のそんな声に反応して、ルナの顔がこっちを向いた。その瞳は、まだ通常の十分の一くらいしか開いてない。

「んー、お兄ちゃん……もう少しだけ……」

寝ぼけているルナの可愛いさに目を見張った。うっとりとしながら眺めていると、突然、ルナの目が見開いた。

「——えっ？　お、お兄ちゃん！」

驚きと共に発せられたルナの声は馬鹿でかく、俺の耳には、キンという、金属音がこだましている。

耳が……耳が……って、耳を心配している場合じゃないな。

ルナは、手足をばたつかせたかと思うと、立ち上がり、俺の頭の上の方を、小さな手でまさぐりだした。すると、

ピーッ、ピーッ、ピーッ

聞き慣れない電子音が小さな部屋に響く。

なんだこの音？

俺の疑問は、すぐに解決された。部屋の外から、パタパタッと足音が聞こえてきて、それが近付いてきたと思うと、

ガラガラガラッ

勢いよく、部屋の扉が開いた。現れたのは、茶髪の若いナースだ

った。ナースの左胸には『千葉』と書かれた名札が付いている。何故か名札よりも、その上にある二羽の鳥が向き合ったマークのような刺繍が気になった。

「どうかしましたか？」

千葉さんはルナに聞いた。すると、ルナは急に泣き出した。

「お、お兄ちゃんが……」

千葉さんは俺の方を見た。俺も千葉さんを見ていた。自然と、二人の目が合う。

「ど、どうも……」

なんとなく恐縮して、会釈をしていた。千葉さんも、そんな俺に釣られたのか、会釈を返してくれたのだが、その顔は鳩が豆鉄砲でも食らったかのようなだった。

「いやいや、会釈している場合では！ 大丈夫ですか？ 気分が悪いか、頭が痛いとか？ 名前を言って貰えますか？」

心配した面持ちで、そう尋ねてきた千葉さん。
名前ってなんだよ？ 言えない訳がないだろう？

「大丈夫です。むしろ、頭はスッキリしてる位ですよ。俺の名前は
あつたける
熱田武尊です」

あっけらかんと言ってやった。

本当の事なんだから仕方がない……目覚めた時こそ、若干の目眩があっただけど、今はなんでもないし。

「奇跡ですよ！ 神様って、本当にいるんですね！」

千葉さんは、満面の笑みで叫んだ。

神様の存在なんて、どうだって良いんだよ。そんな事より……

「何が奇跡なんです？ 僕は何故、こんな病院らしき所にいるのですか？ 何かあったんですか？ 今日旅行に行く予定なんですけど……」

泣きじゃくっているルナを横目に、立ち上がると、千葉さんに詰め寄った。

「病院で合っていますよ。ここは聖ギエナー病院です。覚えていら

っしやらないのですか？　あなたは、その旅行の帰りに、事故にあったんですよ。ルナちゃんと、お父さんと、お母さんと一緒に……あなたは二週間もの間、生死の境をさまよっていたんです」

千葉さんの目には、涙が溢れていた。

「あなたが、あなたが、生きていてくれて、よかった。あなたが生きていなかったら、ルナちゃんは、一人ぼっちになる所でしたから」
千葉さんは俺の肩を強く掴み、揺すった。かなり興奮しているようだった。

「——ん？　どういう事ですか？　ルナが一人ぼっちって……親父と母さんはどうなったんです？」

肩を揺すられ、俺の声は震えていた。俺は努めて冷静だった。

「本当に酷い事故でした。あなた達が生きている事は、本当に奇跡なの。冷静に聞いて下さい」

言われなくなつて冷静だよ。見りゃ分かるだろ？

「あなた達のお父さんとお母さんは、亡くなりました」

千葉さんの顔には、悲壮感が漂っていた。ルナの泣き声が、一層大きくなった。

「ハッ？　何言ってるんだよ？　馬鹿言ってるじゃねえって……」

訳が分からねえよ……

ルナは涙をボロボロと流しながら、口を開いた。

「パパとママはね。死んじゃったんだよ……お兄ちゃん、ありがとうね。生きていてくれて、本当にありがとう」

俺の目をジッと見つめるルナ。その目に嘘はなかった。だけど、易々と信じる事なんて出来ない。出来るはずがない。

「ルナ……本気で言っているのか？　冗談はよせよ！」

俺の声は、震えていた。肩を揺すられている訳でもないのにだ。自分でも驚いていた。そして、ルナは少しだけだが、落ち着きを取り戻したように見えた。

「こ、こんな時に、冗談なんか言う訳ないじゃない……」

ちよつと待ってくれよ……両親を、一度に失うなんて、そんな馬

鹿な話が本当にあるってのかよ……そんな悪夢のような話を受け入れろって？ 信じられるはずが、ないじゃないか……

そんな思考とは裏腹に、俺の体はルナや千葉さんの話を信じてしまっていた。俺の目から、涙が溢れ出した。

「とにかく、すぐに先生を呼んできますね。お兄さん、ルナちゃん
の事を頼みましたよ」

そう言うとき千葉さんは、急ぎ足で部屋を出て行った。

おいおい、「頼みましたよ」って……簡単に言うなよ……

俺の頭は、起きた時の爽快感が急速に姿を消し、なんとも言えない閉塞感が満ち溢れていた。考えれば考えるほどに、頭が困惑しているのが分かった。

そんな時だった。さっきは落ち着いて見えていたルナが、またもや小さな体躯を小刻みに震わせながら、泣き出しそうだった。

千葉さんがいなくなったから……なんだろうな。

他人のいる前では、出来るだけ涙を零したくはないのだろう。我が妹ながら、その気丈さが逞しかった。

ルナ……俺の可愛い妹……そうだよ、この世に残された、たった一人の家族なんだ。これからは、俺が、ルナの事を守ってやらないと！ 俺が目覚めるまで、ルナはどんな気持ちでいたのだろう？

一人ぼっちよりも、二人の方が良いに決まっているよな？

「ごめんな……ルナが、そんな冗談言う訳がないよな。お兄ちゃん、しっかりしなきゃ……」

目から溢れる涙が、大粒に変わった。俺だって、出来る事なら泣きたくなかない。頼れる兄貴を見せてやりたいから。でも、堪える事なんて出来なかった。

「お兄ちゃんと一緒なら、ルナ、平気だよ」

強がってんじゃねえよ……

いつの間にか俺は、布団の角を、ギュッと握りしめていた。そして俺達は、誰の目も気にする事なく、思いつ切り泣いた。

ようやく涙が涸れてきた頃、千葉さんが白衣の爺さんを連れて、部屋に戻ってきた。白髪頭にでっぷりとした体？の爺さんだった。医者なのであろう。名札には『船戸』とあった。船戸先生は、俺を舐め回すように観察すると、

「一度精密検査をして、問題がなければ翌日には退院出来ます」
そう言った。そして、

「本当に奇跡です！」何度も大きく頷きながら、繰り返していた。

次の日の朝。精密検査でなんの問題も見付からず、予定通り退院する事になった。出された朝食をサツと平らげ、ベッドで横になっていると、病室の扉が開いた。ヒョコツと顔を覗かせたのは、ルナだった。ルナは俺の顔を見るなり、目映いばかりの笑顔に変わり、「お兄ちゃん、迎えにきたよ！」病室の中へと入ってきた。ルナの小さな肩には、大きなボストンバッグが重そうに担がれている。

「服、持ってきたんだよ。外、寒いからね、コートも持ってきたんだけど、コートってさ、着てたらそうでもないのに、バッグに入れたら意外と重いんだよ！」

そんな何気ない言葉が、妙に嬉しかった。

ルナはベッドの横にあるテーブルに近付くと、その上にバッグを、よいしょと吹きながら置いた。

「ああ、ありがとな。早く家に帰りたいし、早速着替えるとするよ」
ベッドから降り、バッグから服を取り出す。ロンT、ジーンズ、靴下、厚手のダッフルコート、ブーツ……全てが真新しかった。

こんな服、俺、持ってたっけな？ 旅行に行った事すら憶えてないんだし、服なんかいちいち覚えている訳がないか……

バッグの一番底にあったコートを取り出すと、更にその奥に、包装紙に包まれた箱が二つ、目に入った。

「なんだ？ この箱……」バッグの中を指差して聞くと、

「先生とナースさんに渡そうと思って、用意したんだ。ルナが退院

する時は、渡してなかったから……」

うつむき加減で、ルナは恥ずかしそうに言った。

ふーん……出来た妹だ！ 頼もしいったら、ありやしない。

「そっかぁ。気が利くな。ありがとよ」

「えっ？ う、うん……」はにかんだ表情に変わった。

ルナ……大人になったんだな……

しみじみと、そう思った。

「じゃあ、着替えが終わったら、一緒に、礼を言いに行こうか？」

着ていた患者着を脱ごうと、ボタンに手を掛ける。

「うん！」元気良く返事をしたルナが、ジッと、服を脱ごうとしている所を見ている。兄妹とは言え、中学三年生の女の子の前で着替えるのは、なんだか照れ臭いもんだ。

「えっと、すまないが、部屋の外で待っていてくれないか？」

「んー？ あ、ごめんなさい」ペロツと下を出し、ルナは部屋を出て行った。そんな仕草に俺は、不覚にもドキドキしてしまっていた。

「妹を相手に、何を考えてるんだ、俺は……」

頭を振りながら、そう呟いていた。

一通り身支度を済ませ、病室の扉を開くと、外で待ってくれているルナに、

「お待たせ」声を掛けると、

「はい」小気味の良い返事をし、ルナは病室へと戻ってきた。そして、俺の服装を腕組みをしながら、頭の上から爪先まで一通り観察し終わると、

「ちょっと屈んで貰っていい？」

そう言われて、素直に従った。ルナはポケットからヘアブラシを取り出すと、おもむろに俺の髪をくしけずる。俺の目線は丁度、ルナの胸に行っていた。小さく膨らんだ胸を見ていると、ついついニヤニヤしてしまう。すると、一切の気配を感じさせる事なく、俺の目線にルナの顔が降りてきた。

「お兄ちゃんのエッチ！」

「お、俺はルナの胸なんか見てないぞ！」

これって、見てたって言ってるようなもんだよな……表情もろくに誤魔化せていなかっただろうし。兄の威厳もヘチマもないよ……「ほんとに、もう……今度は後ろ！」頬をプーッと膨らませ、ムツとしているルナ。

本当……この子は、誰に似たのだ？ 可愛すぎるだろ……

これ以上空気を悪くするべきではないという判断に乗っ取って、黙って後ろを向くと、今度は後ろ髪を、くしけずってくれている。

「これでよし」

「お、ありがとう！」

そう言って振り返ると、ルナは屈託のない笑顔を浮かべていた。

「男前ですなあ！」

冗談半分で言っているであろう、その一言に、俺は何故だか大いに照れていた。

「お兄ちゃんをからかうんじゃないですね！」

少し怒り気味に言うと、ルナはクスクスと笑い出した。

照れ隠しだって、バレバレじゃねえか……

少し気まずい気がしたものの、関係ないと言わんばかりに、俺も声を上げて笑ってやった。

「サイズが心配だったけど、ピッタリだったね。どう？ ルナのセンス、なかなかのもんでしょ？」

そうか……服を買ってきてくれたんだ。ったく、どこまで頼もしい奴なんだ。サイズまで、ちゃんと調べてくれてるし。

ルナ的には、気分転換のためのショッピングだったのかも知れない。でも、俺にはそれが、凄く嬉しかった。

無意識の内に、俺はルナを抱きしめていた。腕にギュツと、力を込めて。

「俺が目覚めた時、生きていてくれてありがとうって言ってくれたよな？ お兄ちゃんさ、気が動転してて、ルナに何も言えなかった。

ルナ、生きていてくれて、本当にありがとう！ お兄ちゃん、頑張るよ。親父の分も母さんの分もな。俺、ルナのためだったら何でもする。約束する。頼りないかも知れないけど、一緒に生きていこうな？」

いつの間にか俺の背に回されたルナの腕に、ギュッと力が込められるのを感じた。

「お兄ちゃん、おかえりなさい……」

「ああ、ただいま」

親父、母さん……俺、本当に頼りなくて、心配掛けると思う。でも、安心してくれ。俺は、ルナのために生きるって決めたから……だから、どうか安らかに……

ルナを抱きしめながら、そんな事を真剣に考えていた。それが人生で初めてした、決意だった。

ルナを離したくなかった。ルナも、そう思ってくれていたのかも知れない。しばらくその態勢でいると、ガラツと扉が開いた。扉から入ってきたのは、千葉さんだった。千葉さんと俺の目が、合ってしまった。

「――あの、お邪魔だった……かしらね？ 一応、ノックはしたのだけれど……返事がなかったものだから……」

千葉さんは、気まずそうな顔を見ると、必死で言葉を繕っていた。

「あ、いやあ、ハハッ」

笑うしかないじゃん。無論、変な空気を誤魔化すためだよ。

ルナが俺を抱きしめている力を緩るめた。そして、俺とルナは呼吸をぴったりと合わせたかのように、離れた。ルナの顔は真っ赤になっていた。多分、俺も。

「千葉さん、何か用事ですか？」

何事もなかった！

自分にそう言い聞かせながら、冷静さを装って、千葉さんに聞いた。

「あー、そうそう！ 先生が退院する前に、もう一度あなたと話がしたいとおっしゃってました」

千葉さんの声は上ずっていた。俺の「あなたは何も見なかった」と言う、強い念がそうさせたのかも知れない。

「そう……ですか。お礼がしたい。そう思っていたので、丁度よかったです」

ふとルナを見ると、いそいそとバックから、包みを取り出していた。

「これ、皆さんで召し上がって下さい」ルナが千葉さんに包みを渡している。

「まあ、気を使う必要なんてないのに。じゃあ、遠慮なくいただくわね」

そう言って千葉さんは、包みを大事そうに受け取ると、小脇に抱え、踵を返した。

「さあ、行きましょう」

病室を出て行く千葉さんを、俺とルナは追い掛けた。

途中、千葉さんはナースステーションに立ち寄り、ルナが買ってきてくれたお礼の粗品を、受付に置いた。千葉さん以外の看護師さんにもお礼を言わなくては、そう思い中を覗いたのだが、全員出払っているのか、中には誰もいなかった。

六階建ての病院の最上階。そこは、午前中の慌ただしいであろう待合室の喧騒からは、想像が出来ないほどの静かさだった。重厚さを感じさせるドアには『院長代理 船戸』と書いてあるプレートが貼ってある。

コンコン

千葉さんがノックをすると、中から、「どうぞ」と返事があった。

千葉さんが重々しいドアを開けると、白髪頭のでっぷりとした船

戸先生が、豪華な革張りの椅子に、ドツカと座っていた。俺は船戸先生の目を真っ直ぐに見て、

「この度は、本当にお世話になりました、ありがとうございます。」

そう言って、深々とお辞儀をした。隣でルナも頭を下げている。

「すっかり回復したようで、安心しました」

医師と患者の、なんて事のない普通の会話だった。千葉さんは、船戸先生に一礼をすると、部屋を出て行った。それを見てルナは、思い出したかのように手に持っていたお礼の粗品を、船戸先生に渡した。

「やや、ありがとう」

手慣れた仕草で粗品を受け取った船戸先生は、それを机の上に置くと、何やら考えている様子だった。そして、意を決したのか、俺達に向かつて、語り出した。

「何から切り出して良いのやらと思っていたのだがね……君達の父親、熱田景幸君は私の教え子だったのだ。非常に優秀な学生でね、残念な男を亡くしたものだ。知っているとは思うのだが、彼はもと、この病院で脳神経外科の医者をしていた。ちなみに、君達の父親が働いていた研究所は、当病院の親機関になる。急に脳科学の研究がしたいと言いだしてね。医者を辞めて、研究所の方に異動願いを申し出た。それが認められ異動した訳だが……最近も、何やらとてつもない発見をしたと聞いていたが……まだまだこれからだと言うのに、本当に残念な事だ」

船戸先生は悔しそうな面持ちで、さらに話を続けた。

「ここからが大事な話なのだが、君達には身内がないようだ。不思議な事に、君達の父親にも母親にもだ。まあ、私が深く詮索をする訳にも行かず、どうしたものかと思っていたのだがね。君達の意識が戻る保証がなかったものだから、勝手ながら、研究所の名前で葬儀はさせていただいたよ」

話をしながら船戸先生は、机の上に金糸がふんだんに使われた豪

華な風呂敷包みを置いた。そして、おもむろに風呂敷の結び目を解いた。中には、朱色と金色で装飾された箱が、二つあった。

「君達の両親の遺骨だ。さすがに、お墓までは用意出来なかったものだから……これからの事は、何か考えてあるのかい？」

そんな問い掛けに、即答が出来なかった。ジーッと机の上に置かれた箱を、見ていた。船戸先生達への感謝の気持ちは勿論あった。だけど、それと同時に、なんとも言えない悔しさが込み上げてきていた。

親父と母さんが、こんなちっぽけな箱の中に入れられているなんて……

涙が出そうになった。

ルナの前で、もう泣くまい……

齒を食いしぼり堪えた。横目で見ると、ルナも泣くのを必死で堪えているようだった。

「これからの事は、家に帰ってから二人でよく話し合って決めていきます。この度は、ご迷惑をお掛けして、本当に申し訳御座いません。そして、心より感謝致します」

強引に声帯から声を振り絞った。そして、机の上に置いてある二つの箱を、風呂敷で綺麗に包み直し、それを手に取ると、踵を返した。

「失礼しました。じゃあ、ルナ。行こう」

ルナの手を引いて、部屋を出ようとした俺達を、船戸先生が呼び止める。

「何か困った事があったら、相談に来ると良い」

近付いてきた船戸先生の手には、名刺が握られていた。名刺を受け取ると、

「はい」再び踵を返すと、部屋を出た。

頭の整理が付かないや……

「痛いよ、お兄ちゃん」

その声で、我に返った。見ると、ルナの手は真っ赤になっていた。「ご、ごめん」

その後、ルナとの会話はなかった。ルナは俺に何かを話し掛けた様子だった。だけど、俺は口を真一文字に結び、それを拒否した。病院の外に出ると、もう昼になろうかというのに肌寒くて、ルナが用意してくれたダッフルコートが暖かくて、心地良かった。

病院を出て、バスに乗り、ようやく家に着いた。記憶にある、入院していた期間は二日だけなのに、妙に懐かしい感じがした。

不思議なもんだな……二週間もの記憶をなくしたというのは、やはり、事実なんだろう……

「お兄ちゃんがない間、大変だったんだからね！」

責めるような口調に、我に返った俺を、ルナは腕組みをしながら、見ていた。

「そりゃ、そうだろうな」

素っ頓狂な返事しか出来なかった自分が情けない。ルナは、勿論納得が行く訳がなく、頬を膨らませている。

怒るのも、無理はない……か……

そんな事を思いつつ、家の鍵を出そうとポケットを探った。

「はい、これ」

ルナが差し出した掌の上には、鍵が乗っていた。

そっか、ポケットに鍵なんて、ある訳ないよな……

「サンキュ」

鍵を受け取ると、家のドアを開けた。心が安まる、良い香りがした。

「お帰りなさい、お兄ちゃん……」

振り返ると、ルナは、盛大な泣きべそをかいていた。先に玄関に入っていた俺は、そんなルナを家の中へ、優しく招き入れた。ルナの頭を撫でると、我慢が利かなくなったのか、床にへたり込むと、遂に泣き出してしまった。

「ルナ……泣きやんでくれよ……」

「ルナ……不安だったんだよ！ 寂しかったんだよ！ なんで……なんで、ルナの方が、先に目が覚めちゃったんだろう……って。お兄ちゃんが、目覚めなかったらどうしようって……市役所とか保険会社とか研究所とか、訳の分からない電話がいっぱいかかってくるし……もう毎日毎日大変だったんだから……」

腰を屈めると、ルナに顔を近付け、向き合った。ルナの大きな瞳から溢れ出る涙を、指で拭う。小さな体を小刻みに震わせ、泣きじやくるルナを見ていると、愛しくて愛しくて堪らなかった。

可愛さの表現として、目に入れても痛くないと言うが……まあ、そんな訳がない。でも、その痛さを我慢する事なら、可能なのかも知れない……

ルナも、涙で溢れる目を手でこすると、俺を真っ直ぐに見ていた。息が掛かるほどの距離だった。拒否をする事も、勿論出来た。でも俺は、そんな事を考える事はなかった。更に近づくルナの顔。自然と目を瞑っていた。ルナの唇が俺の唇に重なった。

ルナは、唇を離す事なく、俺の首に腕を回すと、グッと力を込めた。ルナの唇は、温かくて、少し湿り気があった。

時間が止まっていると錯覚するような、そんなひとときだった。ルナと本当の意味で、心が通じ合ったような気がした。ルナにも、俺と同じ気持ちであって欲しかった。やがて、自然と、密着していた唇が……体が離れた。だけど、二人の手は、しっかりと繋がれたままだった。

いつの間にか泣きやんだルナは、

「ファーストキス」はにかんで言った。

「俺も……だよ」

ルナは、照れる俺を見て、クスクスと笑っている。さっきまでの泣き顔は、嘘じゃないかと思えるほどの、天使みたいな微笑だった。初恋はした事がある。って言うか、今も、好きな女の子はいる。

でも、この感じは、そういうのとは違った。唯々、胸の奥が仄かに暖かい。そんな感じだった。

実際俺は、顔が爆発しそうなほど、照れていた。

「あー、なんか腹減ってきたなあ！」

こんな空気、いつまでも耐えられるかよ！

「そうだね。ご飯にしょっか。ルナが作ったんだからね」

胸を張って言ったルナの顔が、今まで以上に輝いていた。

「へー、そりゃ楽し……」

おい！ 手を引っ張るなって……話してる途中だろうがよ！

二人揃ってリビングに入ると、カレーの匂いがした。それは、とても良い匂いだった。

これが俺の記憶にある二日間だ。齡、十六歳。まだまだ先の長い人生の中で、これ以上に衝撃的な二日間はないだろうな……ってか、頼むから、なしにしてくれ！

第三章 急加速、しすぎだろうが

ルナを家から送り出し、さてどうしたものかと、リビングに戻り
思案していた。

今日で全ての用事を済まし、学校へは明日から通うとして……
ふと時計を見ると、針は八時丁度を指していた。

「洗濯して、身支度整えりゃ、役所に行くのに良い時間になりそう
だ」

一人呟いていると、

ピンポーン！

ドアホンが鳴った。

誰だ？ こんな時間に……ってか、そんな時間でもないか。んー
……そうか！ 近所の人が、心配に思っ様子を来てくれたの
かな？

不用心にも、ドアホンのモニターを確認する事なく、玄関の扉を
開いた。そこに立っていたのは、銀髪で軍服姿の女の子と、黒髪で
ゴスロリ姿の女の子の二人組だった。何故だか嫌な予感がして、開
けた時の倍以上の速度で扉を閉めた。

今のは、なんだったんだ？ どんな組み合わせだよ！ 気持ち悪
い……

自分自身の事ながら、不用意にドアを開けた事を呪った。

ピンポーン！ ドン！ ドン！

なんだよ、しつけないあ……俺だって、そこまで馬鹿じゃないん
だぜ。同じ過ちを、繰り返す訳にはいかないんだよ！

ドアホンのモニターを見ると、そこにはゴスロリの方が一人で映
っていた。

軍服がノックする役目なのかな？ ふーむ……さて、招き入れる
か？ それとも、帰ってもらうか？ いやいや、こんな簡単な二者
択一はあるまい……帰ってもらうに決まっているじゃないか！

「間に合ってますので、お引取りを」

ドアホンで、ゴスロリにそう言ってやった。

何が間に合っているのやら……俺にもさっぱり分からんけどな。ちゃんと帰るかどうかを確認するため、モニターを凝視していると、ゴスロリが何やら怒っている様子で、ドアの方に向かって手招きをしている。すると、軍服がモニターに映り込んできた。

「あの、お話だけでも聞いて頂けませんこと？」

軍服は顔の前で両手を合わせると、そう言った。

ちよっと待てい！ 着ている物に目が行ってて、気付かなかったけど、どえらい美人じゃないか！

端正な顔立ちに、長いストレートの髪が凛々しく、絶妙に似合っていた。その後ろで、ちょこんと映っているゴスロリも、ロングの少しウェーブの掛かった髪に、幼い顔立ちという組み合わせで、メチャクチャ可愛かった。

クソモニターめ！ 今時、白黒ってどういう事だよ？ しかも、写り悪いし……

「まあ、話だけでもって言ってるしね」

自分に対して、言い訳がましく一人呟いてみた。

だって、俺、男の子だもん……可愛い女の子が家の前にいりゃ、もう一度見たいって思うだろ？ しかし、油断は大敵だぞ。

「話を聞いたら、すぐに帰ってもらいますからね」

ドアホンに向かって言うと、

「はい！」軍服はモニター越しでも分かるほど、嬉しそうな顔をしている。一方、ゴスロリは後ろの方で大欠伸をしていた。

ゴスロリめ……舐めやがって……

ドアを少し開けると、小さな黒いブーツが、僅かに出来た隙間に入り込んできた。そして、一気に開かれたドア。驚く暇もなく、軍服の勇ましい声が玄関に響いた。

「私は、日本帝国軍一等空佐、隼奉香はやぶさともかですわ。ある特命を受け、三十年もの未来から時を遡り馳せ参じましたの！ 以後、お見知りお

きを！」

大声に驚きつつ、軍服姿の美少女を凝視した。長身で均整の取れたスタイル。肌色の袴のようなスカートに、濃紺の軍服を羽織っていた。そして腰には刀が提げられている。

どんなデザインなんだよ？　しかも、三十年って、訳が分からねえ。ああ……やっぱ関わるんじゃないかったか……ドアを開けただけで、こんなにも後悔させられるなんて、思っても見なかったよ。

「うちは、二等空尉、疾風朔来^{はやてさくら}や。よろしゅうな」

おいおい、チビゴスロリよ……俺の後悔が終わらないうちに、挨拶してんじゃないかって……

そんな事を思いながら、大阪弁の少女を、俺は見ていた。レースのフリルが沢山付いた漆黒のドレスを身に纏い、カチューシャに付いた大きなリボンが真紅に染まっていた。ルナより少し大きいくらいの背丈で、銀のイヤリングやら、指輪やらが光っている。

ゴスロリかと思ったけど、ゴスパンか？　よく分からんねえ……まあ、どうでも良いけどさ。それにしても、とてつもなく変なコンジだよな？　嫌だ、嫌だ……こんなのに関わっちゃ駄目だ。それに今日は忙しいんだよ。役所に行かなきゃ駄目だし、洗濯もしないといけないんだ！

「ふう、慣れない時空旅行で疲れましたの。それでは、中でゆっくりとお話を……」

軍服は確かに疲れ気味の表情を浮かべていた。そして、家の中へと入ろうとする。

おいおい……何を勝手に、入ろうとしてやがんだよ！

「駄目だ！　帰ってくれ！　君達みたいな、頭のおかしそうな連中と、話す事なんてない！」

軍服の進撃を手で遮り、目を真っ直ぐに見て言うと、軍服は、目をパチクリさせている。

いやいや、何驚いた顔してんだよ？　お前等、どう考えたって、不審者じゃねえか！

「ほらな！ だから言うたやんか……こうなんの、アホでも分かるで」

ゴスロリは、馬鹿にするような感じで軍服の顔を覗き込んでいる。「しかし、ここまで冷たいお方でらしたとは」

ガックリと肩を落とした軍服の言葉には、さっきの勢いがなくなっていた。

って、人様の玄関先で、話してんじゃねえっての！

「どうしてもとおっしゃいました？ どうしても、話を聞く訳にはいかぬと？」

チックショー！ 綺麗な顔しやがって！ そんなね、瞳を潤ましたってね、駄目なもんは駄目なの！

「ああ！ 駄目だ！」

今日の俺は、屈しないぜ！

「左様で御座いますか……分かりましたわ」

俺のハッキリとした強い口調と態度に怯んだのか、軍服は渋々だが、諦めたようだった。その顔には悔しさが滲んでいる。

「朔来、出直しますわよ……」

軍服は力なく言うのと、踵を返し玄関から出て行った。

ん？ ゴスロリ、話を聞いていたか？ 何故まだそこに突っ立っている？ 早く出て行きなさいよ。

ゴスロリは、俺をキツと見据えると、

「ドケチ！」と叫んだ。

んだと？ テメー！

「絶対に出直すんじゃないぞ！ 二度と会う事なんてあるか！ 馬鹿！」

俺の言葉が耳に入っていないかのように、ゴスロリは悠然と踵を返し、玄関を出て行った。俺は猛然とキッチンに向かって走り、塩を袋ごと持って来ると、玄関から外に向かって、全力で振り撒いたやった。

節分の時の豆だって、こんなに必死で撒いた事なんてねえよ！

クソッ！　なんだよ、アイツらは！

塩が入った袋が空になったが、俺の中のイライラは募るばかりだった。玄関先にいつまでも突っ立っている訳にもいかず、家の中へと戻る。

洗濯……でもするか……少しは気が紛れるかもしれない……バルコニーで、冷たい風にでも当たりゃ、気持ちも収まるだろう。

脱衣所に行き、洗濯機の中を覗いた。ルナが毎日してくれていたのだろう、洗濯物の量は少なかった。洗濯機から衣類を取り出し、籠に入れると、二階のバルコニーへと向かう。シャツやらスウェットやらがシワにならないよう、丁寧に伸ばしながら、干しに干した。単純な作業って、気分が落ち着くんだな。新しい発見だ……さて、お次は？　つと……

カゴに手を入れ洗濯物を取り出すと、手に掴まれていたのは、ルナの純白のブラジャーだった。真ん中には小さな桃色のリボンが付いていて、なんとも可愛らしい。ブラジャーを干し、次の洗濯物に取ると、先ほどのブラジャーとセットになったパンツだった。こちらにも小さなリボンが付いている。丁寧にシワを伸ばしていると、ルナの顔が頭に浮かび、俺の顔は自然とほころんでいた。

「何、妹のパンツ握りしめて、ニヤついてんねん！　この、変態が！」

この声、この関西弁！

声のした方を見ると、それに気付いたのか、ゴスロリは慌てて電柱の影に姿を消した。

おいおい……近所の目だって、耳だってあんだぞ……勘弁してくれよ……

落胆と怒りが混じった、複雑な感情が込み上げてきた。

「お前！　まだいたのか？　とつとどこかに、行きやがれ！」

頭の血管が切れるんじゃないかと思うくらいに、大声で叫んだ。

「言われんでも、そうするわい。へんたーい！」

電柱から再び姿を現したゴスロリは、そんな捨て台詞を吐くと、走って立ち去ってしまった。

どんな育ち方をすれば、あーなんだよ……ったく、イライラすぎて吐き気がすらあ。ふざけやがって……

洗濯物を干し終えると、ゴスロリの忌々しい言葉が頭を過ぎり、完全にやる気が萎えてしまい、自室に塞ぎ込んだ。コンポから流れる音楽が、尖った神経を癒してくれる。

むかつく奴等だったけど、二人とも人形みたいで、やけに可愛かったな。あれで性格が良ければなあ……やっぱ神様っているのかな？ 二物を与えん的な……

ベッドの上に寝転がり、そんな事を考えていると、階下で物音がしたような気がした。コンポのスイッチを切り、耳を澄ましてみると、やはり物音がする。

——もしや、あのゴスロリ！

音を立てないよう、ソーっと階段を降りていく。音がするのは、玄関のようだった。階段を降りきった所に玄関があるのだが、途中直角にカーブしているので、下が見えない。意を決し、猛ダッシュで階段を降りると、

「誰だ！」叫んだ。

目に映ったのは、驚いた表情を浮かべた、ルナ……のような女の子だった。

ルナにそっくりだ……でも、背が高いし、胸も大きい……顔もなんだか大人びてるし。

「ルナ……じゃないよな？」

そんな俺の問い掛けには応えず、そのルナのような女の子は、玄関から飛び出していった。

「ちょ……」

なんだってんだよ？ 一体……

慌ててスリッパのまま外に飛び出し、右か左かと首を振って、確認したのだが、既に女の子の姿はなかった。

この分だと、走っても追いつかないだろう……
玄関に戻ると、その場に立ち尽くし考えていた。

ルナが成長したような女の子だったな。でも、明らかに違う点がある。ホクロの位置だ。ルナとは逆の、左目の下にあった。まあ、考えていても、もう逃げられたのだから、どうしようもないか……
我に返り、ふと見ると、下駄箱の上に置いてあった写真立てが、なくなっている事に気付いた。

唯一の家族写真なのに……もうこれ以上混乱させないでくれよ……それにしても、この家は呪われているのか？ 朝からどんだけ厄介事が起こるんだよ！ もう駄目だ。出掛けよう……今日は、その方が良い。

そうと決めたら即行動。それは俺の唯一と言って良い、長所なのかも知れない。

俺は役所の自動扉の前に立っていた。両親が亡くなったので、色々と手続きをしなければいけないからだ。

はあ、面倒だなあ……

自動扉が開くと、目の前に繰り広げられた光景に、自分の運命を呪わざるをえなかった。カードを入れて、住民票等を発行する機械の前に、あの軍服とゴスロリがいたからだ。

「奉香。アカンわ、これ」ゴスロリが軍服を見て言った。軍服は不安気な表情を浮かべている。

「何をしていますの、朔来。あなたを連れてきたのは、このためでもありますよ……」

軍服がゴスロリを責めるような目で見ると、

「いやいや、それは充分に承知してるんやけど……古い機械や思て、舐めとったわ」

ゴスロリは申し訳なさそうな顔を見ると、機械をバシバシ叩いている。

「ちょ、おやめなさい！ 不審がられたら、どうしますの」

「せやけど、これ……」

何やってんだ？ チェックメイトだよ……ほら見ろ！

「どうか致しましたか？ 使い方なら説明差し上げますが……」

見るに見かねたのか、職員が機械の方へと近付く。

「いえ、大丈夫ですわ。放っておいて下さいませ」

軍服が職員に応じる。その間も、ゴスロリは機械を相手に、何やら悪戦苦闘していた。職員は、酷く困惑した面持ちだった。

警察でも呼ばれかねんぞ、あれでは……

敢えて、見て見ぬふりをした。

正直、関わり合いになりたくないし……

書類の入った鞆を小脇に抱えると、案内係のカウンターの方へと足を向けた。

しかし、ヤバいな……機械の横を通らないといけないのか……茨の道ってやつだな。

二人に気付かれないよう、視線を下に落とし、忍足で、且つ早足で歩いた。

まったく、何故俺が、こんなコソ泥のような真似をしなきゃイカンのだ！

そう思いながらも、無事に機械の横を通過する事に成功し、ホッと胸を撫で下ろしたのも束の間、幸運の女神の微笑みが、一瞬にして青ざめた。

「お兄様ぁーん！」

後ろから気味の悪い猫なで声が聞こえた。

「チッ！」

反射的に舌打ちが出た。振り返ると、二人がこっちを見て、手を振りながら近付いてくる。

「お待ちになって、お兄様」

軍服は頬を赤く染めながら、無駄に大きな声で言った。

これは、周囲の注意を敢えて引くための作戦か？ 協力して貰えらるでも思ってたのかね？ 舐めんじゃねえっての。無視だよ無視、

ド無視だよ！

再び受付の方を見ると、俺は全速力で歩き始めた。
遅かった……

俺の腕は、軍服に掴まってしまった。

クソッ……俺がトカゲなら、腕を切っても逃げるのに……
そんな事を思いながらも、軍服に掴まれた腕を全力で振り解こうとしたが、無理だった。その細腕のどこにそんな力が？ と、疑いたくなるような凄まじい力だった。

「捕まえたあ！ もう、お兄様ったら」

軍服は俺の向きを強引に百八十度変えさせると、顔を覗き込み、不器用なウインクをしてきた。軍服のすぐ後ろで、ゴスロリもパチパチとウインクをしている
アイコンタクトのつもりか？

何気に機械の方を見ると、職員が警備員を呼び何やら説明をしている。警備員の視線が、機械とこちらを何回も往復していた。

「チッ！」

またもや舌打ちが出た。今度は自然に出たものじゃなかった。

これ以上の混乱は避けなければ……仕方がない。一芝居打ってやるか……

「どうしたんだい？ 奉香」

外人がするような、過剰なボディアクションで両手を広げると、隼にウインクを送り、尋ねてみた。すると、隼の目がキラリと光った。疾風もウンウンと頷いている。

「それがね、お兄様。どうも機械かカードの調子が悪いようでした……」

隼の困り切った顔が可愛かった。

「どれ、見せてごらん」カードを受け取ったフリをして、

「あはは！ 奉香、これはクレジットカードじゃないか！ 本当に奉香はオッチョコチョイだなあ！ 奉香はもう高校生なんだから、こういった庶民の生活も勉強しないといけないぞ。僕なんて、奉香

の年の頃には、一人で電車に乗って出掛けたものだ」

隼のおでこを、指先でツーンと押した。

「まあ、凄い！ 流石は、私のお兄様ですわ。本当にもう、私ってば……」

隼は、ペロリと舌を出すと、自分の頭をコツンと叩いた。疾風は、このクサイ三文芝居にうんざりした表情を浮かべている。

「後で、僕がやっておくから、今日はもう屋敷にお帰りなさい。朔来ちゃんが愚図りだしたら、周りの人達に迷惑が掛かってしまうしねえ……」

俺の言葉を聞いた瞬間、疾風の顔色が変わった。目にも止まらぬスピードで、俺のスネを蹴る。

イッテー！ 何しやがんだ……

苦痛で顔を歪める俺に、隼は何事もなかったように、

「はい、分かりましわ。それでは、よろしくお願い致しますの。朔来ちゃん、帰りますわよ」

疾風の手を引くと、役所から出て行った。機械の方を見ると、職員も警備員も、いつの間にかいなくなっていた。

我ながら、情けないくらいに下手な芝居だった……でもまあ、上手くいったようで、何よりだけど。それにしても、アイツらの目的はなんだ？ それに、街をウロウロするんなら、服をなんとかしろよな！ 目立ちまくってんじゃねえか！

突っ込み所が満載すぎる二人に、変な親近感を覚えた自分がいた。だけど、二度と関わり合いに、なりたくないな。遠くで二人の行動を見るのがベストだ。

役所での用事を全て終わらせ、外に出ると、一台の黒塗りの高級車が、俺の前で止まった。勿論、俺を迎えに来た訳ではない。俺の前で止まったのは、たまたま俺が入り口に立っていたからであって、高級車的には役所の入り口に横付けした、と言う方が正解なのだろう。

高級車の後部座席に人影が見えたので、邪魔になってはいけない
と思い、俺はサッと避けた。後部座席のドアが開き、若いパンス
ーツ姿の女性とスーツ姿の男性が降りてきた。二人とも金髪で、何
やら耳慣れぬ言語で話している。男性の方は女性に向かって手を振
ると、役所の中へと入っていった。女性の方も、手を振り返してい
る。

その女性の、ピッチリしたパンスーツを後ろから眺めると、そ
の抜群のスタイルに感心した。ヒップラインが絶妙だった。思わず
ニヤリとしてしまう。

世間一般の男性なら、大半がそうなると思うのだが……

「ほんま、あんたは見境ないなあ……」

この声は！

振り返ると、疾風がウンザリした顔をして立っていた。その後ろ
には、隼もいる。

「また、お前達か？ ハア……」

思わず零れる溜息。

ほんつとにもう、飽き飽きなんですけどね！

「誠に申し訳御座いませんでしたわ。先ほどのお礼を言おうと思い、
お待ちしておりましたの」

隼はかしこまって、頭を深々と下げている。

待ってたって……手続きが終わるまで、結構な時間が掛かったの
に……律儀な奴だ。

「礼なんてよせよ。気にする必要なんてないから。別に、あんた達
の話信じている訳じゃないけど、連れて行かれたら面倒になるん
だろうなって思ったから、協力したまでだし」

恐縮していると、隼は疾風の頭を押さえて、礼を言うように強要
している。

「おおきに……」

嫌そうな顔して礼を言うんじゃないよ。人に礼を言う態度つても
んがあるだろ？ ってか、そんなのどうでも良い。即、関係を絶た

なくては！

「じゃあな」

足早に立ち去ろうとしたその時、パンツスーツ姿の女性が、後ろでゴソゴソと話をしているのが気になったのか振り返った。

「あっ！」

普段と全く違う姿に、驚きの声を上げてしまう。

「優羽乃……だよな？ そんな格好で、何してんだ？」

「ん？ ああ、武尊じゃない！ 何してるって言われても……まあ、通訳兼街案内って所ね。お祖父ちゃんとかパパにちよくちよく頼まれるのよ。で、武尊はこんな所で何してるの？」

通訳って……英語が出来るのは知ってたけどさ……さっきのは明らかに英語じゃなかったよな？ 一体、何カ国語扱えるんだよ？ お前はスパイか？ ジェームズ・ボンド的な何かなのか？

「そうなんだ、凄いな。俺は……アレだよ。両親が死んじゃってよ……で、色々と手続きがあつてな。こういうの初めてだから、手間取っちゃったよ」

普通に答えたつもりだったのだが、ついつい口をつぐんでしまっていた。

「そっか……そうだよな。色々大変だよな。ごめんね」

幼なじみで、クラスメイトでもある三崎優羽乃は、申し訳なさそうな顔をしていた。容姿端麗、学業優秀、運動神経抜群、祖父は俺達が通う金鷄学園きんしの理事長、父は衆議院議員で、本人はと言うと、この秋から一年生にして生徒会長。絵に描いたような優等生だ。でも優羽乃は、そんな事を一切鼻に掛けず、気さくに友達付き合いが出来るとも良い奴である。

もしミス金鷄学園なる物があつたとしたら、優羽乃は間違いなく三年間、その座を守り通す事になるだろう。

俺とは？ 釣り合わん……俺が勝っている所と言えば、剣道の腕ぐらいだし。そう、俺は剣道二段なのだ！ 凄い？ 小、中と全国大会で優勝してるんだぜ！ 凄い？ でも、そんなの、この恋には

なんの関係もない……試合相手との間合いを読むのは、超簡単なのに、優羽乃との間合いは、いつまで経っても読めんよ。はあ、この恋、叶う訳がないか……

優羽乃は、いつも長くて透き通るような金色の髪を、ツインテールにしているのだが、今日は髪を解いていた。

ツインテールも良いが、ストレートも良いな……ってか、大概の髪型は似合ってしまうんだろう。持って生まれたポテンシャルが、常人のそれとは違うのだ。神様ってのもいい加減なもんだよな。二物どころじゃねえっての……

「それにしても、武尊……元氣そうで何よりね。退院したって言うのは聞いてただけど……心配だから、お見舞いに行こうと思って、先生に聞いたたら、面会謝絶だって言われたもんだから」

優羽乃は、まともや申し訳なさそうな表情をしていた。

気にすんなって……仕方ないじゃんか、そんなの……

「そうだったのか……こっちこそ、すまん。みんなに連絡してなかったよ。退院してからも、なんだかんだと色々あってさ」

優羽乃に頭を下げながら言うと、

「ちょ、謝るのはこっちの方なんだから……お見舞い、行けなくって、ゴメンね」

優羽乃も俺に頭を下げる。

こういうの……苦手なんだよ……

なんとなく気まづくなって、俺は、その場に勝手に混じっている隼と疾風を見た。それに気付いたのか、優羽乃も二人の方を見る。

「んー、何その二人は？ 友達？」

「違う！」

「そうですの！」

俺と隼は同時に正反對の返事をしていた。

「は？ 誰が友達なんだよ？」

俺の質問を無視すると、隼が優羽乃に向かって話し始めた。

「私、隼奉香と申しますわ。遠い地より、この熱田武尊氏を頼って、

出てきましたの」

「私は、疾風朔来です」

ん？　なんか雰囲気が違うぞ。妙にかしこまっているような気がするが……しかも、直立不動だし。もしかして、人見知りでもしてるのか？　俺には全然見知ってねえくせに……

優羽乃は二人の自己紹介を受ける間、ずっと観察を怠らなかった。優羽乃の勘の鋭さは並外れている。こと恋愛に関して以外は。

「私の名前は三崎優羽乃よ。この世界に、ようこそ。あなた達に色々聞きたい事があるんだけど……もしかしたら、何か協力が出るかも知れないし。着替える間、待っていてくれるかしら？」

優羽乃は努めて冷静に言うと、

「承知致しました」二人が声を揃えて返事をした。

これは何かありそうだな……って言うか、この世界についての、どういう事なんだ？　まあ、未来から来たとかいう寝言をほざいている訳だから、分からんではないが……

「じゃあ、その喫茶店で後ほど。勿論、武尊もね」

優羽乃の指が俺を指していた。二人の、優羽乃に対する姿勢が気になるのは山々ではあったものの、今日はやらなければいけない事が山のようにある。

思ったよりも、役所での手続きに、時間が掛かったんだよね……

「ごめん！　今日で用事を全部片付けたいんだ。明日から学校に行こうと思っててさ。だから、また学校で聞かせてくれ」

「そっか……なら仕方ないわね。御兩人共それで良い？」

優羽乃が残念そうな顔をしながら二人に尋ねると、二人はコクンと黙って頷いた。

「そう。じゃあ、着替えてくるから、ここで待っててね。武尊、またね！」

優羽乃は俺に手を振ると、役所の中へと消えた。

「なんだか良く分かんが、お前ら頑張れよ！」

二人は、俺の精一杯の情けを込めた言葉を、聞いちゃいなかった。

二人の視線は優羽乃の後ろ姿に固定され、動かなかった。

もう、良いや……

気を取り直して、父が勤めていた研究所へと足に向けた。

船戸先生から貰った名刺に書いてある住所を頼りに、俺が住む住宅街から少し離れた場所に来ると、小高い丘の上にポツンと研究所はあった。

その研究所は、俺の想像とは掛け離れた物だった。高い塀に大きな鉄扉。それはまるで、小さな監獄という風だった。しかも、昼過ぎだと言うのに、灰色の小汚い建物は、どこか薄暗く感じた。その雰囲気、何故か郷愁を覚える。

ここに来るの初めてだよな……なんだ？ この既視感は……もしかして、幼い頃に来た事があるのか？ いや、でも、そんな記憶はないし。んー、やっぱり初めてなのかな。

「こんな小汚ねえ所で、親父は働いてたのか……」

なんとなく小さく呟いた、その時、静寂を切り裂く悲鳴のような物が聞こえて来た。それは、建物の裏の方からだった。考える間もなく、鉄扉のノブに手を掛けると、力いっぱい押した。大事な研究をしている割に、無用心な研究所だ。鍵が空いていた。暖簾に腕押し状態になった俺は、前につんのめると、盛大に転けてしまった。だけど、痛がっている暇はない。

サッと飛び起きると、悲鳴が聞こえた方に向かって、全力で走った。建物の裏には大きな庭があった。そこには血まみれの白衣を着た女性と、同じく白衣の男性が数人。そして、リュックを背負い、パーカーのフードを深くまで被った、恐らく女性であろう人がいた。その手にはナイフが握られている。

そいつを取り押さえようと、男達が周りを囲んでいる。手にはスタンガンのような物まで見えた。

フードの中の顔が気になる……

そんな俺に気付いたのか、そいつと目が合った。やはり女性だっ

た。どっちが善で、どっちが悪なのかは分からない。

そんな事はどうでも良い……

本能の赴くまま、俺は男達に飛び掛かると、

「早く逃げろ！」叫んでいた。

不思議なもんだな……こんな事に関わり合うために、ここに来た訳じゃないのに。事情も全く分からないのに……

その女性を助けるために必死になっている自分に驚きながら見ると、女性はコクリと大きく頷くと、飛び上がった。身の丈の倍はあろうかという塀の上に、降り立つと、被っていたフードを取った。

「ありがとう」一言残して、女性は塀の外に消えた。

フードを取った女性の顔を見て、瞬間的に思い出した。家の玄関にいた、ルナを成長させたような女の子の事を。

間違いない！

その女の子を追い掛けようと、塀を見たものの、それは、よじ登る事さえ困難な高さだった。絶対に無理だな……ってか、あの子は何者なんだ？ これだけ高く飛べるんなら、オリンピックで金メダルを取る事なんて、余裕じゃないか……

そんな事を考えながら、纏わり付く白衣の男達を振り払い、入ってきた門に向かって走り出していた。無我夢中で走る俺の目の前に人影が見える。

「なんの騒ぎだ？」

どけよ！ ぶつかって……

そう思った時には既に、地面に仰向けになっていた。投げ飛ばされたようだ。青い空が占有する俺の視界に、白髪頭が映り込んできた。

船戸先生……だよな？

「おや？ なんだ。武尊君かね。何か用事ですか？」

その声は、低く冷徹さを感じさせる声だった。

こんなに冷たい声だったっけ？

先ほどの大立ち回り。ルナと瓜二つな女の子。色々と聞きたい事

はあったが、聞く事が出来なかった。聞けば命の保証はない。船戸先生の、声のトーンに、直感的だがそう感じた。

「いや、親父の事で……お礼を言いに来たのですが……」

未だ地面に寝転がっている俺。そんな俺を覗き込む船戸先生は、「そうですか……分かりました。わざわざご苦勞様。そうそう、門は開けたままにしてありますから」

にこやかに言った。

「は、はぁ。では……」

素早く起き上がると、決して後ろを振り返らないように、研究所の外へと出た。早歩き程度だった歩く速度が、どんどん加速していつて、ついには、百メートル走並のスピードになっていた。

ああー！ 助かったー！

どうなるか？ そんな事は誰にも分からない。助かるも何もないのだが、心の底からそう思い、ホッと胸を撫で下ろした。

バスに乗れば、こんなに疲れる事はなかったな……

家に着く頃には、乱れた息も整ってはいたのだが、全身の疲労感が半端ではなかった。

どうなっちまった、俺の人生……急加速、しすぎだろうがよ！

そんな事を思いながら、心を落ち着かせるために、一度大きく深呼吸をした。深呼吸とは不思議な物で、複雑にこんがらがった糸を、緩やかではあるが解いてくれる。

もう、大丈夫……

家に入ると、玄関には靴が一足、綺麗に揃えて置いてあった。

ルナ。もう、帰っているのか……

ただいまを言わずに、そっと家に上がり込むと、抜き足差し足忍び足でリビングの方へ向かった。キッチンで洗い物をしているルナの後ろ姿が見える。

俺の得意技は、飛び込み面なんだ！ 隙だらけだぜ、ルナよ！ 一瞬にしてルナの背後に近付くと、小さな背中をギュッと抱きし

めた。ルナの髪はヴィダルサースーンの甘い香りがした。

「ちょ、お兄ちゃん……ん……」

ルナの小さな吐息が漏れた。ルナの体温、感触。ルナから伝わる全てが、俺を癒してくれている。身体から、今日あった色んな出来事から来るストレスが、激減して行くのを感じた。

ユニケルなんて目じゃない……ルナがそばにいてくれるだけ、それだけで良い。他には、なんにも要らない……

そうやって、本気で思っている自分に、驚きなんて微塵も起こらなかった。

「お兄ちゃん、どうしたの？ 何かあったの？」

「いや、なんでもないよ。驚かそうと思っただけさ。でも、すぐにバレちゃったな。完璧に気配を消したつもりだったのに、やっぱり俺達、心が通じ合ってるんだな」

ルナを両腕から解き放ち言うのと、ルナはタオルで手を拭きながら、降り返り、

「変なの」そう言って、笑った。

もう無理かも……世の、妹がいる男性諸君に敢えて問いたい！

妹の事を異性として見ても大丈夫か？ って、ダメダメダメ！ 妹は妹なんだ！ ルナがいつかお嫁に行くのを、笑顔で送り出してやらないと！ それが兄貴である俺の努めなんだから……

少し寂しい気はしたものの、その後、二人で向かい合ってテーブルにつき、歓談をしながら晩ご飯を食べ、勿論一人で風呂に入り、自分の部屋へと向かった。

明日から、学校に行かないと……俺の中では、たった三日間だけの休みのように感じているが、クラスメイト的には二週間以上も休んでいる事になっている。半年間、いや、学校に行きだしてからだから、九年以上か……

唯々何事もなく、当たり前のようにやって来る、明日は学校という夜。それが今の俺には、とても大切に思えた。

あの未来から来たと言う少女達、ルナを大人にしたような少女。

今日、俺の周りに起こった出来事は、現実なのだろうか？ 長い夢
を見ているのではないだろうか？

疑いたくなるような、長い一日が、ようやく終わりを告げようと
していた。ベッドで仰向けになり、なんとなく天井を見ていると、
急激な微睡みが襲い、今、正しく睡魔に全身を蝕まれようかという
刹那、静かにドアが開いた。

一万画素にも満たない俺の視界。そこに映ったのは、廊下の薄明
るい照明を背中に浴びた、ルナだった。

「一緒に寝ても良い……かな？」

断る理由はない……だけど、一緒に寝たい理由が気にならないと
言えば嘘になる。

「どうしたんだ？」

「ダメ？」

ルナちゃん、質問に質問で返すのはマナー違反ですよ……

でも世の中には、理由がなくても行動をしてしまう事なんて、星
の数ほどあるものだ。

「良いよ。おいで」

ルナをベッドに招き入れた。妹とは言え、女の子と二人、ベッド
に横たわるといふのはなんだか照れ臭いものだ。ルナを背にし、頭
の中を空っぽにして寝てしまおうと努力した。しかし、なんの修行
も積んじやいない俺である。坊主でもなけりゃ、修道士でもない。
ルナの事が気になって気になって、仕方なかった。

さて、ルナはどっちを向いて寝ているんだろう？

頭の中はルナが完全に占領してしまっていた。その時、背後から、
すすり泣く声が聞こえた。

ルナ……だよな？

何があったと言うのだろうか？ 凄まじく気になった。だけど、事
の真相に迫ろうとはしなかった。迫っては行けない気がした。そし
て、いつの間にか、眠りに落ちていた。

第四章 心を奪われる事は、命を奪われる事よりも、辛い事

目が覚めると、横で寝ていたはずのルナがいなかった。頭には、昨夜のルナの小さな泣き声が過ぎった。

もしや……

慌ててベッドを飛び出すと、一階のリビングへと向かった。すると、何事もなかったように、パジャマ姿にエプロンを身に着けたルナが、そこにいた。

「おはよー！ お兄ちゃん」ルナの元気な挨拶。笑顔が眩しかった。ついルナを抱きしめてしまっていた。

「ちよ……お兄ちゃん……昨日からなんだか変だよ？」

お前だって、変だったじゃないか……

「気にするな。もう少し、このままで、いさせてくれ」

ルナは小さく頷いた。

キッチンでやかんが笛を吹き出し、ソッと手から力を抜くと、

「お兄ちゃん、私、幸せ者だね」そう言って、キッチンへと姿を消した。

馬鹿言うな……幸せ者なのは俺の方だ。

気持ちが悪く落ち着き、寝間着にしているスウェットからジャージに着替え庭に出ると、日課である竹刀の素振りをした。

四歳から始め、中学三年の夏まで十二年間もの間続けた剣道。詳細を言おうと、小学五、六年。そして中学二年の時に、全国を制覇している。

まあ、今は、訳あって剣道を続けてはいないのだが……

しかしながら、日課とは恐ろしい物で、晴れた朝は素振りをしないと、一日中調子が悪い。

そういや、昨日は素振りしなかったな……それで、あんな目にあってしまったのかも。

竹刀の先にいるはずもない相手を見据えながら、一心不乱に素振

りをした。

「お兄ちゃん！ コーヒー、冷めちゃうよ！」

リビングから響くルナの声が、俺の集中の糸を裁った。

「うん。すぐ行くよ」

庭から玄関先へと回り込み、郵便受けから新聞を取ると、リビングへと入った。テーブルの上には、勢いのない湯気を上げたコーヒ―が置かれていた。

「ルナ、サンキューな」

コーヒ―をすすりながら、新聞を読む。

大した記事は載っちゃいないな。日本は平和だね……

そんな事を思いながら、新聞をめくった。地方版の記事に差し掛かると、自分の目を疑った。小さな見出しに『未確認飛行物体？』とあった。見出しの下には、分かりにくい白黒の写真が載っている。白い糸の先に黒い点、それが二組。

なんだこれは？ 飛行機じゃないのか？ こんなもん、東スポだけで良いって……本当、日本って平和だよな……

そんなしよーもない記事に、続きに目を通す気も失せ、新聞を手早く畳むと、ソファの上にそつと投げた。

「お待ちせ！」

絶妙のタイミングで、ルナが朝ご飯を運んできた。いつの間に着替えたのか、セーラー服の上にエプロンを着けている。献立はハムエッグにサラダにトーストだった。非常にベタではある。

だが、それが良い……この組み合わせこそ、マイベストセレクションだ。

テーブルの上に二人分が用意され、ルナと向かい合って座り、両手を合わせると、

「いただきます」一卵性双生児のようにピッタリとあった声。

ハムエッグにの黄身の所にマヨネーズで丸を書くと、その丸の中にウスターソースを注ぎ込んだ。マヨネーズの防波堤が崩れないよう、どこまでウスターソースを流し込めるか？ 慎重に作業を進め

る。ルナは、そんな事で一生懸命になっている俺を見て、クスクスと笑っていた。

「意外と難しいんだぜ」

なんとなく照れ臭くなつて、妙な言い訳をしてしまう。それを聞いて、ルナはまたもや笑った。

うぬう……俺の威厳が……ま、良つか！

ウスターソースの溜池を箸で一気に崩壊させると、ハムと白身を引き千切り、口に頬張る。何度か咀嚼し、頃合いを見計らって口の中にトーストを追加する。再び、咀嚼する。それをゴクリと飲み込むと、温いコーヒーを口の中へと注ぎ込んだ。

やっぱり、平和が一番だ……

食事が終わると、ルナが食器をキッチンへと運んだ。俺も自分の分は自分で持って行った。ルナが洗い物をしている間に、身支度が終わる。

久しぶりの学校だし、ちょっと早めに行くか……

「ルナ、今日は早めに出るよ。戸締まり、頼んだぞ」

「はぁーい」

ルナの甘ったるい声がキッチンから聞こえてきた。

新婚さんみたいだな……

玄関で黒い革靴を履きながら、そんな事を思っていると、リビングから未だエプロン姿のルナがヒョッコリと現れ、俺を見ている。

「タイ、曲がってるよ」

「ん？ あ、ああ……」

ルナは慣れた手つきで、タイを真っ直ぐに直してくれた。近付いたルナの顔に、なんだかドキドキする。

「行ってらっしゃーい！」

満面の笑みでルナが手を振っている。少し遠慮がちに手を振り返すと、そそくさと家を後にした。

もう、駄目だ……俺、ルナの事が、好きだ！

朝日を全身に浴び、気が大きくなったのか、心の中でそんな告白

をしていた。

それにしても……この、深緋色のブレザーに暗緑色と深緋色のチェックのストラックス……久しぶりな気がする。やっぱり、二週間以上休んでいたんだろうな……

ちなみに、女子の制服もストラックスがスカートに変わるだけで、同じ配色である。

女子はスカートって、当たり前か？ いやいや、これを当たり前とか言うと、田嶋陽子に怒られちゃうぜ……

早めに家を出たと言っても、部活の朝練の時間には遅いという中途半端な時間だったためか、通学路で知り合いに出会う事はなかった。

教室に行っても、まだ誰も来てないかな？

学校に着くと、心配をしてくれていただろう担任の先生に顔を見せるため、職員室へと向かった。扉を開けると、担任である浅田先生が湯飲みの茶をすすりながら、新聞を読んでいた。浅田先生は、いかにも大和撫子という容姿で、艶やかな漆黒の長髪を後ろで束ねている。剣道部の顧問をしている事からも、大和撫子がピッタリだと思う。中学時代の俺の剣道の実績を知っているものだから、入学当初はしつこいくらいの勧誘をされたものだ。俺が浅田先生のクラスになったのも、それが原因ではないかと、本気で思うくらいの勧誘だった。

まあ、今ではそんな事はなく、落ち着いたものだが……でも、何故か試合の後は、結果を報告してくるんだよね……

ちなみに、俺の親友は、浅田先生の事を『しのののさん』と呼んでいる。何やらアニメのキャラらしいが、俺には詳しい事は分からなかった。

浅田先生は、職員室の入り口に立つ俺に気付き、手招きをした。

浅田先生に近付くと、にこやかな表情をして、

「本当に、大変だったなあ。お前が入院している病院から連絡があったな、面会謝絶だと言うもんだから……何度か忍び込もうとしたのだが、警備員に見付かっちゃってな。どうしたものかと思っていたら、明日から学校行きますって連絡があったもんだから、驚いちまったよ。で、体の調子はどうなんだ？」

浅田先生は立ち上がると、俺の体を観察し、腕やら太股やらを触ると、深く頷いていた。　　って、なんの心配なんだか……入らねえって言ってんじゃん！

そんな浅田先生の奇行を軽く無視し、
「ご心配をお掛けしまして。もう大丈夫です！　家でジツとしているよりも、学校に来た方が気も紛れますしね」

浅田先生は、親指の爪を軽く噛んだ。目付きが鋭く、美形な浅田先生は、そういう仕草が様になる。

「そうかも知れないな。まあ、色々と困る事もあるだろうから、その時は、遠慮なく言って来いな」

そう言うのと、俺の肩をバンツと手で叩いた。

「はい！　ありがとうございます！」

目付きが恐い分、その言葉の優しさが強調される。

スイカに塩、みたいな感じ？

職員室を出ると、そろそろ皆が登校して来る時間だと思い、教室へと向かった。今まで普通に歩いていた廊下が、やけに新鮮に映った。教室に入ると、半分位のクラスメイトが既に来ている。皆が俺の顔を見るなり、

「大丈夫？」とか、

「見舞いに行けなくて、ごめん」とか、そんな声を掛けてくれた。そんな言葉の一つ一つが、素直に嬉しかった。ただし例外が一人いた。そいつは、間もなくホームルームが始まるうという時に、教室に入ってきた。俺と目が合うなり、

「おお！　久しぶりじゃねえかよ！　で、ナースはどうだったんだ？」

朝っぱらから元気が良いこったな……

「朝の挨拶は、おはようございます！　だ。で、どうって、どういう意味だよ？」

俺の軽蔑する視線が、そいつを襲っているのだが、そいつは全く気に掛ける様子もなく、

「そんなの聞くまでもねえだろ？　よくエロマンガの展開にあるだろうが……元気になったナニをアレするような……分からねえかなあ」

そいつは下あごを撫でながら、ニヤけ面で言った。

分からねえし、分かりたくもねえよ……んつとに馬鹿だな！

「ねえよ！　そんなもん！」

あつたつて、言う訳ないだろ？

俺の返事にガックリと肩を落としたそいつは、両手を大げさに広げ、

「駄目だねえ」と言った。

って、この野郎！　ふざけんな……俺は多分、生死の境をさまよっていたんだぞ！　心配するのが先なんじゃねえのか？

「うっせー！　馬鹿！」無性に腹が立ち、大声でそいつに言った。

この大馬鹿野郎とは高校で知り合ったのだが、脳内メーカーで鑑定したら、頭の中はきつとエロ、アニメ、漫画、ロボットで構成されているに違いない。ならはらいと奈良原雷斗という立派な名前が勿体ないよ！

ちなみに、なんだか言い難い名前なので、雷斗と呼んでいる。

自称、ロボ研のエース……まあ、確かにその通りなのだが、部員五名というギリギリ最少人数な上、残る四人は幽霊部員なんだから、自慢出来るような事ではない。しかも、その内の一人は俺だし。

雷斗は、雲丹みたいなツンツン頭で、オタクの割には筋肉質だ。

俺がそれを突っ込むと「ロボット作んのも、結構腕力が必要んだぜ」なんて言っただけだった。そんな雷斗が、またもや突拍子もない質問をしてきた。

「そーい、お前検便してねえんじゃねえの？」

「はっ？」本当に、話の脈絡のない奴だな……

「だから、検便だよ！ お前が休んでる間に、みんなやったんだぜ」
困惑した表情で、そう言った雷斗。

「俺が休んでいる間に、赤痢でも流行したのか？」

「んな訳ねえだろ！ 金鷄祭で喫茶店やるためじゃねえか！」

冗談だろうがよ……何、目くじら立ててんだよ。

「んー、そう言えば……そんな事言ってたっけ……」

「そう言えばじゃねえよ……お前、事故で頭打って、記憶喪失になっ
たんじゃないやねえの？」

って言うか、それマジだから……シヤレになってねえし。

「はあ……俺はお前の事を忘れたかったよ！」

自分に出来る最大限の演技力で、神妙さを醸し出してみたのだが、
「ああ！ コスプレカフェ、ほんと楽しみだぜ！」

楽しそうに言う雷斗。俺の演技は全く効果がなかったようだ。

ってか、俺を無視すんじゃないやねえよ！ 恥ずかしいじゃないか！

んー、待てよ……今、コスプレって言ったよな？ 模擬喫茶をやる
んじゃないかったっけ……

「——コスプレ？ って、よく女子達を納得させられたもんだな？」
コスプレって言っても色々あるだろうけど、コイツは間違いなく、
エロ方向に持って行くはずだし、それはクラス中の皆が分かっている
事だ。無論、特に女子達は……

「いやー、納得してるかは分からねえよ。だけど、この国は民主主義だ。
勿論、クラスの出し物もな。お前が休んでいる間に投票した
らさ、賛成十六票、反対十五票だった。多数決で、賛成多数により
可決。って訳だ」

「ふーん……そうなんだ」

って、ちょっと待て……このクラスは男子十七人、女子十五人っ
ていう、変な男女比率だったよな？ 俺が欠席していた訳だから……
それって、女子は納得してないって事じゃん？ 真っ二つじゃね
えか！

そんな事を考えながらも、頭には、役所で会った優羽乃のスーッ姿が過ぎった。

うん、悪くない……って言うか、むしろ大歓迎だ。雷斗よ！ お前と出会って、初めてだよ。こんなに感謝したい気分になったのは。「あれ、そういや優羽乃の姿が見えないな……」

頭の中のメモリが、優羽乃の事で一杯になっていたのだろう。ふと気になり、口に出してしまった。

「そーいやそーうだな」

腕組みをしながら頭をひねる雷斗。

遅刻……かな？ いや、優羽乃に限って、そんな事はないはずだ。って事は、また爺さんに頼まれて、通訳の仕事でも入ったのかな……ガラガラガラガラッ
教室の扉が開いた。

「しのののさんが来た！」

慌てて自分の席に戻る雷斗。雷斗は浅田先生を、変な渾名で呼ぶ割には、かなりビビっていた。それは高校生活が始まってすぐの頃、授業中にはしゃぎすぎて、指し棒が頭の形に曲がるくらい、叩かれた事があったからだった。

浅田先生が教室に入ってきた。すぐ後ろには優羽乃の姿が見えた。「みんな、おはよう！ まずは、熱田！ 退院おめでとう！」

皆の視線が俺に集まっていた。教室で、こんなにも注目を集めたのは、入学式の日のご自己紹介以来だった。

こういうの……苦手なんだよな……

大いに赤面してしまっているであろう顔を引っ提げ、自然と沸き起こる拍手に、意を決して立ち上がると、頭を掻きながら、

「どうも……」一言が精一杯だった。

これ以上は無理だ……目立たず騒がず、平和にのほほんと生きて行けたら、それだけで良いと思ってんだから。まあ、もう一つ加えるとすれば、ルナがそばにいてくれたら……ん、出来れば、優羽乃と恋人同士に……って、俺、かなり贅沢か？

「もう一つ、嬉しい知らせがある。では、三崎。頼んだぞ」

「はい」

浅田先生が教壇から降りると、引き継ぐようにして優羽乃が教壇へと上がった。

「皆さんに嬉しいお知らせです。季節外れの転校生がやって来ました。それでは、どうぞ中に入って」

優羽乃は俺に向かって、意味ありげにウインクをすると、手を入口の方へ向けた。その合図を待っていたかのように入って来る転校生……が二人。銀髪、そしてカチューシャ……

エッ？ マジで？ どうなってんだよ……

「皆さん、初めまして。私、隼奉香と申しますの。宜しくお願い致しますわ」

隼が、皆に向かって深くお辞儀をしてみせると、教室中から拍手が沸き起こった。それが鳴り止むのを確認すると、疾風は、

「大阪府立江田島高校から転校してきた、疾風朔来っちゅうもんです。よろしゅう」

会心の笑みを浮かべて言った。そんな疾風を隼が睨み付けている。

「あ、私も朔来と同じ高校出身ですよ……」

疾風の独断専行だった訳だな……

二人が綺麗に揃ったお辞儀をすると、またもや歓喜の声が教室中から起こった。俺の目が、頭を上げた二人の目と合った。訴え掛けるような目をする隼と、悪ガキのようにほくそ笑む疾風。

「もう嫌だ……三日連続のパニックだよ……」蚊の鳴くような声で、呟いていた。

事实は小説よりも奇なりって言葉があるけど、なんて上から目線な言葉だっと思う訳ですよ。所詮は人間風情の頭の中にある事が、自然の力に及ぶ訳がないってもんです。今の俺の状況が、正にそれな訳で……

「じゃあ、奉香ちゃん、朔来ちゃん付いてきて。席を案内するわ」
そうだ……朝から不思議に思っていたんだよ。ただの記憶違いか

も？　とかつて思ってたんだけど……

俺の席は、一番後ろで窓から二列目。そして、左、前、右の三つの席が開いていた。こんなに離れ小島のような席だっただろうかと。優羽乃の席は右だった。窓から入る日差しを受ける優羽乃の横顔を、いつも机の上に顔を横向きに置いて見ていたのだから間違いない。という事は、

「宜しく願いますわね」左側の席から隼が言った。

「エヘヘ」前の席では疾風がニヤニヤしながら、こちらを振り返る。救いを求め右を見ると、優羽乃が笑いを堪えるために、必死に口を抑えていた。

なんだってんだ、コンチクショ……本当に、関わり合いになんてなりたくないんだよ、この二人とは！　どう考えたって地雷でしようが！

授業の合間の休憩時間、話し掛けようとする隼を見て見ないふりをし、常に教室を出て行った。

そんな事を繰り返していると、あつと言う間に昼休みになった。

ルナが持たしてくれた弁当を小脇に抱え、鋭い出足で人気のない体育館横のベンチへと向かう。本来なら教室で、雷斗と下らない話をくっちゃべりながら、弁当を食べ、午後から始まる授業への鋭気を養う予定だった。

それなのに……

「見つけた！」優羽乃が俺に、指を指して言った。

「一緒に良い？」

特に断る理由もない。小さく頷いた。

優羽乃はハンカチを出すと、それでサッとベンチを払い、それを敷くとその上に座った。お砂糖一杯の甘い卵焼きを口に頬張りながら、横目でチラリと優羽乃を見る。昼休みに校内、いや地域でトップクラスの美人と、こうして人気のないベンチに二人腰掛けて、昼ご飯を食べる。

トップクラス……になってしまった。隼と疾風も、驚愕の可愛さだしな……まあ、ルナは最初からカウントしていない訳だが。

普通に考えたら、誰もが羨む、超高校生的展開なのだが、今の俺にはプレッシャー以外の何物でもない。優羽乃の口が開く度に、身構えてしまう自分に気付き、嫌気が差した。

ウインナー、ご飯、キンピラ、ご飯、鮭、ご飯、もう一口ウインナー、お茶……

おいおい、何度身構えりゃ良いんだよ？ 優羽乃よ、何故黙っているのだ？ あの二人の事で、何か話があるんだろ？

思えば優羽乃と知り合った時から、何かに付けて相談という名の頼まれ事ばかりだった。小さい時は、逆上がりの仕方や昆虫採集など可愛気のあるものばかりだったが、中学に入ってから面倒な事が多かった。部活の事やら、生徒会の事やら、進路の事やら……友達の彼氏がこうやら、飼ってる犬がそうやら、親がああやら、おじいちゃんがどうやらと。

その度に俺は、事の解決に奔走して来たんだぞ……

勿論、解決出来ない事も沢山あった。お父さんが政界の再編に巻き込まれて、本質とは違う働きを強いられてるんだけどね……って、そんなの俺には、なんにも出来る事なんて思い浮かばん。

俺なりに一生懸命やってきたつもりなんだ。それなのに、優羽乃は俺の事を……なんとも思っちゃいなかった……キスは愚か、二人でデートにすら行った事がない。まあ、そもそも付き合っている訳でもないのだから、当然と言えば当然なのだが。ぶっちゃけて言う、見返りが欲しいんだよ！ こんな美人の彼女がいて、可愛い妹がいてって言うんならさ、両親を一度に亡くしたっていう不幸も、少しは軽減されるってもんだ。やっぱ神様なんて、絵空事にすぎねえのかな……

そんな考え事をしていたために、全く箸の進まない俺だった。優羽乃と言えば、既に弁当を食べ終わっている。終始会話はなかった。弁当を食べ終わるのを優羽乃が待っている気がした俺は、貪る

ように、食べた。そんな俺を見て、優羽乃は笑っている。

って、お前のせいだろうがよ……

「ごちそうさま」澄み透った晩秋の高い空に、手を合わせ言った。

平和な昼休みだな……

そう思った矢先、優羽乃からの一言が、俺にズシリと重たく伸び掛かった。

「あの二人の事、頼んだわね」

優羽乃は俺の目を真っ直ぐに見ている。

そんな目で見るなよ……断れねえじゃん……

今まで受けた様々な頼み事とは違った。いつもなら必ず、相談があるんだけどって言い難そうに言うのが、優羽乃の頼み事のテンプレートだった。

「分かった」そう答えていた。

「ありがとう。当たり前だけど、私も精一杯の協力はさせて貰うから」

俺は黙って頷いた。

優羽乃は昨日、あの二人の話を聞いているはずだ。俺の知らない二人の事情を。こうなる事が分かっていたら、二人の話を直接聞いていたのに……

先に立たない後悔が、俺を襲う。

でもよ、絶対に面倒な事になるって予感があったんだ。あの二人に関わるとな……やっぱり自分自身の性格は、良く分かっているんだ。困った奴を見過ごせないってな。だから、敢えて俺は、遠ざけようとしたんだよ、あの二人を……それなのに……

「そうだ。話は変わるんだけど、相談があるのよねえ」

明らかに困ったような感じの表情で切り出した優羽乃。

これって、いつものやつだよな……って、連発かよ？俺はサンタクロースでもなけりゃ、聖徳太子でもないんだぜ。そんなに沢山一度に聞けるかよ……

そんな考えをあざ笑うかのように、優羽乃は話を続けた。

「クラスの女の子達、今になって恥ずかしいみたいな事を言ってるのよね」

「ん？ なんの事だ？」

「金鵒祭の事に決まっているじゃない」

決まってるはないだろ……お前の考えが全て分かれれば、俺は今頃、お前とのクリスマスデートプランでも立てている頃だろうよ。

「雷斗が言ってたやつか……でも、多数決で決まったんだろ？」

「まあ、そうなんだけどね。でも、一票差だったのよ。で、皆が言うには、武尊と転校生にも聞くべきだって」

まあ、頷けない話でもないな……

「なるほど……」

「私もクラス委員長として、無視出来ない状況なのよ」

優羽乃は思案投げ首の体で俺を見ている。

これもいつものやつだ。自分の答えはもう決まっている癖に……お前は名女優になれるよ、きっと。

「分かった。じゃあ、俺はコスプレに賛成だ」

「……えっ？」

何を驚いてんだ？

「大事な事だから、もう一度言おう。俺は、コスプレに賛成だ！」
だいたいな、こっちはあの面倒そうな二人に関わるんだぞ！ お前のコスプレを拝むくらい、安いもんじゃないか！

「三度言おう！ 俺はコスプレに賛成だ！ 高校に入って、初めての金鵒祭なんだぜ！ 思い出に残るような事をやる方が良いに決まってる。普通の喫茶店の思い出なんて、クリスマスまですら持ちやしねえよ……それに、やらなくて後悔するよりも、やって後悔した方が良いに決まってるし！」

思わず力が入り、遮二無二言っていた。

「その言葉……昨日の武尊に聞かせてやりたいもんね」

綺麗な顔して、こんな皮肉を言うんだもん……もう嫌になっちゃう……

「でもまあ、確かに武尊の言う通りかもね」

優羽乃は考えが決まったのか、大きく頷いていた。

「そうだろう？　で、優羽乃は何を着ようと思っているのかね？」

優羽乃は俺をキッと睨み付けると、

「エロい顔してんじゃないわよ！」

って、俺、そんな顔になってたか？　興味本位で聞いただけなのに……

「んつとにバカなんだから……今の顔を見て決めたわ！　あの二人が反対で同票になったら、私の委員長権限でコスプレはなしだからね！」

「ちょ、そんな勝手は駄目だろ？」

何が駄目なんだか……自分の必死さに呆れるよ。

「もう無理よ！　決めたんだもん」優羽乃は勢い良く立ち上がった。
馬鹿馬鹿！　俺のエロい顔の馬鹿！

「じゃあね。変態さん」

きつい捨て台詞を残して、その場を去った優羽乃。その後ろ姿を見る俺の顔は、きつと物凄く情けない表情になっていたに違いない。
チキシヨ……

「負けてなるものか！」

自らに言い聞かせると、俄然やる気が満ちて来ていた。

このやる気が空回りしないようにするために、どうしたものか……
アイツにギャフンと言わせたいものだが……そうだ！　単純な事じゃないか！　あの二人のうち、一人でも賛成に回す事が出来れば良いんだよ！　問題はその方法か……まあ、考えていても埒があかん。考えるより、まず行動だよ！

猛ダッシュで教室へと戻った。優羽乃が二人に話をしてからでは遅い。教室に入り、ゼーゼーと息を切らしている俺の所へ、雷斗が陰気な顔をしてやって来た。

「おい！　聞いたか？」

もう知ってるのかよ……

すぐにピーンと来たが、必死さをコイツに見せる訳にはいかない。敢えて知らないふりをした。

同士だと思われるの、正直嫌だし……

「何を？」

「金鷄祭の事だよ！ 馬鹿女共が、お前と転校生の意見も聞かないとって言ってやがるんだ。お前、もう聞かれたのか？」

「ああ、その事か……俺は賛成しといた。中止になったら、あまりにもお前が、不憫だからな」

「おお！ よく分かってんじゃないか！ 流石は我が同士よ！」

だから、俺の事を同士とか言うなって！ 女子達が勘違いしちゃうだろ……

「——って事は、問題は、あの二人か」

雷斗は腕を組みながら、女子達に囲まれ談笑している二人を睨み付けた。優羽乃がまだ教室に戻っていない所を見ると、まだ二人には話をしていないようだった。

「ちよっと、行って話をしてくるよ」

様子を窺っていた雷斗が、痺れを切らしたように言う。

「お前、あの二人と話をした事あんの？」

「いや、ない！ でも、同じ人間だもの……話せばきっと、分かってくれる。それにあの銀髪の子。隼奉香って言ったっけ？ あの子と話がしたい！ ってか、コスプレが見たい！ 仲良くなりたい！ 良い切っ掛けになるかも知れん。それじゃあ、行ってくる」

コイツはやっぱり馬鹿だな……どこの世界に君のコスプレが見たいって言って、仲良くなれる女子がいるんだよ……

そんな事を思いながらも決して口にする事なく、傍観を決め込む事にした。二人に手招きをしながら、雷斗は声を掛けた。二人を囲む女子達が激しく抵抗している。

「あっち行け、変態！」

離れて見ていても、雷斗の凹みようが伝わってくる。

流石に言いすぎじゃないか？ 女子達よ……

そんな雷斗を不憫に思ったのか、隼が女子達を制止し、雷斗に対して笑顔で頷いた。雷斗は廊下を指差すと、二人に何かを言ってから歩き出す。隼は、拒む疾風を強引に引っ張って、雷斗に付いて行った。

俺に向かってウインクをする雷斗。正直キモかったが、まんまと誘い出しに成功している雷斗を、俺には蔑む事なんて出来やしない。この分だとうまく行くかも知れないな……

そんな甘い見通しを立て、感心すらしていた。

廊下に三人が出て、二分ほど経っただろうか。廊下から教室に響き渡るくらいの大きな声がした。

「やかましい！ この変態メカニック！」

疾風の声だな。関西弁である事からも間違いない！ それにしても、メカニックってなんだよ？ アイツがロボ研だからか？

疾風は小さな肩を怒りで震わし、教室へと戻って来た。

「まあまあ……」

後ろから、隼が宥めている。更に後ろには、引き攣った顔をした雷斗の姿が見えた。

「超怖えーって！」

俺の所へ戻って来るなり、そんな感想を漏らした雷斗に、

「ギャツハハハッ！ 馬鹿じゃん！」 胃がよじれるほど笑ってしまった。

「てめー！ 笑い事じゃねえよ！ にしても、関西弁って、あんなに恐えのな……」

「で、何言ったら、あんな大声で怒られんだよ？」

「何って、コスプレの説明をだな……奉香ちゃんには、メイド服とかチャイナドレスとかセーラー服とか似合いそうだし、校外からの来場者も、きつと喜んでくれるよって」

「ふむ。で、疾風には？」

「ん？ 朔来ちゃんには体操服とか、無論ブルマな。で、なんだっ

たら幼稚園児が良く着てるスモックとかが良いかもって……そしたらさ、あの様だよ。おかしいだろ？」

「おかしくねえし！　おかしいとしたら、それはお前の頭ん中だよ！」

ヤバい！　コイツ真性じゃん！　もう、笑いが止まらん……

「だいたいさ、高校生に幼児服推奨して、変態じゃなかったらなんなんだよ！」

「いや、朔来ちゃんに推奨するなら確実にロリ服だろ？　俺は間違った事なんか、一ナノも言っていないね」

もう駄目だ！　腹筋が崩壊する……

雷斗を指差して爆笑していると、俺の肩がポンッと叩かれた。振り返ると、隼が後ろに立っている。

「先ほどは、大変申し訳御座いませんでしたわ。朔来の御無礼、きつちりと、注意しておきましたので……」

隼は俺と雷斗に向かって言うのと、体が直角になるほど腰を曲げ、頭を下げた。一瞬にして笑いが止まる。腹筋は幸いな事に、無事だった。そして、そんな隼の行動に慌て、

「いやいや！　コイツが悪いんだよ！　だから、な、頭を上げて！」
雷斗を指差し、睨み付けた。

「そうだよ。ゴメン！　俺が悪かったんだから！　ねっ！　ねっ！」
雷斗もかなり動揺している様子だ。俺達の気持ちが伝わったのか、「御勘弁して下さいようで、幸いですわ」隼は頭を上げ、微笑んだ。

窓から入る秋の陽光を後ろから受け、その笑顔に無機質な何かを感じつつも、そのあまりの美しさに、絶句した。

「ハウウ……」

雷斗の力のない不拔けた声が漏れる。そして、五時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。

「TMT……奉香、マジ、天使だ……」

なんだそりゃ？　馬鹿じゃねえの？　まあ、天使みたいには見え

ただだよ……

そんなこんなで、なんの解決にも至らぬまま六時間目が終わり、ホームルームを迎えた。優羽乃は立ち上がると、浅田先生に対し、緊急議題を提案した。勿論、金鷄祭でのコスプレカフェに対してだった。

「この間の多数決をした際は、熱田君、隼さん、疾風さんが不在でした。金鷄祭まで残り二週間を切っています。なので、今更と思う方もいるかと存じますが、クラス全体で望む事なので、ここはもう一度、決を取ってはどうか？ という意見がありました。喫茶店をやる、という事に関しては全会一致でしたし、もう届け出も済ませているので、変更は出来ません。問題は中身に関してです。コスプレをするか？ 否か？」

「ちよっ、待てよ！」

雷斗は徐ろに立ち上がると、優羽乃の進行を堰き止めた。

お前は、キムタクか？

「今更感がアリアリすぎるだろうがよ！ 何言ってるんだ？ もう決まった事だろ？ 金鷄祭に向けて、皆準備だとしてる訳だしさ……それに、郷に入っては郷に従えって言うだろ？ 多数決をした時にいなかったんだから、決まった事に従うのが筋なんじゃねえの？」

男子達が口々に、

「そうだ！ そうだ！」と、同意の声を上げた。

皆の気持ちは大半が同じで、ただ優羽乃のコスプレが見たいだけなのだ。準備と言っていたが、恐らく雷斗は優羽乃のコスチュームしか用意していない。

「はい！」

教室中に広がった賛否の怒声に負けない大声を発し、疾風が手を上げた。

「では、疾風さん」立ち上がる疾風。

ラスボス登場のBGMが流れ出しそんな雰囲気……

見ると、雷斗の顔色が変わっていた。一瞬にして男子達は静かになった。

「よそから来たんやから、こんな事は言いたくはないんやけど……」
疾風はそんな前置きをしつつも、

「金鷄祭には、校外からの来場者もあるんやろ？ このクラスの女子達を、そんな訳の分からんオッサンらの好奇の目に晒してええと思ってるん？」

オッサンかどうかは分からないが、至極真つ当な意見だった。今度は女子達から、歓声が沸く。俺の目には、途方に暮れた様子の優羽乃の姿が映った。

どうせ、型通りに決を取って終わろうとも思っていたんだろう？ そんな優羽乃と、一寸の狂いもなく目が合ってしまった。「何とかしなさいよね！」と目が語っていた。

仕方がない……

不承不承立ち上がり、

「もう時間がないんだろう？ そもそも多数決をするまでに、色々議論は尽くしてあるんだろうしさ。とっとと多数決すりゃ良いじゃんか？ 同票の場合は、もともとコスプレだったんだから、それを尊重すりゃ良いじゃん」

俺の発言に教室中から、大ブーイングが起こっていた。

男子はともかく、なんで女子達まで？ 有利なのは、お前達の方

じゃんか……

「そうですね……」

力なく、呟くように言った優羽乃が、俺を親の敵と言わんばかりの勢いで睨み付けてくる。

委員長権限を潰されたからって、そんな目で見るんじゃねえっての……

「それでは、反対の方から。挙手をどうぞ！」

優羽乃の声は、半ばやけになっているように感じた。女子達が一斉に手を上げる中、たった一人男が手を上げていた。それに気付い

た男子達からは、落胆の声が漏れる。

「そうだ！ アイツ等付き合い始めたんだった……クソッ！ 忘れてた！」

一際無念そうな声を張り上げ、机を叩いていたのは、無論、雷斗だった。

ってか、声がでかいって……そんなの発表してやるなよ、可哀想に……

雷斗の声が聞こえたのだろう、男の上げた手が、小刻みに震えていた。

「えー、手を下ろして下さい……それでは、賛成の方。挙手を……」
何故か、優羽乃の声が曇っていた。男子達が一斉に手を上げるが、皆上げる手に力がない。

そりゃそうだ……負け戦確定だもん。

「賛成十七票、反対十七票。同票ですので、金鷄祭の出し物は、コスプレカフェに、決定致します」

聞き間違いかと思ひ、優羽乃を見た。優羽乃もこっちの方を見て、溜息を付いている。

ん？ この視線は、俺に向けられたもの……じゃない。

優羽乃の視線を追うように振り返ると、そこには未だに挙手を続けている、笑顔の隼がいた。

男子達から、地響きにも似た歓声上がる。女子達と言えば、思わぬ転校生の謀反にやむを得ないというような、複雑な表情を浮かべていた。

「それでは、緊急議題の採決を終了します。お付き合い頂き、ありがとうございました」

優羽乃は皆に対して深々とお辞儀をした。男子からの拍手喝采、そして、女子の力ない拍手を受けながら。

「よかったですわね」隼がこっちを見て言った。

「ん？ まあね……」

俺が返事をする、間髪入れずにアイツがやって来た。

「奉香ちゃん！　ありがとう！」

雷斗は強引に隼の手を掴むと、握手を強要した。苦笑を浮かべる隼の表情が、新鮮に感じられた。

「イッテー！」

俺には見えていた。目にも止まらぬスピードで、疾風が雷斗の足を加減する事なく蹴飛ばしたのを。

「奉香に近寄んな！　このド変態が！」

疾風の言葉にたじろぎつつも、雷斗は隼の手を離さない。

本当に逞しい奴だな……

「奉香あ、なんでなのよお？」

席に戻ってきた優羽乃が、情けない声を出した。それはとても珍しい光景だった。長い付き合いの俺ですら、優羽乃のそんな声は聞いた事がない。

「だって、お祭りですものね？　普段と違う格好をするのって、楽しそうですわ！　やらなくて後悔するよりも、やって後悔する方が良くてよ」

奉香の顔はパーツと輝いている。

「どこかで聞いた台詞ね……」　優羽乃が俺を睨んできた。

「ちょ、俺を疑ってんのか？」

「俺は何も言っただけだよ！」

全く、我ながら信用のなさに閉口するぜ……

「ってか、お前！　いつまで手え握ってんだよ！」

優羽乃の責めるような視線を交わすためにも、大声で雷斗に言う
と、

「アハッ！　バレたか！」

奉香の手をパツと離し、俺の方へと近付いて来た。

「武尊。明日ってなんか予定あんのか？」

俺の首に腕を回し、グツと引っ張ると耳元で囁いた。

「別にねえけど。急にどうしたんだ？」

「アキバにコス、見に行かねえか？」

そう言った雷斗の顔は、同性の俺が見ても変態そのものだった。

「は？　なんで俺が？」

危険すぎる……俺を巻き込むじゃねえよ！

「暇なんだったら良いだろ？　他にもちよつと見たいもんもあるしさ。それに俺達も一応コスプレしなきゃいけないえしな？」

「え？　マジで？」

「全員参加に決まってるだろ」雷斗はさも当然という顔をしている。

「そうか……分かったよ」

仕方ないか……

「よし、じゃあ詳細は後でメールすつからよ」

「へいへい」返事を聞き、雷斗の力強い腕がようやく俺を解放した。

「じゃあ、部活行ってくるね！　またな！　愛しのハニーちゃん達！」

雷斗は嬉しそうに手を振ると、教室を出て行った。その背中を見ている疾風の目付きが怖かった。

「それにしても、アイツ、なんだか楽しそうだな」

「そうねえ。あんなに喜ばれると、コスプレカフェに決まってよかったかもって、思えてくるから不思議なもんね」

「ああ、そうだな」

なんだか可笑しくなってきた。優羽乃と隼も笑っていた。疾風は未だに怒っている。

「私も、今日は生徒会に行かなきゃ。じゃあ、またね！」

優羽乃は名残惜しそうにしながらも、教室を出て行った。残された、俺と隼と疾風。

「じゃあ、俺も帰るわ！　また、休み明けな！」

「はい」

「ほな」

二人が同時に返事をする。二人に手を振ると、教室を後にした。

校門を出て左へ、次はガソリンスタンドを左へ、踏切を越えて右へ。

「あれ？ お前達……変える方向一緒なのな」

「ええ」

「うん」

「またもや、二人同時。」

俺の爽やかな別れの挨拶を返してくれ！ 赤っ恥じゃないか……そんな事を考えているうちに、家に着いた。後ろにはまだ、二人が付いて来ている。

「じゃあな！」

本日二度目の別れの挨拶だったのだが、二人共一向に動く気配がない。

「俺、もう家に入っちゃうよ？」

黙りこくる二人。

ここに来て無視かよ？ よく分からねえ奴等だな。もう良いよ……ドアを開けて家の中へと入ると、玄関にはルナの靴がなかった。買い物にでも行ってるのかな……

「へー、なかなか綺麗な家やないか」

「ほんと、立派な家なこと」

って、なんで付いて来てんだよ？ あれだけ塩を撒いたと言うのに、玄関という最終防衛線がアツサリと破られるなんて……

「そうね、じゃねえよ！ 何、勝手に人の家に入って来てんだよ？」

俺の当たり前の質問に、二人は首を傾げている。

「何って、優羽乃から聞いてないんか？」

「は？ 優羽乃？」なんで優羽乃が関係あるんだよ？

「そうですわ。優羽乃さんが武尊の家に泊めてもらえば良いよって仰ってらしたの。話は付けておくから、とも仰ってらしたわ」

隼は、何か問題でも？ と言いたげな風だった。

「そんな話聞い……」

ふと、昼休みの事が頭を過ぎった。優羽乃の真剣な眼差しと発し

た言葉が、走馬燈のように思い出された。

優羽乃め……謀りやがったな！

「宜しく願いますわ」隼はニコリと微笑んでいる。

それは、俺の中を漂うどんよりとした暗い影とは対照的な、爽やかな笑顔だった。

約束は約束だし……追い返すような真似をしたら、優羽乃になんと言われるやら。はあ、仕方がないか……

「分かったよ……で、いつまでなんだ？」

「いつまで……とは、どういう意味ですか？」

「またもや二人は首を傾げた。」

「ここに泊めるのは良いけど、いつまで泊めりゃ良いんだよ？」

「それは分かりませんわ。とにかく、目的を達成するまでですよ！」

「目的？　なんだそりゃ？」

「まあまあ、立ち話もなんやし、な？」

疾風は間に入ると、そう言った。

何を勝手に……お前が仕切るんじゃないっての！

そう思いつつも、覚悟を決めると、二人をリビングまで通した。

一応、客人だし……

二人にお茶でも煎れてやろうとキッチンに行くと、後ろから隼が、「私がやりますわ」胸に手を当てて言うのと、俺を押しつけるようにキッチンに立った

「そうか？　なら頼む」

俺が戸棚から出したお茶の入った缶を、隼は開けようと力を入れた。すると、勢い良く空いた缶から、お茶っ葉が大量に飛び出した。キッチンの床が、緑の絨毯に覆われたようだった。

俺がサラブレッドだったら、喜ぶかも知れんけど……勘弁してくれよ！

「やっぱりなあ、やる思たわ。もう、ホンマ不器用やねんから！」

俺と疾風がしゃがんで茶葉を忙しく拾い集めている間、隼は終始あたふたしていた。

「後はうちがやるから、二人ともソファにでも座って、話しといた
ら？」

「そうだな。ありがとよ」

疾風の思い掛けない優しさに、少し驚きつつも、隼を引き連れて、
リビングのソファへと移動した。テーブルを間に挟み、向かい合っ
た俺と隼。

事情聴取といったところか……

「で、さっきの話の続きなんだけど」

「はい」

「目的ってのはなんだ？」

「それは大きく二つありますわ。一つ目は、武尊さん達を敵から守
る事。もう一つは、武尊さんの父親である熱田博士が遺したデータ
を手に入れる事ですわ」

「敵？ 親父のデータ？」なんだそりゃ？

「はい、仰る通りですの。敵は既に、武尊さんの近くまでやって来
ている、と思われれますわ。敵の目的は、武尊さんの捕獲、若しくは
殺害。そして、私達と同じく遺されたデータの取得だと思われま
すの」

捕獲？ 殺害？ 冗談はよせやい！ でもまあ、話の腰を折るの
もなんだし、ここは大人の対応が必要だな……

「おっかない話だな……んー、いまいち話の中身が見えて来ないん
だけど。その親父のデータってのは、なんなんだよ？」

「詳しくは、見てみないと分かりませんわ。ですが、恐らくは洗脳
に関する物だと思われれますの。敵の最大の武器は洗脳ですわ。人を
洗脳し自在に操る事で、間接的ではありますが、我々に攻撃を仕掛
けて来ましてよ。例えば、技術の流出であったり、人間関係の破壊
や構築であったり、その用途は様々ですの。更に申し上げますと、
洗脳されている人間を見破る術もないのが現状ですわ」

隼は困り果てた顔をしていた。その表情に、嘘は感じられない。
話も妙にリアルだしな……

「それが三十年後の話なのか？」努めて冷静に尋ねると、

「その通りですわ。私達をご覧頂ければ分かると思いますが、科学技術は驚異的に発達してしましてよ」

さっきから、って言うか、昨日も見たし。見て何が分かると言うんだよ？

「別にお前達を見た所で、科学の進歩なんて微塵も感じないけど……」

「本当ですか？　　もしや……気付いておられないのですわね。優羽乃さんは一目で気付いておられましたのに……私達は人ではありません。人型戦闘兵器空戦特化甲型。いわゆる、アンドロイドですわ」

「へっ？」

我ながら情けない声が出てしまった。

またまた御冗談を……

俺の疑いの目に気付いたのか、隼は目を閉じ、小さく何か呟いた。すると、体が鈍く輝き始め、隼の体がリビングの天井近くまで浮き上がった。そして、掌をテーブルの上に飾ってある造花に向けると、カメラのフラッシュのように光り、一瞬で造花が溶ける。

手品……か？　　いや……違う……

「ふう……飛びながら、力を最小限に留めるのは、難しい物ですわね」

「って、どうやって飛んでんだよ？　　で、何やったんだ今の？　　最小限って？　　最大限にやるとどうなるんだ？」

頭の中に一切ない情報を突きつけられて、かなり混乱してしまっていた。

「えーっと……飛ぶ事に関してですが……理屈と致しましては、体表を覆っている物質を、分子レベルで高速回転させる事により得られ……」

「もう良い……」

難しい事は無理だ。

「じゃあ、花を溶かしたやつは？」

「あれは、レーザーのような物ですわ。最大出力は、この時代の単位で言うと、六十三ペタジュール。ちなみに、広島型の原子爆弾が六三テラジュールですので、千倍ですわね」

隼は、そんなおっかない情報を、にこやかに言った。

原爆の千倍って……ヤバすぎるだろ！ そんなもん家の中で、やるんじゃねえよ……万が一って事があるだろうが！

「凄い……ってもんじゃねえな、そりゃ。で、そんなのが戦争して、地球は大丈夫なのか？」

俺の頭の中には、金髪で尻に尾の生えた連中が、所狭しと暴れ回っていた。

「ちゃうちゃう。そんな力を持つてんのは、未来でも奉香くらいのもんや。それに奉香の強さは、そこやないねん。むしろ近接戦闘で強さを発揮する。なんせ、そのために造られたんやから。戦闘服の時の腰の刀が、その証拠やわ」

疾風は、お茶を三つ盆に乗せて持って来ると、テーブルの上に置いた。

「いやいや、物凄い火力だぞ……それなのに、近接の方が強いって……意味が分からん。」

疾風に礼を言うと、テーブルの上に置かれた湯飲みを取った。

「いやいや、こんな立派な家に泊まらせて貰うんやから、これくらいはせんとな。罰が当たりそうやし」

お茶を啜ると、良い塩梅の熱さで、濃さも丁度良かった。

嫁としては、疾風の方が上なのかも知れない……絶対にカカア天下になるだろうけど。

「うちは奉香と、ほぼ同じ構成で造られてんねやけど、タイプが違うねん。遠距離戦闘が得意な空戦特化乙型やから」

制服にエプロン姿という可愛い姿で、遠距離戦闘が得意だって宣言されてもな……

「そうか……色々タイプがあるんだな。未来って、当たり前だけ

ど、凄いもんだ！ で、話は戻るんだけど、親父のデータってのは、その当たり前のように凄い未来の研究よりも、凄いという事なのか？」

隼は厳しい顔付きに変わった。

「出来れば話したくはないのですが、敢えて、と言うのなら……」
親父の研究の事なんて、何も教えられてないし……未来がどうこうって話よりも、むしろこっちの方に興味があるんだが……

隼のただならぬ雰囲気を感じ取りながらも、やはり好奇心の攻撃力は尋常ではなく、

「頼む、教えてくれ」隼に頭を下げると、コクリと頷き、

「では……ご存じかと思いますが、武尊さんの父は、脳に関する研究をされてらっしゃいましたの。そして、今から数年後、非人道的だという理由で、人体実験の全面禁止と言う議題がWHOにて採決されますわ。そもそも、先進国では公に人体実験などしていなかったのですから、特に何も問題はないとされてましたの。でも、それはあくまでも先進国の中での話ですよ。世界に名だたる製薬会社や軍需産業は、発展途上国の貧しい人達に対して、密かに人体実験を行っていましたわ」

人体実験……そんなの漫画とか映画とかだけの話じゃないのか？
若しくは、第二次世界大戦中とか……まあ、人体実験と言ったって、俺が考えているような酷い物ばかりではないだろうけどさ……
生唾をゴクリと飲んだ俺に構うことなく、隼は話を続けた。

「ICPOがアフリカで秘密裏に捜査した結果は酷い物でしたわ。
生物兵器の開発は当然のこと、他にも、抗がん剤の開発、HIVの特効薬の開発、放射能が人体にもたらす影響等々、数え上げたらきりがないほどでしたわ。それらは、決して公にはなりませんでしたが、ICPOの懸命な捜査のお陰か、その数は全廃と言って良いほど、劇的に減りましたの」

ICPOって言ったら、俺の中には銭形警部くらいしか思いつかないけど、なかなかどうして、やるもんだな……

「前置きが長くなりましたわ……結局、人体実験は、この世から消え去りましたの。その代償として、人体の研究は減速の一過を辿りましたわ。特に、脳に関しましては……小さな宇宙とまで言われる脳の研究が、非常に難しくなったのですわ」

隼の表情が急激に厳しくなった。

「それは、つまり……どういう事なんだ？」

「非常に申し上げ難いのですが、武尊さんの父である熱田博士は、多くの臨床データを基に、研究をされていらっしゃったようです。未来でも、それは、とても貴重な……最早、入手不可能なサンプリングデータとして扱われていまして……」

隼は口をつぐんだ。

ん？ どうした？ 勿体振らずに、早く言ってくれよ……

隼は何かを決心するように、一つ大きく頷くと、

「臨床データと言いましても、患者を治すためという訳ではなかったのですわ。あくまでも人体を利用し、己の欲望のままに研究を進めるという物でしたの。それは正に、人体実験以外の何物でもないものでしたわ。水も食事も与えず、脳に直接電気信号を流す事により体を騙し、どこまで生きながらえる事が出来るかという物であったり、何十時間も拷問のような苦痛を与え続け、脳波の異常を測定した物であったり……特に、ある二人の女性に対する記録は、酷い物でしたわ。長期に渡って、何度も何度も繰り返し、実験を行っていたようです。その内の一人については、三歳から十五歳になるまで、十三年もの長きに渡って……」

隼は目に涙を浮かべていた。これ以上、隼を苦しめたくはない。

「すまん……もういい……」

人体実験って……しかも、幼女の頃から十三年間とか……親父は、一体何を考えていたんだ？ そんなに研究が大事だったのか……ただの、マッドサイエンティストじゃないか！ 科学って、そんな物なのか？ 多くの人のためなら、一人や二人、犠牲にしたって構わないってのか？ 俺の考えが甘い……いや、断じて違う！ なあ？

親父よ！

親父が生きている時に、これを知っていたら、ぶん殴ってでも止めたのに。悔しかった。親父が、三十年も先まで、非人道的な人体実験をしていた、科学者として名を馳せているという事実が。

部屋のどこを見るでもなく、ただ呆然と見ていた。俺の目には、涙が溢れていた。そして、そんな俺の肩に、そっと優しく手が置かれた。両肩に伝わる、別の温度。隼と疾風だった。

「そないに気を落としたら、あかんよ。そりゃ、研究のためとは言え、やったらあかん事やと思う。せやけど、それによって救われた命、生まれた命だってあるのは事実や。うちらだって、そうやねんで……命って、呼ばれへんかも知れんけど、うちの頭ん中に入ってる基盤は、元はと言えば、人の脳と同じ理屈で出来てるんや。当然そこには、武尊のおやっさんが研究したデータが、ようけ入ってる。そういう意味では、うち、熱田博士には感謝してるんや」

「そ、そうよ！ 武尊！ 元気を出しなさい！ だいたい、あなたが聞きたいって言ったんじゃないの！ わ、私が悪い事したみたいになっちゃうでしょ！」

理屈では分かっているつもりだよ……俺だって子供じゃないんだから……でも、親父だからこそ、許せないんだよ！ 親父とは、あまり接点がなかった……いつも研究の事ばかり気にして、家にいる事だって少なかった。でも、帰って来ると、母さんは、俺には見せない笑顔を浮かべていた。それが俺は、悔しくて、嬉しかった。親父って、凄いつて思ってた。それなのに……

「親父……出て来いよ！ 俺が……俺がこの手で……」

拳を上げると、テーブルに、力の限り打ち付けた。俺の前に置いてあった湯飲みが倒れ、入っていた茶がこぼれた。それでも、何度もテーブルを殴っていた。

「もう、おやめなさいな……武尊……」

隼の声は震えていた。そして、俺の手を掴んだ。振り解こうとしたが、隼の手は微動だにしなかった。隼は、手を掴んだ状態のまま、

俺の頬に、自分の頬を付けた。

「武尊……ごめんなさい……」

その声は優しくかった。耳から入ってくると言うより、脳に直接語り掛けられたような気分だった。子供のように泣きじゃくっている自分に気付いた。

本当なら、知る事のない話……だけど、俺が親父の息子である以上、知って置かなければいけない話……隼、疾風……いや、奉香、朔来。教えてくれて、ありがとう。

「……聞いてらっしゃいますの？ 謝っているのですから、返事くらいしたらどうですか？」

未だ奉香の頬が俺の頬に当たったままだった。

「聞いている……すまなかったな。動揺させちゃって……」

奉香の方に顔を向け、言った。唇と唇が、触れてしまいそうな距離だった。奉香の顔は、真っ赤になった。

「ど、動揺なんかしていませんわ。私は日本帝国軍撃墜王、隼奉香ですの！ こんな事で、動揺なんかしてたまるもんですか！」

奉香は慌てて顔を離すと、俺の手を投げ捨てるようにして離れた。「こんな事……って、ひでえ言いようだな。別に良いんだけど……そうだ！ 二人とも、この家に住むつもりなら、約束してくれ。俺達はもう、友達同士だ。だから、敬語はやめてくれ」

「そうおっしゃいまして……」 奉香は困ったような表情を浮かべている。

無理なの……かな？

「そんなもん、うちは初めっから、そのつもりや！」 腕を組み、朔来が頷いている。

確かにお前は、出会った時から生意気だったもんな……

「まあ、とにかく、仲良くやろう」

変な二人だな……

なんとなく笑いが込み上げてきた。二人も笑っていた。

落ち着くと、ルナが未だ帰って来ていない事を不思議に思い、壁に掛けてある時計を見た。時計の針は六時半を指していた。

「もうこんな時間か……大丈夫かな、アイツ」

「アイツ……って？ 誰の事ですか？」 奉香が不思議そうに聞いている。

「ん？ 妹だよ。遅くなっても、六時を回る事なんてないのに……物騒な事件も多いし、ちょっと見てくるよ」

ソファから立ち上がり、玄関の方へと行こうとすると、朔来がそれを制止するように口を開いた。

「その事なんやけど……」 朔来らしくない、静かな声だった。

「ん、どうした？」

言うか言うまいか、そんな態度が伝わってくる。

「どうしたんだよ？ トイレにでも行きたいのか？」

「アホ！ 違うわ！ ほんま、レディに対して失礼やろうが……その、アレや……その妹って言ってる子……多分、もう帰って来えへんのとちやうかな……」

「は？ どういう事だよ？」

「奉香には言うてへんかってんけど……その妹って、敵のアンドロイドやと思うねん……一昨日の昼に初めて、うちのレーダーが反応して、次は昨日の朝。二回とも、発信源はこの家やったんや」

その言葉を聞いて、奉香が朔来を睨み付けた。般若のような顔だった。

「朔来！ どうして、そんな重要な事を私に言わないの！ 昨日の朝って、私達、この家の近くにいたじゃない！」

流石の朔来も、奉香の怒りに対して、かなり動揺していた。

「そ、そうやねん……でも、まだこっち来て間なかったし……レーダーの調子が悪かったのも事実やし……それに、うちらより先に敵が来てるなんて、思ってもみなかったし……だいたい、この作戦の最優先事項は武尊との接触と保護やったやんか！」

窮鼠、猫を噛む。それは正に、朔来の逆ギレだった。

「それはそうですけど……上官の私に一つも報告がないなんて……寂しいじゃないの……」

奉香は酷く落ち込んだ様子だった。朔来はそんな奉香の表情を見て、自分の過ちに気付いたのか、

「ご、ごめん……」素直に頭を下げていた。

って、何を二人で言い争ってるんだよ？ 俺を無視するんじゃないやねえ！

「お前ら、正気か？ ルナが敵な訳がないだろうが！」

二人に向かって、当たり前な事をハッキリと言ってやった。

「ちゃうねん。そもそも、武尊には妹なんかおらへんねん。うち中にある過去の個人データをいくら参照してみても、武尊に妹なんかおらへんねん」

何を言ってるやがる！ ふざけんなっての……

「ふん！ そんなデータ当てになるかよ！」

俺の言葉が朔来のプライドに喧嘩を売ってしまったようだ。朔来はイライラを募らせながら、「日本版は自国のデータやから正確やねん！ うちの頭の中に入ってる、日本人の、過去六億人の個人データで二〇〇〇年以降なら九九・九九九九パーセントの精度や！ 間違いないで、万に一つもない！」

そんな朔来の自信たっぷりの言葉に突き動かされたのか、急に不安を感じ、猛ダッシュで階段を上がるとルナの部屋へと向かった。

信じてるぞ、ルナ……

ドアを開けた。

そう言えば……俺がルナの部屋に入るのって、初めてだ。

部屋の中は綺麗に片付けられていた。机もタンスもベッドもない。人が住んでいた形跡は、まるでなかった。呆然としながらも、部屋の中を見ると、床に紙切れが一枚落ちていた。その紙を手にとると、そこには丁寧に書かれた、文字の羅列があった。

『お兄ちゃんへ……』

短い間だったけど、本当にありがとう。

私が生を受けてから、色んな人に出会ってきたけど、こんなに優しく接してくれた人は、お兄ちゃんが初めてだった。私、こっちの世界に来て、とても不安だったんだよ。

でも、お兄ちゃんのお陰で楽しく過ごせたんだ。

お兄ちゃんのお陰で、この世界が好きになれた。

お兄ちゃんに嘘をつくの、本当に辛かったんだ……

だから、妹としての最後くらいは、本当の事を言うね。

私、アンドロイドなんだ。機械なんだよ……エヘヘッ、嫌われちゃったかな……

でもね、ちゃんとした感情があるんだよ。

私、お兄ちゃんの事が好き。大好き。

もし、私がこの戦いで命を失っても、平気。

次に生まれてくる時は、人なのかもって……

お兄ちゃんの、本当の妹になれるかもって……思っているから。

お兄ちゃん、ごめんなさい。

P S

他に、しなければいけない事が沢山あるので、少し先にはなると思いますが、

次に会う時、私はあなたの敵です。

あなたと戦うのは、正直嫌ですけど、それが運命なのです。

私達の未来のために、全力で挑みますね。

そして、多分そこにいるであろう二人！

その人を、力の限り、守ってあげて下さい。心よりお願いします。
ルナ』

俺の目からは、涙も出なかった。ただ、立っている事しか出来なかった。本当に悲しい時って、こうなるのかな？　なんて思った。何十秒、何分……経ったんだろう……俺は部屋の窓から、空を見ていた。暗闇に浸食された細い月が浮かんでいた。三日月よりも、もっともつと細かった。ふと、背中に暖かくて、やわらかい感触が

ある事に気付いた。それは俺を抱きしめるでもなく、ただぴったりと、体を寄せてくれている。

「奉香……だよな？」

「はい」

優しい返事だった。

「しばらく、このままで……良いかな？」

「駄目……ですわ。このままじゃ……」

言葉を濁らせた奉香は、俺の肩に手を置くと、その手にそっと力を加えた。その力に抗う気力もなかった俺は、振り返らされていた。目の前には、微笑を湛えた奉香がいる。

「武尊……聞いて欲しい事がありますの」

奉香は真っ直ぐに俺を見つめて、そう言った。俺には、返事をする事が出来なかった。それでも奉香は言葉を続けた。

「私、思いますの。心を奪われる事は、命を奪われる事よりも、辛い事なのかも知れぬと……私達が来た未来には、洗脳が解けず、本当はいない親や兄弟や恋人を、当てもなく探し続けている人達がいまします。そんな人達を皆は『夢人』^{むにん}と呼んでいましたわ。私は、そんな人達を助けてあげたい……本当は戦争なんてしたくない！でも、私には戦う事しか出来ない……だから、戦う事で、そんな人達を、呪縛から解き放ってさしあげたい。そう思いましたよ。もう、見てもらえませんか。悲しすぎて、見るのが辛い……私は未来を旅立つ時に胸に誓いましたわ。一刻も早く、熱田博士の研究データを手に入れて、皆が笑って暮らす事が出来る世界にするって。ヒトは、私達を作ってくれましたわ。その恩を返すためなら、私は、なんだってしますの」

そう言った奉香の目は、一転の曇りもなく澄んでいて、ヒトのモノだとは、思えなかった。

第五章 考えたって、どうせ分かりやしねえんだから

ん？　なんだ、この背中に当たる感触は……柔らかくって、温かくって……心地良い。

寝ぼけながらも、そんな感想が頭を過ぎったものの、本能の赴くままに寝返りをうつと、

「ムギユウ……」

そんな小さな呻き声が聞こえた。目をこすり見ると、ジャージ姿の朔来が、俺の腕の下で、苦しそうな顔をしていた。

「ちょ……重い……」

「って……何してんだよ？」腕を退けると、朔来は嚙み付きかねない勢いで、

「何って、なんやねん！　傷心して寝入った、あんたを、少しでも元気付けよう思て、うちが添い寝してやってたんやん！」

ん……そうか。奉香の言葉を聞いて、放心状態で自分の部屋に戻った所までは覚えてるんだけど……いつの間にか寝てたのか……

「それは、すまん……」

「すまんちゃうわ……別にうちかて、やりたくてやってんちゃうで。奉香が背格好からしてうちの方が適役やうて言うから……」

朔来の俺を見る目が、非難めいた物になっていた。

「分かったって……謝ってるだろ。気を使って貰って、ありがとよ。でもな……一つ忠告だ。俺は男なんだぞ。しかも、思春期真っ只中だ。エロ本を見る事だってあるし、女に興味津々なんだ。だから、理由はともかく、男が眠る布団の中に、入ってくるのはよしなさい。間違いが起こる可能性だってあるんだし……朔来みたいな可愛い子なら、尚更だぞ」

朔来の顔は、デルモンテも驚くほどに、赤くなっていた。

何恥ずかしがってんだよ……もしかして、俺がそんな感情を持っている事を、今、気付いたのか？　妹のパンツを見て、にやけるよ

うな男だぞ、俺は。お前だって見てたじゃないか……そんな顔されたら、俺まで恥ずかしくなって来るよ。

しばしの間、俺と朔来は見つめ合った。それは恋人同士が、キスをする前に、間合いを計ると言うような、良い物では決してなかった。それは分かっている事なのに、やけに自分の顔が熱くなっている事に気付き、嫌気が差した。朔来は俺の目を突かんばかりの勢いで、指を指すと、

「な、な、な、何欲情してんねん！ こ、この変態！」

真っ赤具合がストップ高を迎えた朔来が、なんだか無性に可愛く思い、心の奥底に眠っていた悪戯心が、目を覚ました。おもむろに、俺は自分の顔をグッと朔来の顔に近付けた。それはもう、キスでもするかのような勢いで。「さあ、朝飯にでもするか？」と言うつもりだった。

忘れていた……朔来は戦闘マシンだったんだっけ……

一言も発する事なく、顔面目掛けて飛んできた、朔来の小さなグーの前に沈んだ。

この世の終わりでも見て来たのか、お前は……自分だって悪い癖に……

朔来はとんでもない仏頂面で、リビングのテーブルに着いた。

「冗談だろうが……」

「やかましい！ うちにかて、乙女心いうもんがあるんや。それくらいで済んで、感謝しい！」

朔来はまたしても噛み付かんばかりの勢いだった。それはまるで、狂犬のようだった。

狂犬……見た事ねえけど……多分、こんな感じだよな。

そんな朔来の勢いに圧倒され、失禁しそうなチワワのようになってしまっていた。それを見かねたのか、間に奉香が割って入ると、

「まあまあまあ、朔来も武尊も落ち着いて……ね、皆で朝御飯を頂きますわよ」

見ると、テーブルの上には、ご飯とカップ味噌汁、目玉焼きに納豆にキュウリの漬け物。それが三人分あった。

「奉香、質問があるんだけど、何故三人分あるんだ？」

「だって、三人いましてよ……」奉香は平然としていた。

「へっ？ お前達も食べるの？ ロボットだよな？」当然の疑問だ。

「そうですわ。私達、人と同じ物を食べますの。食べて、消化して、エネルギーに変えるのですわ。まあ、別にガソリンを飲んだって良いですけど、美味しくないですわよね？」

美味しくないですわよね？ って言われても……ガソリンなんて飲んだ事ねえって。

「まあ、想像するに、決して美味くはないだろうな。でも、なんか未来って、凄いのか凄くないのか、良く分からねえや。まあ、食卓が賑やかになるのは良い事だけど」

この輪の中にルナもいたらな………本当にアイツ、どこ行ったんだよ……

そんな事を考えていた俺の顔は、知らぬ間に、少し曇っていたのだろう。それを察知したのか、奉香は手を合わせると元気良く、

「いただきます」

俺と朔来もそれに応えるように手を合わせると、

「いただきます」

誰が見ても、穏やかな雰囲気のリビングだった。それが俺には余計、胸が張り裂けそうなほど辛いし、寂しかった。

コイツらには、それを知られたくない。余計な心配を、掛けたくはないから……

目玉焼きを口一杯に頬張る朔来。一生懸命、納豆をかき混ぜる奉香。そして、台風でも直撃したのかと思うほど、異常に散らかされたキッチン。無理矢理ではあるが、そんな光景を微笑ましく思うようにした。

食事が終わり、後片付けを二人に委ね、ソファで寛いでいると携

帯が鳴った。

チャン、チャン、チャラチャラ、チャーチャ、チャツチャツ
聞き慣れた着信音。メールだ。

『昨日の約束、覚えてるだろうな？』

ラジ館前に3時な！

それと、昨日優羽乃に聞いたんだけど……

あの転校生と一緒に住んでるってマジか？』

差出人は雷斗だった。俺は素早くメールを打つと送信した。

『モチロン、覚えてるよ。』

了解！

それにしても、情報早いな……

あの二人なら今、

キツチンで洗い物をしてくれてる』

送信完了の画面になり、十秒もしない内に、返信が来る。

『えー！　なんてウラヤマシイ奴……』

ハーレムじゃねえかよ！

朔来はどうでもいいが、

奉香ちゃんを連れて来てくれないか？

って言うか連れてこい！　約束だぞ！』

馬鹿か？　連れて行く訳ないだろ？　大体、何故、お前の言う事

を聞かなきゃならんのだ？

『嫌だよ……』

それに、コスプレの衣装見るんだから

男同士の方がいいだろ？』

今度は五秒も掛からなかった。

『バカか？』

世の中にはな、試着という、

有り難いシステムが存在するんだよ！

何パターンもの奉香ちゃんが見れるってもんだぜ。

とにかくだ！

もし連れてこなかったら、

期末テスト、どうなるか分かってるよな？」

そう来たか。ふむふむ……なるほどなるほど。ああすれば、こう来る。とすれば、こう……なるほど、チャックメイトだ。お手上げだよ！ 全く、期末テストを引き合いに出すとは……卑怯なり、雷斗！ 雷斗の力なくして、高得点は無理なんだぜ！

中学の時はそうでもなかったのだが、進学校であるせいか、高校に入ると試験の内容が格段に難しくなったような感じがしていた。

『チッ！』

分かった……』

はあ、嫌な展開になったもんだ。

酷く鬱な気持ちになりながらも、二人と出会ってからの事を思い出し、大いなる疑問が頭を過ぎった。

制服以外は、同じ格好だった……よな？

「そういや、お前らって……通学鞆以外に持ってなかったけど、どこかに置いてあるのか？」

洗い物を終え、リビングに入ってくる二人に向かって聞いて見ると、

「そんなもん、ある訳ないやんか……余計な荷物は、時空を飛ぶのに邪魔になるからな」

時空を飛ぶ……意味が分からん。そもそも、どういった方法で、過去にやってきたのかも知らないし。

「そうです。昨日、優羽乃さんから頂いた通学鞆には、制服や体操服等が入っていたのですが……でも、それがどうか致しましたの？」

奉香は不思議そうな面持ちで、聞いて来た。

どうかしたんですか？ って……学校以外は全て同じ格好で過ごす気なのかよ？ 近所の人達にバレたら、恥ずかしいじゃないか……

「いや、変な事を聞くようだけど、洗濯とかどうするんだ？ 特に下着とか……」

いやいや、下着ってのは、ほんの一例じゃないかよ……そんな怖い顔をして睨むなよ、朔来。

「そう言えば、下着の替えを持っていないですわ……まあ、乾くまでは穿かなければ良いだけの話ですが……」

奉香の大胆発言に、朔来は驚愕した。無論、俺もだが。

「アカン……それは、アカン！ 武尊、下着買って来い！」

は？ 誰に口利いてんだ、コラ！ って言うか、男子高校生が一人で、女性用の下着を買える訳がないだろ？ 無理言うなって……これは、なんとしてでも、二人を買い出しに連れて行かなくちゃな。一瞬にして作戦を練った。

「それは駄目だ。サイズとかも分からねえし。それに、普段着もない訳だろ？ 朔来のごスロリはギリギリセーフだとしても、奉香の服は……流石に駄目だろ？」

朔来は奉香に見えない所で深く頷いていた。

「何が駄目なの？」

何が駄目って……普通に考えりゃ、分かるじゃん。

「いやいや、目立ちすぎるしさ。それに、この時代に合っていないと言うか、なんというか、着てて恥ずかしいくない？」

そう言った瞬間、シマッタと思った。もう少しオブラートに包むべきであったと。奉香の顔付きが、恐ろしい剣幕に変わっていた。怒りで血走っているのか、奉香の目は真っ赤だった。

でかい地雷を踏んでしまったか……

「失敬な事を言うな！ この胸元にある日の丸が目に入らぬか？

これは、正規の制服なんだぞ！ しかも、幹部にしか着る事が出来ない、特別な物……それを恥ずかしいだなんて……言っただけで、悪い事がある！ 訂正なさい！」

奉香のキレた阿修羅のような怒りの表情と、いつもと違う口調に、少しパニックってしまう。

どうすれば良い？ 誰か、教えてくれ……

そんな事を思いながら、朔来を見ると、首を竦めて呆れていた。

どうにかしてくれ……

そんな念を込めて、無我夢中で朔来にアイコンタクトを送った。

「しゃーないな……」

俺の送ったサインに気付いた朔来は、気怠そうに言うと、奉香をきつく見据え、

「奉香、郷に入っては郷に従えやで。こっちに来てから、うちも感じとったんや。奉香と一緒に歩いとして、集まる視線が半端やなかったし」

その視線って、お前も含まれていたんじゃないのか？

思いはしたものの、助け舟を出してくれた朔来を、裏切るような発言は、控えた方が良いに決まっている。朔来の意見を受けた奉香は、肩を落とした。床を見つめ、悔しそうな表情を浮かべている。

「そんな事ないですわ」とか「この服は私の魂ですのに……」とか、何やらボソボソと呟いている。

奉香って、結構面倒臭い奴なんだな……

「分かったって。でも、見に行くだけだったら良いだろ？ 社会見学みたいなもんだ」

俺の提案に、奉香は顔を上げると、

「ま、まあ、見に行くだけでしたら……」

よかった……行ってしまえば、こっちのもんだ。

「そうと決まれば、早速出発だ。そうだ、奉香。刀は置いとけよ」
こんな時にも腰に帯びてある刀。それを指差し言くと、

「え？ あ、そうですわね……」

奉香は素直に刀を外すと、ソファの上に置いた。

「そう言えば……刀で思い出しましたわ！」

軍服のポケットから、剣をモチーフにしたペンダントを取り出すと、それを俺に差し出した。

「これは、博士から預かった物でしてよ。ぜひ渡してやってくれと仰ってましたわ」

「そうなの？ まあ、ありがたく頂戴するよ」

ペンダントが、奉香の手からスルリと俺の手に乗った瞬間、鈍い光を瞬間的に放った。

「今、光ったけど……なんだこれ？」

「なんでしよう……存じ上げませんわ」

奉香はそう言うと、意味ありげに笑顔を浮かべた。

俺達の乗ったバスは、駅前にある巨大なショッピングモールに着した。それは、去年出来たばかりで、若者向けのショップが多く、小さな子供を連れた若い夫婦やカップルで、なかなかの盛況ぶりだった。

軍服とゴスロリを連れて歩くにゃ、正直キツいな……

「なんや、古臭い形の建物やなあ。それに空気も悪いし、人も多いし……ほんま、原始時代みたいで嫌になるわ……」

「嫌になるのは、こっちの方だよ」

「ん？　なんか言うたか？」

「へっ？　別に……」

疑うようにして、俺の顔を朔来が覗き込む。思っている事を、つい口に出してしまった事を後悔していた。

「それにしても凄い人ですわ。こんなに人を拝見したのは、完成披露式典以来かも……」

「完成披露式典？」

「そうですね。私達がこの世に生まれて、全世界に公開されたの。それは物凄い人が集まりましたよ」

まあ、そりゃ、こんなロボットが出来たってんなら、見て見たい気持ちも分からんでもないが……でも、いくらなんでも町に行きや、人は大勢いるはずなんだがな……

「ふーん……盛大だったんだな。そんな注目を集める有名人が町に繰り出しゃ、人も沢山集まってくるだろ？」

「うちら、基本的には外出禁止されてるしな……でも、首都の奈良に近い大阪でも、今の東京よりかは遙かに人が少ないで……」

ん？ 首都の奈良？ どういうこった？

「未来の首都は、東京じゃないのか？」

「ああ、そうですね。東京が壊滅するのは、まだ先の事ですものね」

奉香は顔色一つ変えずに言うと、店の入り口に向かって、ゆっくりと歩き出した。

東京が壊滅……ますます訳が分からねえ……あの大地震だって乗り越えたのに、壊滅なんかする訳がないだろう？ ゴジラでも現れたってのか？

「それは……戦争のせいかな？ 人も少ないって言ってたし……」

奉香を追い掛け、回り込み、目を見て尋ねた。奉香はスツと空を見上ると、少し考えたようなそぶりをし、口を開いた。

「……違いますわ。地震……ですの。東北地方で起こった震災から、順調に復興を遂げていた日本を、再び悪夢が襲ったのですわ。しかも、それは地球上で起こりうる最大の地震、マグニチュード十。震源地は大島の東三十キロメートル地点でしたの。東京だけでなく、関東は、ほぼ壊滅しましたわ。奇跡的な事に、その地震が起こる一年前に首都は奈良に遷都されていましたわ。それだけが不幸中の幸いでしたの。」

「そんなに凄い地震が……また……それって、勿論、生きている間に、起こるんだよね？」

背筋が凍る思いだった。まだ小学生の頃に起こった震災ですら、俺の脳裏には恐怖が深く刻み込まれている。

あれより、凄まじいのが来るなんて……そんな事、考えたくもない……

「そうですね。かなりビビってますのね。あ、それと武尊は勘違いをされてますわ」

いやいや、ビビるに決まってるんだろが……おちよくってんのか？ 「何をだよ？」 自分の声に少し怒気が籠もっているのを感じた。

「未来の戦争というのは、人は殆ど死にませんの。情報戦がメイン

でしてよ。仮に戦闘になっても、閉鎖された空間の中で、アンドロイド同士が戦うのですわ。そもそも、私達は基本的に人を殺す事が出来ませんの。そういうプログラムになっていますわ」

奉香は、アホな生徒に授業を行う先生のような口調で言った。少し腹が立ったのだが、

「へー、そうなのか。だったら、まだ安心だな……」

不幸な未来ばかりでは、生きる希望を失いかねんからな……

「武尊はアホやな！ 昨日の夜に奉香が言うてたやろ。情報戦に置いて洗脳がいかにも厄介か。安心なんか、一ミリも出来へんねん」

「そう言えば、そうだったな」

納得はしますよ……だけど「アホ」ってのは、今、必要かね？

言いすぎじゃないか？ 本当、これだから関西人ってのは……それにしても、地震と言い戦争と言い、前途多難だな……

俺が近い未来に起こるであろう不幸に思いを馳せているうちに、目的のショップの前に着いた。あまりファッションに興味はないのだが、盗み聞きリサーチでの、女子達の会話によると、手頃な値段でトータルにコーディネートしたいなら、迷わずここだという事だ。店内に入ると、ただ広いフロアには、所狭しと商品棚が置かれ、服や小物が綺麗に、見やすいように並べられていた。やけに明るい照明が、とても眩しい。

なるほど、いかにも今時の女子中高生が好みそうではあるな……ってか、詳しくは分からないけど……

開店して、まだ間もないせいなのか、店内の客の数はまだらだった。

よかった……こんな狭い通路に、女子達が群がっている所を想像するだけで、堪ええようなない疎外感が込み上げてくるところだよ。「ふーん。なかなかオシャレな店やんか！ 武尊も隅には置けんな」目を輝かせた朔来が、俺の頭の前から爪先までを舐めるように凝視し、そう言った。

「武尊って、意外とオシヤレのセンスあるよな……いつもここで買
うてんの？」

「いや、ここに來たのは初めてだよ」

朔来さん……褒めて頂けるのは嬉しいのですが、「意外と」って
言うのは、あまりにも失礼じゃないですかね？

そんな事を思いつつも、今日着ている服は、ルナが選んで買っ
てくれた物であって、普段の俺は確かに野暮ったいのは自分でも分か
っていた。だけど、そんな事を公表しても仕方がないので、

「ここは女の子向けのショップだからな。俺には別の行きつけがあ
る。まあ、オシヤレは高校生の嗜みだよ」

腰に手を当て、言ってやった。朔来が、顔を輝かせ、感慨深げに
頷いている。奉香はというと、まだ店の外にいた。店内を覗き込み
ながら、

「ふーん。この時代ではこういう服装が流行っていますのね。なる
ほど……それじゃ、帰ると致しましょう！」

まるで他人事のように言う、そそくさと踵を返し、元來た道を
引き返す。

「待てーい！」

初めての共同作業だった。朔来と見事なハーモニーを奏でていた。
朔来が奉香をダッシュで追い掛け、捕まえると、強引に店の前へと
引き戻す。

「朔来、頼んだぞ！ 見立ててやってくれ！」

「はいな！ ちょっと待ってな」

朔来が奉香の手を握りしめながら、店内に入ってくると、通路を
グングンと進む。ハンガーラックや棚を片っ端から吟味し、サイズ
や色、柄など手早く確認する朔来。奉香も最初は嫌がっていたのだ
が、朔来の服を選ぶ真剣な眼差しに観念したのか、今では一緒にな
って、楽しそうに服を選んでいる。

朔来は、都合良く店員を一人、援軍に付ける事に成功した。微笑
ましいそんな光景を眺めていると、朔来が一人っきりで駆け寄って

来た。

「そういや、予算聞くの忘れとったわ。せっかく奉香もやる気になって選んだのに、買われへんかったら可哀想やし」

「そうだよな。んー……」

意外と優しいんだよな……朔来って……

何気に棚からTシャツを一枚取り、値札を見た。そこには五千円と書いてあった。ラインストーンで装飾が施されているとはいえ、なかなかの値段である。

手頃って聞いてたのに……最近の女子高生の金銭感覚は、どうなってるんだ？ って……最近の男子高校生が思うのも変な話ではあるが……まあ、しかし、今の俺は金銭的に全く困ってない。なんせ、両親の遺産が山ほどあるしな。それこそ、田園調布に家が建つってくらいに！

「金の事は気にすんな。大丈夫だ。それよりも、朔来。お前も気に入ったのがあれば、買って良いんだからな。但し、その……なんだ……」

朔来の黒尽くめの服を見ていた。

「分かってるって……こういう系統以外って事やろ？ ふふっ、うちの本気、見せたるからな！」

朔来は捨て台詞を吐くと、また店の中へと戻って行った。

こりゃ、しばらく時間が掛かりそうだな……

万が一の事を考え、お金を下ろすためにATMへと向かった。

初めての厚みを、尻のポケットに突っ込んだ財布から感じながら、店に戻ると、一人の店員さんが、待ってましたとばかりに、試着室の前へと案内してくれた。

「お二人とも、凄いですよ！ もう、素材が良すぎて。それでは、奉香ちゃん、どうぞ！」

そう言うと、店員は試着室のカーテンを開いた。中には、照れながらもモデル立ちをバッチリ決めた奉香がいた。チェックのキャス

ケットから縦ロールにした銀髪を覗かせ、淡いピンクを基調に花柄をあしらえたチュニツクにファーベストを羽織り、その上に更にデニムジャケットを重ねている。高い位置にある腰のベルトとブーティーが足の長さを際立たせ、大人びたメイクがよく似合っていた。ファッション雑誌のモデルも顔負けだな……って、俺って結構、詳しいだろ？ 母さんがあっちこっちにファッション雑誌を置いていたせいなんだよ。まあ、興味はないがな。

俺の口からは、思わず溜息が漏れていた。開いた口が塞がらないとは、正にこの事だ。軍服の凛々しさとは一味違う女性的な優しさが、奉香から溢れていた。

「続きまして、朔来ちゃん、どうぞ！」

店員は、隣り合っているもう一方の、試着室のカーテンを開けた。中には勿論、朔来が立っていた。漆黒の長い髪をチェックの大きなストールの上に揺らし、白いニット生地を超ミニのワンピースからチラリとデニムのショートパンツが見えた。そして、アニマル柄のレギンスにエンジニアブーツのアンバランスさが、センスの良さを逆に光らせている。幼い顔立ちにキュートなメイクを施し、朔来もモデル立ちを決めていた。

「どや？」

そんな朔来の問い掛けに、ぐうの音も出なかった。コンビニの雑誌コーナーに並ぶ、数多のティーンズ雑誌の表紙でも、こんなに可愛い娘を見た事がない。

なんだよ、この超ハイレベルな二人は！ 人の作りしモノとは言え、完璧すぎるって……余りにも出来すぎていて、一周回って人間にしか見えないっての……

いつもと違う自分を余程気に入ったのか、奉香は鏡に全身を映すと、見入って顔を上気させている。そんな奉香を俺が見ていると、店員が一眼レフカメラを手に、近寄って来ていた。

「あの、是非写真を撮らせて頂きたいのですが……店頭用とHP用なんですけど。ちなみに、店頭用は……」

もう一人の店員が、レジの奥から等身大の写真パネルを持ってきた。そこには笑顔がとてつもなく可愛い女の子が映っていた。

「ってか、これ、ルナじゃん！」

「ちょ、この写真って、撮影したのいつですか？」

「えーっと……もう一週間くらい前ですね。自分用のみならず、お兄さん用にと、何着も購入して頂きました。あんな可愛くて、優しい妹さんを持つお兄さんを、拝見したいものですよ」

いや、既に目の前にいるのですが……

「そう……ですか」

家を出て行ってから、このショップに来たのかと思ったのに、当てが外れた。

「そうそう、奇遇にも、あなたが着てらっしゃるダッフルコートと同じ物を購入されましたよ」

「へっ？」 背中に射るような視線が向けられているのを感じた。

「そうですか？ ま、どこにでも売ってるコートですしね……」

頼む！ 誤魔化させてくれ、店員さんよ！

しかし、そんな俺の思いとは裏腹に、

「そんなはずは……このブランド、うちの店しか取り扱っていませんよ。このブランドを目当てに、遠方から足を運んで頂いているお客様も、沢山いらっしゃいますしね」

そう言う店員さんは、天使のような微笑みを浮かべていた。俺には、その笑顔が、死神の冷笑に見えていた。そして、背中に突き刺さった視線が軽蔑へと変わる。

「何がオシヤレは高校生の嗜みや！ 全部人に買って貰ってるんやん……見損なったわ」

朔来の一言は、俺の心をえぐった。顔から火が出そうな気分だった。力なく店員さんを見ると、申し訳なさそうな表情をしていた。

「写真、やめときましようか？」

ふっ、気を遣って下さるな、店員さんよ……

「これ以上は厳しいかも知れませんが、出来るだけ可愛く撮ってあ

げて下さい」

敢えて胸を張り、言っちゃった。

「はい！ 勿論！」

店員さんの心地良い返事が店内に響き、二人は一眼レフカメラのレンズの前で、思い思いのポーズを決めた。二人の弾けた笑顔が眩しかった。朔来の機嫌も戻ったようだった。

現金な奴だ。って、ちょっと待て……俺、この後、この二人と一緒に、秋葉原に行くんだったよな……

ふと試着室の中にある鏡に、自分の姿が映っているのが見えた。それは可哀想になるくらい、貧相な容姿だった。

「見た目がなんだってんだ……男は顔じゃない、中身だ！」

自分で言ったりや世話ないって……もう、いいや……

諦めムードで会計を済ませようと、レジへと向かった。そんな俺を見て、申し訳なさそうな、でも満足気な奉香。そして、何故か腕を絡めてくる朔来。

「お会計は、十四万円になります。写真を撮らせて頂きましたので、サービスしておきましたよ」

「は、はい」ニコリとエビス顔の店員に、代金を支払った。

何か月分の小遣いだってんだ……計算出来ん。その笑顔、プライスレス……んな訳ねえだろ！

「またの御来店、お待ちしております」

なんとなく貧乏性が発揮されたのか、渡されたレシートを凝視していた。

全品三割引……マジか！ それなのに、この値段……恐るべし女子！

少し目眩を覚えながらも、大きな買い物袋を持って、嬉しそうに歩いている二人を見ていた。その幸せそうな光景に、金の事なんか、どうでも良くなって来る。

プライスレス！ やっぱり恐るべし女子！ 一足早い、クリスマスプレゼントだからな！

その後、ショッピングモール内のレストランで昼食を済ませ、家に帰った頃には、雷斗との待ち合わせに向かう、良い時間になっていた。買ってきた荷物をリビングのソファの上に置くと、

「忙しなくてすまんが、また出掛けるぞ」

奉香を見ると、被っていたキャスケットを脱ごうとしながら、驚いた表情で、

「え？　またですか？」

「そういや、雷斗との約束の事、言っていなかったっけ……」

「次は、どこ行くん？」興味深そうに尋ねてきた朔来に、

「秋葉原だよ。雷斗が待ってるから」応えると、

「アキハバラって……あのオタク達のユートピアと言われた、伝説の場所やんな？」

女子高生が顔を輝かせるような場所ではないと思うんだけどな……

「は？　ユートピアだか伝説だかは知んねえけど……オタクが集まるってのは、当たってるかな」

「おお！　マジで！」

朔来は未だキャスケットを脱げずにいる奉香に抗議の視線を向け、「いつまで帽子と戯れてんねや……早よ行くで！」

急かされた奉香は、未だにキャスケットを脱げないでいた。キャスケットがずれないよう、ピンで髪に留めてある事に気付かなかっただけらしい。奉香は、ガチャガチャのカプセルが硬すぎて、自力で開けられない時の子供のような顔になっていた。

奉香って、まあまあ鈍臭いよな……

朔来に手伝って貰い、ようやくキャスケットから解放された奉香は、それを思いつ切り床へと叩き付け、

「二度と被るもんですか！」と言った。

「ってか、せっかく買ってやったんだから、大事にしろって……」
床の上でペシャンコになったキャスケットを見て、そんな事を思っていた。

午後三時少し前、俺達一行はラジオ会館前に到着した。

「俺達の方が早かったみたいだな」

「女の子を待たせるやなんて、ほんまあの変態は……って、ん？」

レーダーに反応あり……武尊、後ろ！」

「へっ？」気付いた時には、首の裏が熱く、痛かった。

何が起こっているのかを確認するために、振り返ると、そこにはブルゾン姿の雷斗が立っていた。俺に向けて、左手を真っ直ぐに構えて。

「おお！ すまん、すまん。どうも微調整をミスったようだな」

は？ 何言ってるんだコイツ？

「てめえ！ 何やったんだ？」

キレ気味の俺に怯んだのか、雷斗はオドオドしながらも左手の袖口から懐中電灯のような物を取り出すと、

「これだよ、これ！ レールガン見てたら作りたくなってよ。徹夜したかいあって、ようやく試作機が出来たんだ」

嬉しそうに言いやがって……俺の怒りが伝わってるのか？

「なんだよ、これは？」

心のざわつきを沈めながら、冷静を装って聞くと、答えは違う方向から返って来た。

「レーザーのような代物やね。うちのレーダーに反応するくらいや……ただの玩具ではないな」

「流石、朔来ちゃん！ するどいね。最初はレールガンを作ってさ、コインを飛ばそうとしたんだけど、いまいちロスが多くてさ……で、電気で物を飛ばすより、電気そのものを飛ばそうと思った訳。まあ、自分の好奇心が悪いんだけど、材料費だけで夏コミの儲けがパーになったよ。ところで、レーダーってなんの事？」

しまったと言うような顔をして、朔来が助けを求め、俺を見ている。

困った時だけなんだよな、可愛い顔で俺を見てくるのは……

雷斗の素朴な疑問を振り払うため、思いつ切り雷斗の頭を殴ってやった。そんな俺の行為は、誰に非難されるものではない。至極当然だ。だって、まだ首の裏が痛いんだもん。

「チェッ！ 何すんだよ……俺だってな、危険な事くらい、百も承知だってえの。でもな、こんなアニメから飛び出したみたいな美少女を、二人も連れて立ってりゃ、首の一つくらいはふっ飛ばしてやろうって思うのが、男ってもんだろ？」

どんな男論だよ……そんな事、誰も思わねえし、思うんじゃねえって！ 完璧にやりすぎじゃねえか！ ムカムカして吐き気がするぜ！

胸を押さえつつも雷斗を見ると、何故かおもむろに奉香に近付いて行く。そして、突如として、

「奉香さん！ ぼ、僕と結婚してくれませんか？ 僕、経済力と包容力には自信があります。きつと、あなたの事を幸せにしてみせますから！」

俺の口は余りの雷斗のバカッぷりに、ポカンと開いて、塞がらなかった。朔来も啞然としている。

一体全体、コイツの頭の中は、どうなっているのだ。親父よ、女の子の頭を解剖するより、雷斗を解剖したらよかったのに……

「せっかくの申し出ですけど、ごめんあそばせ」

断った奉香の表情は、素、そのものだった。雷斗は馬鹿丸出しの顔で、空を見上げている。

「確かに雷斗さんは凄い発明家ですわ。優しいお方ですし。でも、研究に夢中になりすぎて、三度も奥さんに逃げられていますの。そのような方とはちょっと……」

そんな奉香の言葉は、あっさりと渾身のプロポーズを断られ、無になっている雷斗には聞こえない。

本当に良い気味だ。それにしても、嫁に三度も逃げられるって……でもまあ、三度も結婚出来たんだから、幸せだと言うべきか。依然棒立ち状態の雷斗を、このままにしておく訳にもいかず、

「おい！ 行くぞ！」

雷斗の肩をむんずと掴むと、強引に歩かせた。一度は転けそうになりつつも、持ち前の運動神経の良さなのか、なんとか体勢を立て直し堪えた雷斗は、夢遊病を患っているかのように、ただ呆然と歩き始めていた。そんな雷斗に一抹の不安を覚えながらも、秋葉原の事など一切分らない俺達は、後を付いて行く事しか出来なかった。初めて来た秋葉原は、土曜の午後だという事もあってか、噂と違わず、人でごった返していた。歩行者天国になっているにも関わらず、真っ直ぐ歩くのは、ほぼ不可能だった。

今日は寒いくらいの気温で良かった。真夏なら暑さと臭さで、卒倒しかねない。

そんな事を思いながらも、前を歩く雷斗に必死に食らいつき、且つ後ろを歩く二人からは目を離せず、中間管理職のサラリーマンの大変さが、骨身に染みて分かったような気がした。

ふと朔来を見ると、辺りをキョロキョロと物珍しそうに見て、顔を輝かせていた。

「ゲーム……メイド……アニメ！」

そんな呟きを繰り返している。奉香はと言えば、高いヒールの靴に悪戦苦闘し、フラフラと千鳥足で、何度も躓きながらも、懸命に前に進んでいた。

雷斗は、呆然としながらも、目的地がハッキリとしているようで、その足取りは意外にもしっかりとしていた。中央通りを末広町に向かって進む。

「ったく……俺の事も考えろよ。歩くの速すぎんだろがよ！」

二人に同意を求めようと振り返った。すると、朔来はおもむろに立ち止まり、ゲームショップの店頭に張ってある、一枚のポスターに見入っていた。

「そっくりかも……」

朔来の後ろにいた奉香が、ポスターのキャラクターを見て呟く。そのポスターは『レーヴァン』というアニメの物らしい。全く知ら

ないアニメだが、書いてある内容を見ると、『譜吟^{ふぎん}』という名のヒロインらしかった。真っ黒のゴスロリ衣装で、頭に薔薇のついたカチューシャを付けた女の子だ。目がやたら大きく、こっちに向かって指を指し、蔑むような表情をしている。その醸し出す雰囲気は、確かに朔来によく似ていた。

この絵……どこかで見た事あるぞ。

何気なく雷斗の背中を見ると、ブルゾンの背中に譜吟がいた。こっちに指を指し、蔑むような表情をしている。

なんか、むかつくんですけど……

「武尊、どうかしましたの？」

奉香が俺の怒りで強張った顔を不思議に思ったのか、そう尋ねてきたので、どう返答して良いか分からず、

「ほら、早く行くぞ。今のアイツの頭の中には、きっとコスプレの事しかないんだから。多分だけど、俺達の事を忘れてやがんだよ」

そう言って、小走りで雷斗を追い掛けた。雷斗は豚骨の強烈な香りが鼻腔をくすぐる場所で立ち止まると、路地を左へと入った。小汚いビルの一階にあるガチャガチャ専門店。雷斗は躊躇する事なく中へと入って行く。

どこだよ、ここは！　こんなトコに、店があるのか？

そんな疑問が浮かび上がりながらも、こと秋葉原に関しては雷斗を信用するしかないと思い、奥のエレベーターで上の階へと向かった。エレベーターを降りると、そこには所狭しとガラスケースが置かれ、中には幾つものフィギュアが並べてあった。

「着いたぞ」

雷斗は素っ気なく言うと、更に店の奥へと入って行く。黙って付いて行く俺達。

「まあ、ちよつと値は張るが……自作する時間もないしな」

雷斗はそう言うと、ハンガーラックから服を一つ取り出した。

「奉香ちゃん、これ、どうかな？　一応、目星は付けてたんだよね」
それは黒い軍服だった。

ってか、なんでまた軍服なんだよ！　せつかく、大枚叩いて今風にしてもらったのに……

「雷斗さん、それは無理ですわ。敵国の軍服を着る訳にはいきませんから」

即答した奉香に、雷斗は目を丸くした。

そりゃ、そうだ……そのリアクションは正解だ。奉香の事、なんにも知らないんだもんな。ってか、当たり前だけど、敵国ってあるん……だな。

流石に気まずさを感じたのか、奉香は雷斗の取り出した制服を今一度マジマジと眺め、

「雷斗さんは、こういったものがお好みなの？」そう聞くと、

「好みですよ、うん。奉香ちゃん、今日は髪型が違うし、化粧してるから、少し印象が違うんだけどね。昨日の感じだと、男勝りな凛々しさみたいなもんを感じたから、軍服が良くなって思ってたさ。これ、カールスラント軍のなんだけど……」

「カールスラント……聞いた事がないですわね。でも、この雰囲気は拝見した事がありますわ。確か、ドイツの物だったと……」

「そうそう！　作中ではカールスラントってなってるんだけど、本当はドイツなんだよね」

話し込むのは良いけどよ、置いてけばりは勘弁してくれよ……

未だその制服を見ている奉香は、素朴な疑問を雷斗に投げ掛けた。

「これ……ズボンはございませんの？」

「ん？　ああ。下はパンツだよ。パンツじゃないって言うてるけど、どう見てもパンツだね。でも、流石にパンツだと丸見えになっちゃうから、ブルマで代用するつもりだけど……」

途中までは微笑んで聞いていた奉香だったが、最後のブルマ発言が癪に障ったらしい。怒りに満ちた顔で、雷斗に迫った。

「はぁ？　あんた、何言ってるの？　軍服にブルマって……戦争舐めんじゃないわよ！　フザケンナ！」

またもや目を丸くした雷斗の口は、腹を減らした鯉みたいにポカ

ンと開いていた。その目には、奉香の予想外の言葉が応えたのか、涙が溢れている。

思ったね、ヴァーツカ！　って……

「雷斗！　ちょっと待ってなさい！」

「は、はひ……」

雷斗は空気が混じりすぎた返事をする、ただ棒立ちになっていた。試着室に入った奉香は、一分もしない内に出て来ると、いつもの軍服姿で颯爽と現れた。

早い！　って言うか、その服、どこに持ってたんだよ！　どんな構造なんだ？

「ご覧なさい！　これが真の、戦う乙女の姿ですわ！」

化粧や髪型のせいで、いつもと印象は違ったが、その言葉を裏付ける力は、大いにあった。本当によく似合っている。雷斗も奉香に軍服を奨めただけに、同じ事を思っているようだ。

「す、凄え……なんだよ、このデザイン！　メチャクチャ格好良いじゃんか……しかも、超似合ってるし！　やっぱり俺の目に狂いはなかった。ところで、この服って何のキャラなの？　アニメ？　映画？　俺、こんなの見た事ねえよ！」

大げさなボディアクションで、両手を広げながら、奉香にゆつくりと近づいていく雷斗。後ろの方では、騒ぎに気付いた店員さんや他のお客さんが、奉香の軍服の余りにも高いクオリティーに驚いている。

「アニメだの映画だの、そんなもんじゃないわよ！　バカじゃないの？　これは日本帝国軍の大隊長以上だけが着衣する事を許される、制服なのよ！　これを着る事で己を律し、清い体と心で戦いに望むの！　ほんつと……これだから、平和ボケした連中は……」

「奉香！　落ち着けて！　頼むから、ね！　皆が見てるしさ……」
俺の言葉にハッと息を飲むと、顔を真っ赤にして試着室のカーテンを閉めた奉香。周りの客が、

「スゲエ迫力！」　だの、

「厨二病だ……」のだと、口々に言っていた。

一緒にいる俺も恥ずかしくて、顔から火が出るようだった。

「雷斗、もう帰ろうぜ……」

そんな俺の申し出に、雷斗は大げさに首を横に振ると、

「まだだ。まだ終わらんよ……朔来ちゃんがいる。ね、これなんか
どうかな？」

ハンガーラックから服を取り出すと、朔来の前で広げて見せた。

それは、やはりと言うべきか、真っ黒いゴスロリだった。

「別に着たつてもええんやけど……」

腕を組むと、天井を見上げ考える朔来。何やら思いついたのか、
大きく頷くと、

「それ着たる代わりに、ゲーセン奢ってや！　うち、ゲームやりた
い！」

ゲームって……小学生か、お前は……

「そんな事で良いの？　全然OKだよ！」　こういう時の雷斗は、本
当に嬉しそうな顔をする。

「ほんまに？　よっしゃ！」　朔来は小さなガッツポーズを作ると、

奉香が出てきたばかりの試着室に入って行った。

朔来を見届けると、出て来た奉香に対して雷斗は顔を曇らせ、

「本当にゴメン……奉香ちゃんが、そんなに軍服に対して思い入れ
があるなんて、知らなくて」

そりゃそうだろ……軍服に思い入れの強い女子高生なんて、少な
くとも、俺の周りにはいないしな。別に頭を下げるほどの事じゃね
えって。

「そ、そんな……頭をお上げになって。こちらこそ、ごめんなさい」
陰鬱な雰囲気を変えようとしたのか、奉香はハンガーラックから
他のコスチュームを一枚ずつ確認して、

「私は、これが良いかな……」

手にしていたのは、ありふれたメイド服だった。至極無難な選択
だ。

「なるほど……って事は、猫耳カチューシャが必要ですね」

猫耳って……ってか、なんだよその喋り方は！

「ネコミミ……ですの？」

奉香の顔付きが、またもや曇っていた。

もう勘弁してくれよ……いつまでも、オタクに付き合ってらんねえっつーの。

「このキャラは、猫耳が必須なんだよね……」

当然だと言わんばかりの雷斗。小物コーナーに行くと、二つのカチューシャを手に、戻って来た。一つは猫耳。そして、もう一つは薔薇付きのカチューシャ……

それは……

「朔来ちゃん、これも着けてね」

雷斗はカーテンの端からカチューシャを押し込んだ。朔来にうまく渡せたようだ。暫くして、試着室のカーテンが開いた。そこに立っていたのは、いつもと少し雰囲気の違いゴスロリ姿の朔来だった。頭には、薔薇が二つ乗っている。そして、朔来は真っ赤な顔をして、恥ずかしそうに雷斗を見ていた。朔来の視線を受けた雷斗は、小刻みだが、しっかりと震えていた。

「ふ、譜吟たん……マジか？ ほ、本物じゃねえか！ 堕聖天、降臨、キター！」

お前はサンテFXの織田裕二か！ 手を突き上げるな！

「ふっ……ヒト如きに見抜かれるとはな。余の妖力も落ちたものだ……さあ、かかってらっしゃい！ 体にある数多の孔という孔から溢れ出す紅血の舞踏が、回天の宴には丁度良い催事となるのだから！」

って、朔来さん！ キャラ変わってますって！ なんだよ、この展開！

俺にはさっぱり意味が分からんが、雷斗にはそのセリフが心を打ったようだった。力尽きたように、床に突っ伏している。彼のライフは、もう、ゼロだった。

「さ、朔来ちゃん……俺は馬鹿だ……気付かなかった……今まで俺は、何をやっていんだ……暇さえあれば見ていたのに。俺の愛する、ただ一人の嫁なのに……うう……」

キメー！ マジキメー！ 友達を選び方を完全に失敗した……つてかよう、号泣してんじゃねえって……馬鹿なのは、誰もが認める所だけだ。

「解せぬ！ 何故、慟哭する……涙の価値も解らぬ、虫けら風情が……ふっ、まあ良いわ。虫けらには、この清冽な荒れ果てた地が、映えおる。そう！ 虫けらは虫けらしく、地を這いつくばって生きるが良い。さあ、愚民共、余に付いてらっしゃい！」

朔来は俺と奉香の腕を引っ張ると、店を出ようとした。すると、
「お、お客様困ります。着て行かれるのは結構ですが、お会計の方を……」

「ふっ、賤民が……ぬかしおるわ！ しかし、言挙げした事も道理。自家薬籠中の物とした。その地に這いつくばっている虫けらに腐心なさいな」

もはや、意味が分からねえよ！ それ、日本語か？

「は、はい……」

ってか、良く伝わったもんだな。

雷斗に会計を求める店員さんを見て、朔来の発言の意味がようやく分かった。

ほんと、店員さんを困らせるんじゃねえよ。でもまあ、この際会計は雷斗に任せるか。俺の財布のライフも、ほぼゼロだし。

なんだかんだとありながらも、無事にコスプレショップを出た俺達（虫けらを除く）。

「あは！ めっちゃ、おもしろかったわ！ うち、憧れとってん！ 戦ってる時に、あんな言うたら奉香に張り倒されそうやし……」
そんな事を言いながら快活に笑う朔来の顔を見ると、こっちまで楽しい気分になるのが不思議だった。一方、奉香は、なんとも

言えない複雑な表情をしていた。

「私、朔来の事が分からなくなって来ましたわ……いつの間にある台詞を覚えたの？」

そう言うと、朔来の目をジッと見つめていた。その目に耐えられなかったのか、朔来はいたたまれないように、

「うち、初めての戦闘の時に、ボロボロにやられたん覚えてる？」

「当たり前ですわ……私、上官として悔しかったもの……」

「いや、あれはうちが調子に乗りすぎたからやし……それで、あの後うち、修理のために研究所に長い事入ってん。そんな時に、博士がずっと、うちに似てる娘が出て来るアニメ見とったんや。最初はなんやこれ？　って思ってたんやけど、回が進むに連れて、段々おもしろなってきてな……うちら、あんなん見るの禁止されてるやんか。せやから、余計やと思うねんけど」

「それで、急に制服を着なくなりましたの？　軍規違反なのに注意されない事を、不思議に思いましたよ。博士が諸悪の根源でしたのね！」

「そうそう。だって、あの服用意してくれたん、博士やし」

詳しい事が、さっぱり分からない。それは未来の話だった。

「せやけど、まさかやで……この時代のアニメやったんやな。こんな完璧なコスチュームが手に入るやなんて！　思わずキャラになりきってもうたやん！」

興奮気味に話す朔来の背後に忍び寄る、薄汚れた影。

「イマイチ話は掴めてねえけど、なかなかセンスのある博士じゃないか！　いつかソイツ、俺のライバルになるかも知れねえな……」

虫けらの完全復活だった。しかも、金の事で一切の苦情がない。その精神力……感服だぜ。

奉香と朔来は、そんな雷斗のセリフを聞いて、何故か笑い転げていた。

「ちよ……何がおかしいんだよ！　さあ、約束通りゲーセン行くぞ！」

雷斗は照れながらも言うど、リーダーシップを発揮し、またもや先頭を歩き出した。

UFOキャッチャーで出来た通路を奥へと入っていくと、そこにはゲームの筐体が、綺麗に配列されていた。そんな光景を見た朔来のテンションが、更に上がったように見えた。

「で、何がやりたいんだ？」

さっきはその姿に涙するほどだったのに、もう慣れてしまったのか、雷斗は今までと同じように朔来に接している。

「んー……対戦ものを一通りやな。片っ端からやっていくから、お金！」

雷斗の前で、両手を受け皿のようにして構える朔来。なんだか微笑ましい光景だった。

「へいへい……」

雷斗は傍らにある両替機に一万円を入れた。メダルを入れるために置いてある、バケツのミニチュアのような容器に、百円玉が詰められている。

高校生の癖に……金持ちすぎだって！ もしや、コイツ……カツアゲされないために身体を鍛えてるんじゃないか？

「ほいよ！ これだけありや、十分だろ？」

雷斗が百円玉入りミニチュアバケツを、朔来の掌の上に乗せた。

朔来は目を輝かせながら、躊躇なく、それを受け取ると、

「おおきに！ ほな行くで、奉香！」

「えっ？ 私？」

あからさまに驚いている奉香。それを見て朔来はニヤリと不敵に笑った。

「そうや！ いつもシュミレーターでやられっ放しやったからな

……リベンジや！」

「どういう事ですよ、それは……」

問答無用で朔来は奉香の手を引くと、一台ずつ筐体を吟味しながら

ら、更に奥へと入って行った。残された俺達二人。どうしたものかと考えていると、雷斗は俺を見て、意味ありげにほくそ笑んだ。

「あのよ……気になる店があるんだけど。一緒に行ってくれないか？」

怪しい！ 怪しすぎる……

「気になる店って、なんだよそれ？」

「まあ良いから！ 付いて来いって」

雷斗に腕をギュッと掴まれ、強引に外へと連れ出された。

不満たらたらの俺を完全に無視した雷斗に連れて来られたのは、秋葉原駅のほど近くにある、アダルトグッズ専門店だった。ビル一棟、全てがそうだと言うのだから、たまげる。

「マジか？ ここになんの用だよ？」

「まあまあまあ……」

俺の質問に答えろって！ 何ニヤニヤしながら腕を引っ張ってんだよ？ ポン引きか、お前は！ マジで気持ち悪いって……チクシヨー！ これでつまらなかったら、絶対にボコボコにしてやるからな。剣道二段の俺を舐めんなよ！

抗うのも面倒になり、雷斗に案内されるがまま、ビルの最上階へとやって来た。

「見てみるよ、これ！ 凄いだろ？」

そう言った雷斗の目は、デビアス社も驚くくらいに輝いていた。店内には、至る所に等身大の人形が並んでいる。可愛いかったり、綺麗だったり、日本人だったり、外国人だったり……見た目こそ、各々個性を持たせてはいるものの、それらには共通している点がある。それは、全て女性であるという事。蠟人形とは比べ物にならない、柔らかな肌の質感。特に、少し湿り気のある唇なんて、見ていだけで胸がドキドキする。

「確かに凄い……でも、これがどうした？」

「まあ、聞け。これはラヴドールって言うんだが、平たく言えば、

「ダッチワイフだ」

「ダッチワイフ……お前、そこまで追い詰められていたのか……」

「雷斗……すまん。気付いてやれなくて……お前の事、心底キモイと思う事もある。だけど、俺達は友達だ……それなのに、俺は……」
腹の底から悔しさが込み上げて来て、目が潤んできている事を感じていた。

「って！ 何言ってるんだよ！ 早とちりにもほどがあるぜ！ ってか、泣くなって！」

「でも、でも……」

「頼むから、冷静になって聞いてくれ。お前が思っている事は大体分かるけど、そんなんじゃないからねえから！ この前な、ロボット開発者が集まるミーティングがあつてさ、その時に仲の良い奴から聞いたんだ。山に捨てられたコイツを見てな、警察が殺人事件だって言つてよ、署まで持って帰つたらいいんだ。で、解剖しようとしたら人形だったって訳だ。そんな話、信じられるか？」

熱くなった目頭を押さえながら、雷斗の話に耳を傾けていたのだが、その耳を疑った。

「マジか？ あり得ないだろ？」

日本の警察は世界一優秀だって、死んだ祖父ちゃんが良く言つてたもんだ。

「俺もそう思ったよ。で、帰ってすぐに調べてみたんだ。見付かったよ。二〇〇八年九月、その事件は静岡県伊豆市で起こっていた。そうになると、今度はその人形が気になるじゃん。で、今度は人形を調べたら、ここに辿り着いたって訳だ」

「それ、本当か？」

「本当だって！ ネットで調べたら、幾つも出て来るよ！」

「違う！ 事件じゃなくて、ここに来た理由の事を言ってるんだ！」

「お前……俺の事を、どう見てんだよ……俺が泣きそうだよ……」

雷斗の悔しがる表情に嘘はないと判断し、心底安心すると、今度は笑いが込み上げてきた。

「何が可笑しいんだよ？」

「別に……でも、これだけリアルなら、仕方がないかもな。山に捨てられてたんなら、汚れとかもあるだろうし……」

「そうなんだよ。俺も笑ってたんだけどさ、実物を見ると、考えが変わった。触った感触も本物みたいだ。これで体温があれば、ほぼ完璧だよ。肝心な要素だけど、今の技術じゃ無理な注文だろうけどよ」

雷斗は躊躇なくラブドールの乳を揉んでいたが、俺はどうにも触る事が出来なかった。気味が悪いくらい、ヒトに近いと思ったからだ。

余りにも出来の良い人形……それをヒトと同じように触る事は、神への冒瀆なんじゃないか？ 考えすぎかな？ 潔癖なのかな？

しかも、俺は神を信じてもないのに……ん、ちょっと待て……大事な事を聞き流す所だった。

「ってか、お前……その……女子のアレ……触った事があるのか？」

「ある訳ねえよ！ 俺は三次元に興味はない……と言えば嘘になるが……とにかく！ 斉藤の乳はJカップはある！」

斉藤って……ただのデブ男じゃねえか！ デブの乳と女子の乳を、一緒にするんじゃないって！

心の叫びが口から出そうになるのを必死で堪え、雷斗を見た。その顔付きは、つい先ほどとは打って変わって、真剣な物だった。

「武尊よ……こんなのがさ、自由に動くようになったら、どう思う？ 凄いやと思わねえか？」

雷斗はラブドールの目を優しく見つめながら言った。

「そりゃ、凄いに決まってる。でも、そんなのSF映画とか、アニメの世界だ。俺達が生きてる時代には、無理だよ」

俺の頭には奉香と朔来が浮かんでいた。でも、思いと言葉は裏腹だった。

「そうかな？ 俺さあ、思うんだよ。人が頭の中で想像出来る事って、全てが実現可能なんじゃないかって。例えば、それは憧れる力

だ。太陽に憧れ、人は電球を作った。鳥に憧れ、人は飛行機を作った。なら、俺はどうだ？　俺はアニメに憧れる。人が鳥みたいに空を飛んだり、時空を移動して未来や過去に行ったり……それこそここにある、リアルな造形の人形が歩いたり話したり……過去のフィクションが、今、ノンフィクションになっている事なんて山ほどある。鉄腕アトムには携帯電話が出ていた。俺は信じてる。そんな子供が夢見るような物、全てが実現出来るんじゃないかって！」

無我夢中で話す雷斗の顔は、無邪気な子供のようであり、一人の立派な科学者のようでもあった。

「お前、やっぱり馬鹿だよ……」

本当に、大馬鹿だ……

「ああ、俺は馬鹿だ。でもな、馬鹿だからこそ頑張れるんだ。諦めが肝心とか言う奴もいるけどよ、そんなの賢い奴がやれば良い。俺は馬鹿だから、自分が進む先に、何が見えるかなんて考えない。考えたって、どうせ分かりやしねえんだから」

俺の友達は、凄い……

『成功への最も確実な方法は、常にもう一度試してみる事だ』エジソンの言葉だそうだが、雷斗ならきつとやるんだろうなって、本気で思えるから不思議なもんだ。そして、こんな感慨深い思いを、アドルトグッズ専門店でする事になるなんて……

地上階へと戻るエレベータの中で、そんな事を考えていた。隣には馬鹿面を引っ提げた雷斗がいる。

俺達がゲーセンに戻ると、格闘ゲームコーナーに、異常な人だかりが出来ていた。なんの騒ぎかと思い、人だかりを掻き分けて進むと、奉香と朔来が夢中になって、ゲームをしていた。

またコイツらか……どこに行っても注目を集めやがる……

奉香の方の画面を見ると、互いのキャラが攻撃をしまくっているにも関わらず、ライフが一向に減っていない。俺の目には、バグにしか見えなかった。

「二人とも凄いな！」雷斗が頻りに感心して言った。

「何が凄いんだ？」

俺、格闘ゲームって、ほんと苦手なんだよな。必殺技の入力コマンドを思い出している内にボコボコにされちゃうから……

「このゲームって、世界最高の秒間フレームを採用してるのが売りなんだぜ。それなのに、二人は互いに攻撃を見切り、防御しては攻撃ってのを繰り返して行ってる。人間業じゃねえよ。神の領域だ」

「そんな事が可能なのか？」

いまいち言ってる意味は分らない。が、しかし、神が凄いであろう事は、俺にだって理解出来る。

「可能か不可能かで言えば、可能なんだが……でも、それは相手の動きを予測して、更に異常なほどの視力で確認して、瞬時に操作が出来ないとな。しかも、それを続ける精神力もいる。普通なら痺れを切らして、焦ってミスったりするんだけど……」

「そういうもんなんだな……」

まあ、アンドロイドだし……驚くほどの事ではないって事か……そんな事を考えていると、奉香の攻撃がおもむろに当たり出した。朔来の奴……痺れを切らしたのか？

「奉香！ レーダーに反応ありや！ 中国製空戦特化型。個体識別不明。近い……」

朔来は慌てて席を立つと、奉香に駆け寄った。

「直上や！ 行くで！」

「もう少しでしたのに……仕方ないですわね……」

二人は煙が出そうな勢いで外に飛び出した。勿論、俺と雷斗も後を追う。外に出て二人が見上げている方向に目をやると、真っ白い太陽に黒い影が二つあった。

「なんだありゃ！ 何かのイベントか？」

思わず声が出てしまった。奉香は俺を見ると、

「敵ですわね。なかなかの手練とお見受けしましたわ。朔来、黄泉の準備は良いですか？」

朔来は手首にはめたブレスレットを外すと、地面に置き、何やら手をかざしていた。

「もうちょいやねんけど……あかん！ 間に合わん！ 来る！」

逆光によりやく慣れた俺の目に、青い服を着た敵の手が、こっちに向けられるのが映った。そして、強烈なストロボのような閃光が走る。奉香は俺の前に敢然と立つと、それを刀で受けた。それはレーザービームのようなものだった。目の前で起こる非日常を、冷静な目で見る事が出来ている自分に驚く。奉香は、レーザーが照射されている刀に力を込め、振ると、その閃光は空の彼方へと飛んで行ってしまった。

「おい！ どうなってんだよ？」

雷斗が叫んだ。先ほどゲーセンにいた人だかりが、騒ぎを聞きつけたのか野次馬根性丸出しで集まって来た。物凄い人数だった。

こんな所で戦うのか？

「朔来、早く！ あの子は人を殺せますわ！」

殺せるって……アンドロイドは人を殺せないんじゃないのか？

「よっしゃ！ 準備出来たで！」

ブレスレットを形成する沢山の小さな銀の玉が、突如として光り出した。

「武尊！ 雷斗！ 私のそばにいらっしゃって。この際ですから、ご覧頂きたいの！」

俺達の方を見て、そう言った奉香。今度は空に向かって手を伸ばし、何か呟いたと思った瞬間、刀が目にも止まらぬ速度で飛んで来て、手に収まった。

「黄泉展開！」

奉香の叫びが秋葉原に響いた。その声に呼応するように、地面に置かれた光り輝くブレスレットを形成する玉が、クルクルと円を描き、回りながら広がって行った。一つ一つの玉が彗星のように尾を発生させ、縦横無尽に回り続けると、やがて光り輝く大きな球となり、俺達を包み込んだ。球の中は目が痛くなるほど明るく、やがて

それは敵をも飲み込んだ。

「二人を、頼みましたわよ!」

奉香は朔来を見つめて言った。

「任せとき!」

自信たっぷりに頷いた朔来をあざ笑うかのように、敵の手がまたこつちを向く。朔来は指輪を外すと、輪を俺と雷斗の方に向けた。輪の中に朔来が息を吹き掛けると、そこからシャボン玉のような物が発生し、その膜が俺と雷斗を包み込む。再び敵の手から、閃光が走る。しかし、それは俺達を包む膜に吸収された。

「すげえ! すげえよ!」

雷斗が異常に興奮している。俺は酷く冷静だった。朔来は俺達を包む膜を掴むと、

「舌噛まんように氣い付けや」

そう言って、一気に大空へと上昇した。敵にグングンと近付き、今は、その姿がハッキリと分かる。敵は、男と女の二人組だった。全身が真っ黒の忍者服に身を包んだ男。そして、青いチャイナドレスに身を包み、髪を左右に団子状に束ね、切れ長の目が美しい女。女は右手に身の丈よりも長い矛を持っていた。

「ふっ……黄泉を展開させる前に殺してやろうと思っていたアルが、当てが外れたアル。まあ、良いアルが……」

美しい微笑みを湛えて、女は言った。

「拙者の仕事はこれにて終了で御座る。せいぜい頑張って下されよ。ご武運を!」

黒忍者は、瞬く間に煌めく球体の外へと飛んで行った。

「待て!」

奉香が追おうとしたのだが、女によってそれは阻まれた。

「黄泉を脱出出来るやなんて……あんなタイプ初めてや……レーダーにも映らんかったし」

朔来が悔しそうに呟いた。そんな朔来をよそに、俺の目は更に上空にいる二人に釘付けになっていた。二人は睨み合っている。奉香

の齒ぎしりの音が、こっちまで聞こえて来そうだった。

「お前の相手はこの私、中国人民解放軍空軍中校、王小和アルよ！」
わんしゃおふう

「私は日本帝国軍一等空佐、隼奉香！」

奉香は王から少し距離を取ると、刀を正眼に構えた。いつの間にか軍服姿になっている奉香の、王を睨む目が鋭い。

「同じく二等空尉、疾風朔来！」

朔来は奉香と俺達の間地点に浮いている。その手には、何も持っていない。

なんて卑怯な奴だ……一般市民まで巻き添えにしようとするなんて！ 二人とも、絶対に負けんなよ！ 正義は勝たなくちゃいけないんだから！

つい先ほどまで冷静だったのに、やけに熱くなって来ていた。剣道の団体戦で、大将戦までの出番を待っている時の心境に似ていた。そんな俺とは対照的に、雷斗の興奮が冷めたようだ。俺達を包むシヤボン玉みたいな膜や、更に大きく五人を包む黄泉と言われる、オーロラ色に光り輝く球体を凝視している。

「これは一体、どういう構造なんだ……？」

恐らくこれが雷斗の本質なのだろう……なんて事はない、ただの科学者なのだ。

「朔来！ 分かってますわね？」

「大丈夫や……二人はうちが守るから安心しい」

朔来はゆっくりと俺達に近付いて来ると、

「万が一……って事も考えられん事はないしな」

そう呟いた朔来の顔に微塵の不安も感じ取る事は出来なかった。

「ふっ……一人アルか？ 私も舐められたもんアルね。今までお前達が戦った事のある機体と、一緒にするなアルよ！」

王は矛を器用に振り回し、猛然と奉香に襲いかかった。矛の刃を刀で受けた奉香だったが、王は瞬時に柄の方を奉香の腹目掛けて下から勢い良く突き上げた。九の字に身体を曲げ、呻き声をあげる奉

香。チャンスとばかりに王は、矛の鋒で奉香の右肩を力いっぱい突いた。肩に鋒の三分の一位が食い込んでいる。

「硬いアル！ 硬いアル！ 硬いアルね！」

叫び声を上げながら、食い込ませた矛に、グングンと力を入れる王。その度に、奉香の顔が歪む。

「ハッ！ 歪んだ顔も又、美しいアルね……フッ……あっけないアル。もう終いアルか？」

食い込んだ矛の鋒が鈍く光り、奉香の悲痛な叫び声が聞こえた。その声と同時に、奉香の体が吹き飛ぶと、球体の壁にぶつかった。奉香は、まるで、そこに地面があるかのように突っ伏すと、傷付いた肩を押さえている。王は耳をつんざくような甲高い笑い声を上げると、一気に距離を詰め、奉香の腹を蹴り上げた。止め処もなく続く攻撃、笑い声。奉香の自慢の軍服は、既に見る影もないほどに、ボロボロになっていた。

「ほんま、手強い奴やなあ……あんなに劣勢な奉香、見んの初めてや。まあ、型番がうちらより新しいし、仕方がないと言えば仕方がないんやけど……」

困った顔をして戦況を見守る朔来に、

「おい！ 朔来！ 助けてやれよ！」怒りの余り、そう叫んでいた。助けたくても助けてやれない自分が、齒痒くて仕方なかった。

「うちだって、そうしてやりたいのはやまやまやねんで！ けどな、黄泉の展開中はまともな戦闘を出来るほどのパワーが出えへんねん……それは奉香にも分かってる事や。その上であんたらを連れてきたんやから」

ちょ、先に言えよ！ そういう大事な事は……メチャクチャ足を引っ張ってるって事じゃないかよ！

あつと言う間の事だった。奉香の悲痛な呻き声が、やんだ。全く動かなくなった。王は不敵に微笑むと、奉香への攻撃をやめた。

「フハハハ！」

何が可笑しいのか、腹を抱えて楽しそうに笑うと、王の掌がこつ

ちを向いた。

「さつきからブンブンブンと小蠅共が！ うるさいアルよ！」
叫ぶ王の掌には、ソフトボールほどの大きさの光球が浮かんでいる。今までのレーザービームのような物よりも、遙かに威力があるだろう事は、俺の目にもすぐに分かった。

「さ、朔来……元帥と博士を……」

蚊の鳴くような奉香の声だったが、俺の耳には確かに届いていた。

元帥……？ 博士……？

「黙れアル！ すぐに始末してやるアルから！」

王はこちらを睨みつけたまま、奉香の頭を足蹴にしている。

クソツタレ……奉香になんて事をしやがる……許すまじ、王！

「いちいち言われんでも、二人は守る！」

朔来は慌ててイヤリングを外すと、俺達の前に仁王立ちになった、その時。王の手から光が放たれた。それは、太陽を虫眼鏡で見たら、きっとこんな感じなんだろうと思えるほどの大きな光だった。そんな光が、俺達を包み込む。眩しさを堪え、なんとか薄く目を開けると、身の丈ほどの大きな盾を持って、光線を受け止める朔来の姿が映った。

「何考えてんねや、アイツ！ 危ないところやで……あんなもん直撃したら、風船バリアでも保たんわ」

朔来はそう言うのと、こちらを振り返った。俺達が無事である事が確認出来たからか、満足気な微笑を漏らしていた。

「おい！ 朔来！ 俺を連れて行け！ 王の所に、俺を連れて行け！」

もう恐怖なんて微塵も感じていられなかった。奉香を助けたい、その一心だった。

「あかん！ 今のあんたに何が出来るの？ 邪魔になるだけや！」

「うるせえ！ 何が出来るかじゃねえ！ 何をするかだ！」

ポケットから剣をモチーフにしたペンダントを取り出した。俺の中に沸き起こる怒りに呼応するように、それは光り輝くと、ゆうに

三尺はあるだろう刀へと姿を変えた。

「あかん言うてるやろ！ 空も飛べんあんたに、なんも出来る事はない……悔しいかも知れんけど、それが現実や。今は、奉香の戦いをジッと見とき」

「だけど！ アイツはもうボロボロじゃないか！ お前は、何故ここにいる？ お前は、何故仲間がやられているのを、平気な顔で見ている？ 言えよ！」

「アホか？ 奉香は日本帝国空軍の絶対エースや！ 撃墜王や！ 信じてるからに決まってるやろ！」

「何言ってるんだ……朔来、見えてんだろ？ 奉香の姿が。あれがエース？ 撃墜王？ ふざけるな！ 弱いじゃねえかよ……あれで、どうやって国を守れる？ どうやってみんなが笑って暮らせる世界に出来る？ 全部、嘘なんだろう？ なあ！ 答えろよ、奉香！ やれるってんなら、お前の力を見せてくれよ！ 立てよ……馬鹿……俺にも、お前の事を、信じさせろよ！」

自分でも分かってる……偉そうに言っただって、俺に出来る事なんてないって事は。俺だって、もし出来るんなら、戦いたい……歯痒いんだよ！ 頼りたくなんてないんだよ！ アンドロイドかなんだか知らねえけど、見た目はただの女の子なんだ。優しくて可愛くて……なんて情けないんだ……このまま二人がやられちゃうくらいなら、雷斗と心中して、朔来を奉香の元へ送り届けた方が良い。

雷斗をキッと睨み付けると、刀を振り上げた。雷斗は、ただギュッと目を瞑っている。

「ちょ！ やめい！ あんた、何考えてんねや！」

「雷斗を殺して、俺も死ぬ！ だから、朔来。奉香を助けてやってくれ……」

今生の別れを告げようと、奉香を見た。すると、奉香の手がピクッと僅かに動いた。気のせいだと思った。だけど奉香の刀を持つ手に、おもむろに力が加えられているのが、遠目でも分かった。それに気付いた王は、再び猛烈な攻撃を始めた。

「しつこいアル！ ゴキブリみたいアルね！」

「誰がゴキブリやねん！」

朔来はどこから出したのか、巨大なミサイルランチャーを肩に担いでいた。それを王に向けて一発発射したのだが、王はそれをスツと躲すと、朔来を睨み付けた。そして、そんな王の背後に、ボロボロになりながらも立ち上がった、奉香の姿が見える。

「ふっ……私を誰だと思ってるの？ 弱い、だって？ 笑わせるんじゃないわ……ハンデよ。ハンデに決まってるじゃない……こんなガラクタ相手に、マジになってどうするっての？ でも、もう流石に我慢の限界ね。サービスタ임は終了……」

弱々しく言うと、奉香は芯が入っているかのように凜として立っていた。その顔は鬼の形相で、銀髪は真っ赤に染まり、緋色に輝く瞳は王を真っ直ぐに射抜いている。太陽の光を一身に受けた奉香に、神々しささえ感じた。

「あんたさあ……こんなヘナチョコ攻撃で、私を倒せるとでも思ってたの？ んっとに、見くびられたもんだわ」

怒りで力が入りすぎているのだろう、刀を持つ奉香の右手がワナワナと震えている。

「撃墜王を舐めんじやないわよ！ 私を誰だと思ってるの？ 日本帝国空軍、完全無欠の絶対エース、隼奉香様よ！」

スイッチが入った……ってやつか？

奉香の、そのあまりの迫力に背筋が凍るのを感じた。そして、奉香を怒らせる事は、恐らく死を意味する、そう思った。

「うるさいアル！ 何が撃墜王アルか？ 言っけて恥ずかしくないアル？」

王は、奉香が放つ異様なオーラを感じ取ったのだろう、言葉の割にはえらく腰が引けている。明らかに優勢なのは間違いないにも関わらず。

「ああ？ うるさい？ マジで言ってるの？ さっきからアルアルアル、アルアルアル……あんたの方が、よっぽどうるさい

つての！」

その言葉と共に振り下ろした刀の斬撃。王は矛で受け止めようとしたのだが、無理な注文だった。豆腐を切るように、いともあっさりとは真つ二つに切れた矛。そして、王の鼻先を刃が掠めた。

「さつきとは別人アル……しかし、十五億の民の希望を背負った私が、負ける訳にはいかないアル。これが漢民族の誇りアルよ！」

切られた矛を投げ捨てると、王は両の拳に力を込めて、絶叫と共に奉香に殴り掛かった。

「私達だって、負ける訳には行かないの！ 正義の名に掛けても！」

奉香は、王の突進をマタドールのようにサラリと躲した。王は急ブレーキを掛けて止まると、振り返って奉香をキツと睨み付ける。

「何が正義アルか？ 自分達さえ良ければ良い、その何が正義アルか！ 私達の国には私達の国の正義がある……東亜の雄としての責任が……お前にそれが、お前達にそれが悪だと言う資格があるアルか！」

再び突進をする王に対し、奉香は真つ向から受けた。二人の力の差は、今や歴然だった。奉香は王を取り押さえると、チャイナドレスの襟を左手に掴み、右手に持った刀で頭の団子を作っている紐を両方切った。ハラリと、黒く艶やかな髪が、王の肩の上から体の線に沿って踊る。

「さつきからアンタ、何言ってるの？」

刀を王の頬に当てながら問い掛けた奉香。

「ふっ、何を惚けているアルか……お前達の行いを、私達は忘れないアルよ。私を生んでくれた民族の想いを、この手で晴らす事が出来なかった……自分の弱さが、こんなにも情けなく、腑甲斐なく……私に生きている価値はないアル。さあ、ひと思いに殺すアルよ！」

王は涙を流しながら、掌を奉香の刀に押し当てて握ると、その刃を自分の首に押し当てた。

「ちよっ！ おやめなさいな！ あなたを殺す訳に行きませんわ」

奉香は一瞬だけ刀から手を離すと、刀にかかった王の手を、上か

らそつと握った。いつの間にか髪と目の色が、普段の奉香に戻っていた。

「殺しませんし、死なしませんわ。それが、私達なのですから」
奉香は王に優しく語り掛けた。

「それなら私を、どうする気アル？」

「決まっていますわ。戦闘能力を解除しますの」

「戦闘能力の解除……嫌アルよ！ そんな辱めを受けるくらいなら、死んだ方がましアル！」

ジタバタと手足を動かしてもがく王。

「戦いを挑んだ相手が悪かったと、諦めなさいな。私が不在の未来なら、もっと活躍出来たでしょうに。さあ、刀をお離しなさい」

奉香は真っ直ぐに王を見つめると、観念したかのように刀を握る手の力を抜いた。

「だからお前達は嫌いアル……常に上から目線で情けを掛けてくるアルから……お前が不在の未来？ 笑わせるな！ お前は私が来た未来でも、当たり前のように戦っているアルよ。既に何人もの仲間が、お前に殺されたアル」

「はっ？ そんな訳がありませんの。戯れ言はもう良いですわ。始めましてよ」

「戯れ言ではないアル……それに、我が国だけではないアルよ……世界中に散らばっている同胞達も……皆……」

王の言葉を聞いて、奉香の顔は曇った。それは自分がいた未来に、思いを馳せているように見えた。しばらく奉香はそんな状態だったのだが、吹っ切れたように大きく一つ頷くと、刀を振った。刀は眩く光りながら、細く紐状になり、それが王の体を何周もすると、一気に体を絞めつけた。王は苦しいのか、小さな呻き声を上げた。

「今の私には、出来る事を全力でやる事しか、御座いませんのでよ……朔来！ 後は頼みましたわ！」

「はいよ！」

嬉しそうに大きな返事をした朔来は、スッと王に近付いた。

「恥ずかしがらんでもええ。すぐ終わるから……」

朔来はそう言って、王の肩に腕を回した。そして、王の下顎を手でクイツと持ち上げると、顔を近付ける。朔来の唇と王の唇が、重なった。王の体から、力が抜けて行くのが分かる。高い秋の青空が、茜色に染まろうとしていた。

「エーッ！」

俺と雷斗は、無意識のうちに声が出てしまっていた。驚きなのか、感嘆なのか、雷斗の気持ちは分からないが、少なくとも俺は後者の方だった。本当に美しい、そう思っていた。

「終わったで」

王の唇から唇を離すと、朔来は言った。朔来の頬は紅色に染まっていた。それを突っ込むと、朔来はきつと夕焼けのせいだと言うだろうから、敢えてそれを突っ込まなかった。王を見ると、瞳がトロンと虚ろになっている。

「ご苦労様。何回見ても、恥ずかしいものですわね」

奉香も顔を赤らめている。夕焼けのせいかも知れない。

ってか、さっきまでボロボロだったのに……もう回復してんじゃない。一体どんな構造なんだ？ 未来って、本当に凄いなんだな

……

奉香は糸の緩んだマリオネットのようになってしまった王を抱えると、秋葉原駅の近くにあるビルの屋上へと降り立った。俺と雷斗は、入っているシャボン玉ごと朔来に引っ張られ、後に続いた。足が屋上に着いた瞬間、俺達を覆っていたシャボン玉は割れ、俺の持っていた刀は再び小さなペンダントへと姿を戻した。ペンダントが放つ鈍い輝きを不思議に思いながらも、それをポケットにしまった。

屋上とは言え、久しぶりの地面が懐かしく感じていた。雷斗は朔来に近付くと、

「朔来ちゃん。さっきのって、どんな技なの？」

「『天使の口付け』や！」

って、答えになってねえし……

雷斗は諦めたのか、小さく肩をすばめると、相変わらず俺達の周りをクルクルと回っている銀の玉に注目していた。朔来は上機嫌に見えた。笑顔で両手を空に向け広げると、俺達を囲っていた光の球体が縮小していき、遂には小さな銀の玉がブレスレットに戻った。それを慣れた手つきで手首に着けると、地面に寝転がされた王の様子を注意深く見守っている。

「そろそろ効いてくる頃やねんけどなあ……」

呟くように言うと、奉香が小さく頷いた。暫くすると、眠そうな顔で王がスクツと立ち上がった。

「アイヤー……頭が怠いアルな。やや、皆さん、先ほどは本当にすまなかったアルよ。で、私をどうするつもりアルか？」

小さく頭を振ると、王は頭を掻きながら笑顔で奉香に尋ねた。

「いやいや、そんなあつさりしたもので良いのかよ……」

「んー……そう言えば、今後の事を何も考えていなかったですわ」奉香が何かを期待する目で、俺を見ている。

「まったく、無茶降りにもほどがあるって……俺だって、なんにも思いつかん。はて、どうしたものか……」

仁王立ちで腕を組み、考え込んでいる俺を見て、王は不安に思ったのだろう。

「困るアル……私には、帰る所がないアルよ。どうしてくれるアルか？ 責任を取るアルよお」

王は、子供みたいに泣き出してしまった。

勝手な奴……急に襲ってきたくせに、その言い草はないんじゃないかねの？

そんな事を思っていると、雷斗がおもむろに王に近付いた。

「なら、俺の所に来い。調べたい事もあるし。駄目か？」

「調べるって、何をアルか？」

真剣な眼差しの雷斗に、王は頬を赤らめ目を潤ませた。そして、肌蹴たチャイナドレスの胸元を、腕で必死に隠している。奉香と朔

来も俺と同じ気持ちだったのかも知れない。三人の視線が雷斗の元へと集まる。雷斗の顔は、赤くなっていた。

「ち、ちが……チキショー！　なんなんだよ？　その痴漢を疑うような目は……いい加減にしろって！　俺が興味あるのは中身だ！　王って言ったっけ？　その子の中が気になってるんだってば……」

「私の、中……」

疑うように雷斗を見ていた王だったが、今は完全に目を逸らせてしまっている。それに気付いた雷斗は、

「機械的な意味だよ！　お前等、アンドロイドなんだろう？　科学者としての探究心ってやつだろうが！」

額の中に芋虫でも飼っているのかと疑いたくなるほどの青筋を立て、絶叫している所を見ると、珍しく怒り狂っているようだ。

「分かってるって……冗談だよ！　冗談！」

駄目だね……いつからコイツは、こんなに冗談の通じない奴になったんだろう。

「いや、違うね。お前達の目は本気だったね！」

まだ怒っているのかよ？　案外、しつこいねアンタ！

「何怒ってんねん？　アンタの普段の行いが悪いからやんか……でもまあ、そういう事やったら、うちも協力せんでもない。シャオの中身に興味あるしな。それに、流石の雷斗でも、今の力やったら解読不能やろうし」

朔来の意見を聞き、あからさまに雷斗は悔しそうな表情に変わった。普段の行いを批判された事についてなのか、王の中身を解読不能と言われた事についてなのかは、俺に知る由もない。

それにしても、シャオって呼び方、なかなか良いじゃん。こりゃ、即採用だ！

「なんか、引っかかる言い方だよな。ま、手伝ってくれるのは素直に嬉しいけど……」

って事は、雷斗は普段の行いについて触れられた事が悔しかったんだね。それにしても、朔来は何故、頬を赤らめているんだろう。

「シャオは、それでよろしくて？」

奉香は優しくシャオの肩に手を置き聞くと、

「痛くしちゃ、駄目アルよ……」

シャオはうつむきながら恥ずかしそうに言った。そんなシャオの仕草が大人びた顔と不協和音を奏でるものの、凄く可愛く思えた。

こんな子が、さっきまで奉香を散々蹴り飛ばしていたなんて……
本当、女とは理解出来ない生き物だ。

「ま、話もまとまった事だし、一旦うちに集まるか」

雷斗は大きく柏手を打ち言うのと、ずっとここにいても仕方がないと皆思っていたのであろう、すぐさまその意見に賛同した。

金鷄学園高校のほど近くに雷斗の家はあった。その二階建ての一軒家は、壁が打ちっぱなしのコンクリートで、立方体を意識したデザインになっている。なかなかオシャレな外観だった。それにしても、学校で最も仲の良い友達なのに、家に呼ばれた事がないというのは残念な話だ。部活や創作活動で忙しいのは知っているが、四六時中独楽鼠のように動いている訳ではあるまいし。

家に近付くと、玄関の前で携帯の画面に釘付けになり、もう一方の手に大きな鞆を持って立っている優羽乃の姿があった。足音で俺達に気付いたのか、コートにジーンズと言うラフな格好での優羽乃が、顔を上げると、

「遅い！ 何時間待たせる気よ！」

顔を見ても、その怒りが本気とも冗談とも分からなかった。

「いやいや、さっき電話したばかりじゃん……」

雷斗はそう言いながらも、ペコリと頭を下げていた。

「なんで優羽乃がいるんだよ？」

「何よ、武尊。私がいたら駄目なの？」

ってか、なんでそんなに喧嘩腰なんだよ……

そんな優羽乃の態度を雷斗は見ても見ぬふりをして、

「朔来ちゃんに言われて、俺が呼んだんだ」

その言葉で思い出したかのように、優羽乃は俺達一行を鋭い目で観察すると奉香に尋ねた。

「その子が襲ってきた子なの？」

「ええ。そうですわ」

これが普通の会話として成立するって、凄い事だよ……な？

「ふーん。そっか。あなた、お名前は？」

「私アルか？」

シャオは自分に指を指して尋ねると、うんと優羽乃は優しく頷いた。

「王小和アル。はるばる中国からやって来たアル。宜しくアルよ」

「そうなんだ。遠くから大変だったわね。ご苦労様。私の名前は三崎優羽乃。優羽乃って呼んでちょうだい」

自己紹介がすんだ二人は、さも当然のように握手を交わしたのだが、優羽乃がさっきの戦いを見ている、安々と握手をする気になれただろうか。

俺達……シャオに殺されそうになったんだぜ。

「その辺で良いだろ？ 寒いし、早く中に入ろうぜ」

雷斗は玄関のドアを開くと、そそくさと中へ入っていった。

「えらく不用心だな」

雷斗の後を追うように家の中へと入った。

「不用心じゃねえよ。玄関のカメラが目に入らなかったのか？ あのカメラで個体識別をして、俺だと認識されないと入る事が出来ないうって寸法になってんだよ。精度を上げるのが、なかなか難しかったけどな」

ふーん……自分で作ったんだ。すげえな。でも、仮に泥棒が入ってきたとしても、玄関のあっちこっちに配備されてある、アニメのフィギュアやらポスターやらを見たら、盗む気も萎えるだろうがな。「ってか、お前の悪趣味丸出しだけど、家の人に何も言われないのか？」

「は？ あ、そっか……言っていなかったっけ？ 俺、一人暮らしだ

ぜ。でなきゃ、アンドロイドを連れて帰るなんて言うはずないだろうが」

「そういやそうだな。両親にシャオを見られて、アンドロイドですからとか通じる訳ないよ。こっ酷く叱られて病院にでも連れて行かれるのがオチだ。」

「一人だと、大変だな……」

「それでもねえよ。親と住んでる時から、一人みたいなもんだったし。それに学校が近い方が良いだろ？ 実家はつくばだから通おうと思えば通えるんだけどな。物は試しに、特待生で入る時の条件で家を要求したら、あっさりと認められたんだ。そんなに俺を欲してるのかって、ちょっと嬉しかったよ」

「そう言いながら、小さく笑った雷斗が、少し寂しそうに見えた。」

「雷斗は中学校の時から、その分野では有名人だったもんね。お祖父ちゃんが一軒家を借りるくらい、安いもんだって言ってたわ」

「しゃがんでブーツを脱ぎながらこっちを見上げる優羽乃の、そのなまめかしい仕草に、ついドキドキしてしまう自分に嫌気が差す。」

「それにしても、下宿付きの特待生って……そんなに凄いやつだったの？ 完全に見下していたのに……でも、知ったからと言って、今までの態度を変える訳にはいかん！ あくまでも俺達の関係は、今まで通りだ！」

「そんな小さな決心をしてしまう自分に、またもや嫌気が差した。」

俺達は雷斗に招かれて玄関からすぐの部屋に入ると、徒広い部屋の中には二台のフルタワーパソコンがあり、作り掛けのロボットやら部品やら工具やらがあっちこっちに転がっていた。

「ちょっと待っててくれよ」

雷斗は手際よく折りたたみのテーブルを部屋の真ん中に置くと、奥からパイプ椅子を六脚も持ってきた。

「なんでパイプ椅子がそんなにあるんだよ？ お前の家は会議室か？」

「まあ、そんなトコだ。たまに他校のロボ研と集まったりするしな」
冗談のつもりで言ったのに、正解だったとは……

雷斗を見る目が変わりそうな自分を戒める。

さっき決心したばかりじゃないか……

己の器の小ささに赤面しているうちに、雷斗はお茶の用意までも首尾良くこなし、目の前には完璧な会議室が出来上がっていた。議長
長の雷斗は一つ咳払いをすると、

「優羽乃も知ってるんだよな？ 自分で言うのもなんだが、俺も科学者の端くれだ。奉香ちゃんと朔来ちゃんを初めて見た時、なんとも言えない違和感を感じていた。人間はいくら容姿が良いと言っても、どこかに非対称な点がある。目の大きさとか、鼻や口の歪みとか。でも、二人には、それがなかった。余りにも容姿が整いすぎていた。だけど、その時の俺にはコスプレの事しか頭になかったし、気のせいだと自分に言い聞かせる事にした」

おいおい……科学者としての探究心より、コスプレカフェへの欲求の方が強いってのは不味いんじゃないか？ なんともしや……でもまあ、コイツの科学者としての強い思いを知った今、やっぱりコスプレカフェにして大正解だったって事だ。

「俺の持論、人の頭にある事は全て実現出来るって事を考えると、二人がアンドロイドだって事も、時空を超えてきたって事も、不思議な事じゃない。教えてくれ。どうして未来からやってきた？ 今日
日の一件を見る以上、俺にも関係がありそうだし」

雷斗は珍しく真剣な顔で奉香を見据えたが、奉香も負けてはいなかった。戦う女の顔だった。

「朔来、熱田博士の論文を出してちょうだい」

「はいよ。雷斗、そこにあるプリンター借りるで」

朔来はプリンターに近付くと、その上に手を置いた。暫くすると、プリンターから細かい字の羅列やら図形が印刷された紙が何十枚も吐き出される。

「おい、朔来。そんな事が出来んのに、なんで役所では失敗したん

だ？」

至極まともな質問だろ？ あんなボロっちい機械より、今やってる事の方が余程難しいだろうしさ。

「あの機械アホすぎて、うちの命令が理解出来へんかったんや」
機械って、そんなもんなのか？

役所の機械に妙な親近感を覚えている内に印刷が終わり、雷斗はプリンターから紙の束を取ると丁寧に捲っていった。読み進める度に、次第に赤らんでいく顔を見ていると、興奮を隠しきれないのが良く分かる。

「これって、武尊の父ちゃんのだよな？」

論文とやらから視線をこっちに移すと、おもむろにそう言った。

「そのようだけど、それがどうかしたか？」

「お前の親父、半端ねえな！」

「宝の地図でもあったのか？」

「ちげえよ、馬鹿……そんなもん比じゃねえ。宝で例えるなら、ガフル油田……いや、それでも足りない。だってよ、これがあれば人工的な脳を作り出す事も可能なんだぜ。人と同じ感情を持ったロボットだっていける。でも、足りない項目があるのは何故だ？ 記憶、命令系統、外部への入出力……」

「流石は奈良原博士ってとこやな。まあ、うちは三十年後でも雷斗って呼んでるけど」

ん？ 博士？

朔来の言葉に耳を疑った。そして、重大な発表をされているにも関わらず、雷斗は食い入るように論文を読んでいた。

「朔来、少しは自重しなさいな」

奉香の戒めに対し、ベーツと舌を出す朔来。そんな光景をよそに、目を閉じ腕を組んで聞いていたシャオの表情が、見る見るうちに驚きの表情へと変わった。

「奈良原博士って……あの奈良原博士アルか？」

「そうやで。うちの生みの親や。もうええやろ？ いつまでも誤

魔化せる訳ないんやし。それに、武尊や優羽乃もそうやけど、意志の固い人間には己の未来がどうかって事は関係ないんやと思うねん。って、そういや、武尊には言うてないか……」

生みの親？ 俺の未来？ なんだソレ？

「そうか。俺がお前達を作ったのか……なるほど、俺好きな訳だな。世の中には凄い奴がいるもんだって思ってたんだけど、ちよつと期待はずれだ。それにしても時空移動かぁ……出来るって前提ならなんとかなるかも知れん。ちよつくら計算してみるわ」

そう言うのと雷斗は、パソコンに向かって何やらカタカタやり始めた。

満更でもないって顔してんじゃねえよ！ だいたい、科学担当のお前がそんな事やってたら、話がちんぷんかんぷんになるじゃねえか！

「あなただけは……本当に生意気ですこと……宜しくてよ。話を進めて下さいな」

その顔……結構怒ってるんじゃないのか？ 頼むから、キレモードだけは勘弁してくれよ。この家どころか、学校まで吹き飛ばされかねん。

「まあ、そう怒りな。優羽乃には一昨日話した。それで理事長を通じて高校に入れてもうた訳やねん。さっきの雷斗の質問やけど、昨日武尊に話した通り、うちらが未来から来た目的は武尊を守る事と熱田博士の失われたデータを取り戻す事。以上や」

朔来は言い終えると、胸のつかえが取れたからなのか、満足気な顔をしていた。

「だから、なんで俺なんだよ？ 親父の研究の事なんて、全く知らないってのに」

当然の疑問を口にした俺の前に、奉香は論文を差し出して、

「論文が作成された日付をご覧になって」

日付？

「これは……旅行に行った日の前日……」

「そうですね。お分かりになって？　ちなみにこの不完全な論文は雷斗が優羽乃から頂いたそうですね。では、完全な論文はどこに存在してますの？　事故現場にもありませんし、研究所にもありません。恐らく熱田博士自身が持ち出しておいでになったのでしょうか。では、熱田博士と最後まで一緒にいた人間が、それを持っている可能性が一番高い」

奉香の目が一寸の狂いもなく俺を見ている。

「ちょっと待て……俺はそんなの貰った記憶がない」

「未来のあなたも同じ事を仰ってました」

「そりゃそうだろう……でもさ、そんなにデータに拘るんなら、親父から直接貰えばよかったんじゃないのか？」

「それが出来たら苦労なんてしませんの。当然ですが過去は未来に通じていますわ。こんな事を申し上げたくはないのですが、熱田博士がお亡くなりになったのが、全ての始まりとなっている訳ですよ」

なんだよ……親父が死ななきゃ始まらねえって訳かよ！

「しかも、チャンスは一回こっきりや」

「そりゃ、そうだろう。たった二人とは言え、三十年分も時間を逆流させてんだから。それに、俺の考える事だ。未来には行けない仕様のはずだ」パソコンのモニターを見ながら雷斗が言う。

「生きてる以上、未来に向かって進んでいるのに、わざわざそれを早める必要なんてない。奈良原博士は、そう仰ってましたわ」

奉香の言葉を聞いて、雷斗は楽しそうに快活に笑った。俺もつい釣られて笑ってしまったのだが、シャオはどうにも暗い顔をしていた。

「聞いてないアル……そんな話、聞いてないアルよ。任務が終われば、すぐに戻してくれる約束だったアル……」

ひでえ話だな……アンドロイドだって言うけど、感情がある以上、騙すような事はしちゃいけないって……

シャオの目には涙が浮かんでいた。

「シャオ……うちらかて同じや。この任務が成功しても、失敗しても、未来が大きく変わる事には変わりはない。確かに、今も未来には進んでる。でも、その方向は定まってないんやし……未来に戻るかどうかなんて、知ってたってどうにもならんねん。それを知って来るのも辛いもんやし。それでもうちらはここに来た。それでも国はうちらをここへ寄越した。それはやっぱり、未来が平和やないからや。そりゃ、もっと酷くなる可能性だって大いにあるよ。でも、一縷の望みに掛けなあかんほど、この国は追い詰められてるねん。それは、シャオの国だって同じやろ？　うちは、平和やったら、誰がこの星を治めたってええと思うけど、人権を完全に無視して戦うアイツらが、平和をもたらずはすなんてないやんか……」

朔来は諭すように言うと、シャオを後ろからそっと抱きしめた。すると、今まで黙っていた優羽乃が口を開いた。

「戦争か……曾お祖父様が満州での生活を良く嘆いてらしたわ。戦争は人を変えるって。だから、日本に帰ってきてからは教育に力を入れたのよね。国をリード出来るような人材を育てるために、金鵒学園をお作りになられたわ。でも、力が足りなかったのね……」

「まあ、そんな悲観する事はねえよ……朔来、ちよっと来てくれな
いか」

「ん？　ごめん、シャオ。ちよっとええかな」

朔来が離れると、シャオは少し寂しそうにしたが、もう泣いてはいなかった。雷斗は朔来にパソコンのモニターを見せて、何か頼んでいるようだった。

「しゃーないな……ゲーム奢ってもらたし」

そう言うと、朔来は物思いに耽るように天井を見上げると、

「三十一エクサジュール……」

ボソツと呟くように言った。

「やっぱりそんなもんだな」

雷斗の顔は殊更満足気だった。

ってか、何がやっぱりなんだよ？

「一人を三十年飛ばすのに必要なエネルギーだ。莫大なもんだぜ……今の日本の一年間の消費電力とほぼ同じだ。確かに国の危機なのかも知れねえけど、それだけのエネルギーをかき集める事が出来るんだ。まだかなり余裕があるってこったろ」

簡単に言いやがって……お前は未来から来た三人の気持ちを考えた事があるのか？

「そう考えると、本当に切羽詰まった状況になる前に手を打ったのかも知れないわね」

優羽乃、お前もか……悲しいよ、親友と言うべきお前達が、そんなあつけらかんとした性格だったとはな……

「はあ……なんだか今日は疲れてしまいましたわ。そろそろお暇致しましょうか」

ってか、奉香！ お前達の事を俺は必死で考えてるってのに……もう良いよ……

「そうだな。まだまだ疑問は残る所だが、今日は解散って事にするか。朔来ちゃんが助けてくれるなら、明日一日で大体の事は分かりそうだし」

雷斗はそう言って柏手を大きく打つと、立ち上がり湯飲みをさつさと片付けだしてしまった。

「そうやな。ちょっと休んだら始めよか？ まあ、そういう事やら武尊、奉香、優羽乃、氣い付けて帰りや」

「ああ、大丈夫だ。奉香がいたら億人力だよ。雷斗、あんまり無理するなよ！ それ以上、頭が変になったら誰も救ってやれねえからな！」

俺の最大限の捨て台詞だった。

「うるせーよ！」

その遣り取りを見ていた優羽乃は、急に何かを思い出したように、「そうだ、これを渡しておかないとね」

大きな鞆を雷斗に渡した。その鞆には『学園生活充実セットDX』と書いてあった。

「この間の反省を含めて、普段着やパジャマも入れておいたわ。もう編入の手続きは済ませてあるから」

「お！ 気が利くねえ。サンキュな」

雷斗は鞆を受け取ると、それをシャオに渡す。

「不安だろうがよ、別に取って食おうなんて思っちゃいないよ。学校に行くか行かないかは、お前が自由に決めりゃ良い」

雷斗の言葉に瞳を潤ませるシャオ。

「そうだぜ！ 昨日の敵は今日の友ってな。な？ 奉香！」

今のこの状況に、これほどまで当てはまる言葉を思いつかなかった。

「ええ、そうですわ。シャオ、皆良い人ばかりですから、安心なさいな」

またもや泣き出してしまったシャオの頭を、そっと撫でながら、

「じゃあな！」

「ありがとうアル。こんなにも優しくしてもらったのは生まれて初めてアル！」

そんなシャオの言葉に、ルナの手紙を思い出した。

同じような事をルナも書いてたよな……ルナ、どこ行ったんだよ

……

外に出ると、既に日が落ちていた。迎えに来た豪華な黒塗りの高級車に、吸い込まれるように優羽乃は入っていく。送ると言われたが、遠慮した。歩きたい気分だった。優羽乃を乗せた車が走り去るのを見送ると、俺達は家へと歩き出した。

空を見上げると、気持ち悪いくらい真っ暗だった。空に、月はなかった。それが不思議だった。妙に寒々しい気持ちになると、ルナの笑顔が猛烈に頭を過ぎった。なんとなく、俺は奉香の手を握った。奉香も俺の手を握り返してくれた。奉香の手は、温かった。

第六章 日本の科学技術力は化け物アルね！

学ラン、バーテンダー、勇者、陰陽師、オバQ……思い思いのフアッションに身を包んだ男子達が、緊張の面持ちでソワソワとしている廊下に、

「もう入っていいわよ」

教室の中から、優羽乃が声を張り上げた。先にコスプレをし終わった俺達は、廊下で女子が着替えるのを待っていたのだ。そう、今日は金鵒祭当日である。月日が経つのは早いものだ。シャオという同居人が増えたという事もあり、今、我が家は本当に賑やかである。もし一人で居れば、この金鵒祭までの日々が倍以上に感じられるに違いない。実際、あつと言う間に時は進んだ。

そして、雷斗の研究は、完全に暗礁に乗り上げていた。たとえば聞こえは良いのだが、なんて事はない、金鵒祭が楽しすぎて手が付かなかったのだ。全く持って駄目人間である。

ふざけやがって……

「この日を俺は待っていたんだ。テメーら行くぜ！」

今のコイツの鼻息を持ってすれば、ゴム手袋を膨らませるくらい訳ないだろう。雷斗よ、闇の使い魔のような格好をしているのだから、少しぐらいいは雰囲気作りにいそしみなさい。

そんな事を執事姿で思っていた。

ガラガラガラ！

勢い良く教室の扉を開けた雷斗の、感極まった雄叫びが、廊下に響き渡った。よその教室からは、何事かあったのかと、廊下を覗く顔が幾つも見える。

雷斗よ……リアクションも大きくなりすぎたら、わざとらしくなるもんだぜ。そうだろう？

雷斗に続き、教室を覗いた。

「うおおおおおおお！」

剣道で鍛えた俺の声帯から飛び出す声は、雷斗の比ではなかった。よそのクラスの生徒が、いよいよ気になったのか野次馬のように押し寄せる中、

「馬鹿！ お前、声でかすぎだよ！」

雷斗は俺に向かって言うと、教室の中へクラスの男子が全員入った事を確認し、ピシヤリと扉を閉めてしまった。後のお楽しみだと言わんばかりの顔をしている。

それにしても、いつもの退屈な教室が、今日は楽園のようだ。色とりどりのコスチュームに身を包んだ女子達は、華やか極まりないセーラー服、体操服、看護婦、OL等々……

この学校の女子の制服が大好きなのだが、まあ半年もすれば、それはごく当たり前の物となり、マンネリになってしまっていたのは事実だ。今日の皆のコスプレ姿がカンフル剤となり、明日からまた、普段の制服姿がより一層魅力的に感じる事になるだろうと、確信していた。

「お待たせしちゃって、ごめんなさいね」

真紅の生地に、龍の刺繍をあしらったチャイナドレスに身を包んだ優羽乃が、俺達男子の方を見ながら言った。スカートのスリットから黒い下着が、ほんの僅かが見える。ゴクリと生唾を飲み込む音が、こんなに多く聞く事なんて、これからの人生他にあるまい。

「ちよ、ジロジロ見てんじゃないわよ！」

なんで、俺にだけ言うんだよ……ってか、そんな格好してりゃ、誰だって見るっての！ しかも俺は、思春期まったただ中の高一だよ。無理ないさ。

「優羽乃、よく似合っているアルな。改めて見ると、そんな恥ずかしい格好で良く戦っていたものアル」

超ミニの浴衣を着たシャオが、腕を組みながら優羽乃の姿をマジマジと見ている。

「ほんまやで。やっぱシャオは大陸育ちのせいか、乙女の恥じらい

つてもんがない。日本は恥じらいの文化なんや。まあ、これからはそういう事も覚えていかなあかな……」

高いピンヒールを履いて、いつもよりかなり背が高くなった、バニーガール姿の朔来が、シャオの肩に手を置く。

「そんな格好でよく言えたもんですわ、朔来……それにしても、黒い水着にウサギの耳……ほんと、変な組み合わせですこと」

猫耳を着けたメイド姿の奉香が言う。突っ込みたい衝動に駆られてはいたのだが、今はそれどころではなかった。興奮しすぎているのだろう、頭の中で上手く言語が構成出来ない。そんな俺の視界を横切ると、雷斗は奉香の元へと近寄り、

「と、奉香さん。僕の専属メイドになって下さい」

奉香の手を両手で握り、雷斗がまたもや玉砕戦法を採った。

またコイツは、性懲りもなく……ある種、病気だな……

「ご冗談を。無理に決まっていますわ」

奉香の冷たい即答だった。そして、朔来のピンヒールが雷斗の太腿を襲う。

「イテテッ！　ちょ、朔来、何しやがんだよ！　ってか、なんでお前、あのコスじゃないんだよ！　せつかく、合わせようと思って、コレ買ったのに……」

「アホか！　あんたの事やから、絶対に合わせてくると思って、教えてやめたんや！」

「チェッ……嫌われたもんだな。でもまあ、バニーも似合ってた可愛いから、良いんだけどよ」

そう言った雷斗の視線から背けられた、朔来の顔が赤く染まっていた事を、見逃さなかった。

もしかして、朔来。雷斗の事を……いや、断じてそんなはずはない！　だって、雷斗は変態だもの。てか、俺にも保護者的な責任だつてあるんだ。こんな奴に恋心なんて、抱かれて堪るか！　許さんからな！

そんな俺の親心が通じたのか、朔来は背けていた顔を再び雷斗の

方へ向けると、得意のドヤ顔を浮かべ、

「わざわざネットで探して買うたんや。エエやろ？ 後で校門前行って、宣伝のビラ撒くから付いて来るんやで」

今度は雷斗が気色ばむ番だった。

「ちょ、おま！ その光景、ユーチューブにアップさせてくれよ！ 夢の百万アクセスに、手が届くかも知れない！」

「シバいたるか、アンタ！」

言葉よりも早く、朔来のピンヒールが雷斗を襲った。

朔来のツツコミは関西弁も相まって、流石としか言えんな……見習わなくちゃ。それにしても雷斗は雷斗だ。感心するし、安心するよ。

俺達が笑いながらその光景を見てみると、クラスの皆も釣られたのか、教室中が笑いに包まれた。

「あー、可笑しい。あんた達、本当に良いコンビね。さあ、みんな！ 盛り上がって来た所で開店準備を始めるわよ！」

優羽乃の指揮のもと、調理班が慌ただしく動き出した。シャオは浴衣の袖を紐で器用に襷掛けにすると、エプロンを付けてホットケーキの生地を作っている。手伝おうと近付く奉香はシャオの猛烈な威嚇にあっていた。

奉香のドジっ娘ぶりは既に、シャオに見抜かれている。なんせ、家での家事も、洗濯くらいしか任せてもらっていないのだ。しかも、その洗濯すらままならない。俺のパンツなんて、幾つあの世へと旅立った事か。

ちなみに他の家事は、朔来とシャオと俺の仕事になっていた。

優羽乃の的確で迅速な指示の甲斐あってか、準備が滞りなく終わり、いよいよ開店時間となった。喫茶店と化した教室の入口で、奉香と一緒に並び立っていると、慣れない服装と初めての接客に恥らを感じているのか、奉香の顔がほんのりと赤くなっていた。そんな奉香の猫耳が少し斜になっているのが気になって、ソツと手をや

り直してあげると、

「ありがと」

熱でもあるんじゃないかと疑いたくなるような火照った顔で、そう言われ、俺の胸は、縄文時代と弥生時代がお手々を繋いでごっつんこしたくらい、ドキドキしていた。

ええ、これが動揺ってもんです。

ガラガラガラ

記念すべき一人目のお客さんが来店した。

盛大に迎えて差し上げなくては……こんな衣装なんだから、挨拶はモチロン、せーの！

「いらっしやいませ！ ご主人様！」

第一声にしては見事に呼吸が合っていた。お客さんは、一瞬怯んだものの、笑顔になると、

「どうも……」と応じてくれた。

よく見ると、その人は金鷄学園の理事長、つまり優羽乃のお祖父ちゃんだった。

「華やかで、良い雰囲気じゃないか。優羽乃、よく似合っている。今度、中国大使が視察に来られた時は、その格好で出迎えて貰うでしょう」

「まあ、お祖父様。お上手ですこと。でも、それは勘弁して頂きたいですわ。あの方、日本を下に見るような発言が多くて、私、大ッ嫌いですの。それにしても、わざわざ見に来ていただけるなんて、真に光栄な事ですわね」

理事長と優羽乃が軽く抱擁を交わした。優羽乃の話では、去年理事長の喜寿の祝いを、政財界の要職達が挙って執り行ったらしい。八十歳を眼前にして尚、肌に艶があり、髪は白髪でこそあるものの、キツチリとオールバックに決めている。豊かに蓄えられた髭も、ダークスーツによく似合っていた。こんなにも近くで見たのは初めてだが、俺もこんなに格好良く歳を取りたいもんだなと思った。

「優羽乃、紹介して貰えるかな？」

「ええ！ 勿論ですわ」

優羽乃は都合良く集まっていた俺達を見て、優雅な仕草で手招きをした。俺達五人は姫君に絶対の忠誠を誓った戦士宜しく、優羽乃の周りに集まる。

「えっと、こっちから熱田君、隼さん、王さん、奈良原君、疾風さんですわ。皆、私の大事なお友達ですよ」

「そうか、なるほど……」

理事長は下顎に手をやると、俺達を一人ずつ、じっくりと見た。

その心の奥深くまでを見透かそうとする注意深い視線は、強く鋭かった。そんな視線だが、俺には既視感があった。思い当たる節を探ってみると、嘘をついた俺を見る時の、優羽乃の視線とそっくりなのだ。血は争えない、そう感じた。

背中に鉄棒が入っているんじゃないかと思うほど、背筋が伸びた俺達。

「ふむ。皆良い目をしている。これなら我が国も安泰だ。いつも優羽乃が世話になっているようだね。この子は見た目からも分かる通りおてんばでな、色々と迷惑を掛けるかも知れないが、今後とも宜しく頼むよ」

「もう、お祖父様ったら……」

大げさに頬を膨らませてはにかむ優羽乃をよそに、俺達は練習もしていないのに、

「はい！」

ピタリと返事が合致した。微笑を浮かべながら深く頷くと、理事長は踵を返し、出口の方へと向かう。

「お祖父様。何も召し上がりませんか？」

「はは。こう見えても、お祖父ちゃんは忙しい身なんだよ。気持ちだけ頂いておくでしょう」

理事長は振り返りもせずと言うと、教室を出て行った。張り詰めた教室の空気が、次第に緩和されていく。ホットプレートで焼かれているホットケーキの、焦げた甘い匂いが教室に充満していた。

「あれがオーラってヤツだな。うん」

したり顔で言った雷斗に、頷かざるを得なかった。

「それじゃあ、みんな頑張ってね。私は実行委員会本部に行かなくちゃいけないから」

開店して一時間ほど経っただろうか、優羽乃は教室を急々と出て行った。

「お、もうこんな時間か。俺も部活の展示あるからよ。お前等も一応、我がロボ研の部員なんだから、絶対に見に来いよ。それじゃない！」

「ああ。分かってるって。もうすぐで休憩だから、その時にでも見に行かさせてもらおうよ」

雷斗も優羽乃に続き、教室を意気揚々と出て行った。

雷斗め……外に出るタイミングを窺ってやがったな？　もうすぐだとは言ったものの、本当に休憩を取る事が出来るのだろうか……本当、なんて盛況ぶりなんだよ！　俺の店なら喜ばしい事なんだけど、利益は寄付って事になってるし、いまいち張り合いがないんだよな。

女子達のコスプレ姿にも目が慣れ、感動を失ってしまった俺にやる気が起こるはずもなく、且つ、さっきからやけにオタクっぽい連中が大挙として押し寄せてきているのが、妙にムカムカする要因になっていた。

コイツら、どうやってうちの金鷄祭のチケットを手に入れたんだ？　汗くせーんだよ！　奉香達の体に、指一本でも触れてみやがれ、ぶち殺してやるからな！

噴火寸前の頭を高度に制御しながら俺は、オタク軍団を目一杯の速度で応対している内に、昼がすぎ去ると、ようやく来客がまばらになった。

「そろそろ良いだろ……」

時計の針は一時をゆうに回り、もう少しで二時になろうとしていた。予定より一時間押しである。やっこの思いで休憩時間を取る事になり、奉香達に声を掛けると、四人でロボ研の部室へと向かった。先ほど雷斗が言っていたとおり、密かに四人ともロボ研の部員なのだった。しかも、何故か優羽乃までもが部員にならされていた。生徒会長を仲間に引き入れて、部長会議を優位に推し進めようとしているのだ。雷斗もなかなかの曲者である。

部室棟へと向かう渡り廊下。そこには大きな屋根があるものの壁がなく、木枯らしにも似た、強烈な寒さの風が吹き込んでいた。奉香は風でめくれそうになっているスカートを必死で押さえている。そんな中、バニーガール姿の朔来の事が気に掛かった。

「朔来、そんな格好で寒くないか？ 上着貸してやるよ」

「いらんいらん。全然、平気やから。まあ、うちらロボットやしな」顔の前で手を振る朔来の仕草は、とても女子高生には見えない。

「あきまへん、儲かってる訳おまへんやろ」とでも言っているオッサンのようだった。笑ってしまいそうなのを我慢しながら、

「そーいや、そうだったな……ほんと、お前達を見てると忘れちゃうよ。ロボットだって事を」

「私も、たまに忘れる事がありますわ。自分がロボットである事」とぼけた顔をして奉香が言うと、朔来とシャオは責めるような視線を向けた。

「何体も見てきたアルが、こんなにヒトっぽい機体は見事ないアルよ。もともとメイド用として生まれてきたアルのに、家事の一つもこなせないアルなんて」

「ほんま、そやで。戦闘の時はあれだけ冷静にミッションをこなしていくのに、なんで卵焼きの一つも作られへんねや？ どう考えても、おかしいやんか……」

「卵焼きくらい、作れますわよ。失敬な……」

ムツとした奉香が二人をきつく睨む。

「あれは卵焼きじゃないアル。目玉焼きアルよ……」

シャオは呆れていた。

「まあまあ……そうキツイ事を言ってやるなって。人には、得手、不得手つてもんがあるんだから」

「ヒトにはな」

「ヒトにはアル」

声を揃わせる二人。関西弁と中国弁のユニゾン。

「そうか、人じゃないもんな……って、そう言うもんじゃないんだよ。おい、奉香も何か言い返してやれよ」

そう言って奉香を見ると、先ほどの怒った顔はどこへやら、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

ほんと、普通の女の子だよ……どこからどう見たってな。

「ほら、こんな二人放つといて、早く行こうぜ！」

奉香の手を取り、駆け出すと、

「うん」と小さな返事が聞こえ、俺達二人は部室へと向かった。

廊下の角を曲がると部室の入り口が見えた。それはもう凄い人だかりで、こっちも大盛況のようだった。

「コイツら……さっき、うちのカフェに来てた奴等じゃないか？」

どう見たってオタクな連中だった。

「ザッツライト！ 俺の売り出す商品と共にカフェの宣伝もしたかな。一石二鳥だろ？」

トイレ帰りなのだろう、ハンカチで手を拭きながら雷斗が勝手に答えてくれた。

「いやいや、本当に頼もしいな、お前。それにしても、金鷄祭のチケットはどうしたんだ？ 一人三枚までだったよな」

雷斗はハンカチを几帳面に折りたたむと尻のポケットに突っ込み、ニヤリと不敵な笑みを浮かべると、

「優羽乃に交渉したんだよ。この間の部長会議で、あろう事かロボ研に支給される部費が高すぎるってのが議題に上がってよ。俺としちゃ、この間の大会で優勝までしたんだから当たり前だって話な

んだがな」

自分の耳を、信じる事が出来なかった。

「えっ？ そんな大会あったのか？」

俺の質問に、ふんと鼻を鳴らした雷斗。責めるような目で俺を見ている。

「そうだよ！ お前と一緒に出ようと思ってたのに、入院なんかしちまいやがって……ま、仕方ないけどよ。強豪工業高校ひしめく中、たった一校の普通科で、しかも一人ぼっちの参加って言うおまけ付き。どれだけ寂しかった事か……でも、俺は負けなかった。相手にも、自分にも。地方新聞に顔写真付きで載せて貰ったし」

そう言う雷斗は、まんざらでもない顔付きに変わった。

「そうか……すまん。約束する！ 次の大会には一緒に出させて貰うよ。ところで、優羽乃との交渉はどうなったんだ？」

またもや不敵な笑みを浮かべた雷斗。さっきよりもわざとらしくて、大根役者演じる悪代官のようになっていた。

「だからな、部費を下げる事を認める代わりに、金鷄祭のチケットを大量に寄こせて、言ってやったんだ」

「なるほど、そういう事か」

頻りに感心している俺を追い抜くと、雷斗は人垣を掻き分け、部室へと入った。それに続いて俺と奉香が部室へと入ると、中にいたオタク達がざわめいた。皆興奮した面持ちで、奉香を見ている。

そういう、コイツらが来た時って、奉香は調理組に入ってたんだっけ？ まあ、ミキサーを回してただけだけど。でもまあ、今度ばかりはオタクだからとかは関係ないよ。このレベルの美少女をお目に掛かるなんて、滅多にないんだし……

「うおおおお！」

今度はざわめくどころの騒ぎじゃなかった。もはや奇声に近い、盛大な歓声が上がっていた。

なんなんだ？ なんの騒ぎなんだ？

入り口を見ると朔来とシャオが中に入ろうとしていた。オタク達

は二人のために行儀良く通路を作る。オタクという壁で作られた通路を二人は堂々と歩き、未来系美少女トリオが華々しく結成された。オタク達から一斉に浴びせられるフラッシュに、三人は頬を紅潮させている。

こんな三人と寝食を共にしているなんて言ったら、きっと袋叩きに合うだろう。それにしても、こんな三人が高校の、しかもロボ研の部室に揃うなんて、天和並みの奇跡だよ。しかも、まだ優羽乃が控えている訳だし。天和以上の奇跡ってなんだ？ 九蓮宝燈だったっけ？

そんな事を考えながら部室内を見回していると、雷斗の前に置かれたテーブルの上に、綺麗に並べられたフィギュアが目に入った。笑顔が愛くるしいそのフィギュアは、バブルを思わせるボディコン姿だった。

「なんだこれ？」フィギュアを指差し雷斗に尋ねた。

「自律二足歩行フィギュアの、『ジュリアナメグたん』だ。見てろよ」

雷斗は躊躇なくフィギュアのスカートの中に指を入れ、スイッチを入れたようだ。おもむろにそれを机の上に置くと、超スローだが歩き出した。障害物に当たり、止まった。そして、屈伸をし、腕を上げる。

さらに雷斗はメグたんを専用充電台の上に載せ、羽で出来た扇を持たせて音楽を流した。すると、メグたんは音楽に合わせて腰をクネらせ、一心不乱に踊り出した。呆然とメグたんの狂気に満ちたダンスに見入りながら、

「これって凄い……んだよね？」

俺の純粋な質問に答えてくれたのは、朔来だった。

「なかなか大したもんやで。この華奢なボディで、このバランス。しかも、フィギュアとしての造形も優れてる」

「さすが朔来たん。よく分かってらっしゃる。これでお値段一万円って破格だと思わん？」

朔来に褒められたのが余程嬉しかったのか、雷斗は上機嫌になっていた。

「確かに安い。それで儲けあるんかいな？」

「なんと、驚く事なかれ！ 原価六千円なり」

「ほほう。自分、やるやんか！」

お客さんを放っておいて、こそこそ話をしてるんじゃないよ……
雷斗の代わりに売り子をしていた奉香とシャオの前に、最後の一個を持った客が立っている。

「おい！ 最後のお客さんだぞ」

「お、すまん。つい話に夢中になってしまつて……毎度あり！
皆様、申し訳ございませんが、この度の即売分は完売です！ 次はビッグサイトでお会いしましょう！」

雷斗からの告知を受けた大量の客は、潮が引くかの如く、スーッと帰っていった。アツという間に空になった部屋。客前で聞く訳にはいかなかった、気になる事が俺にはあった。

「で、何体売れたんだ？」

「五十」

雷斗は、したり顔で俺の目の前に掌を広げた。

「マジで？ えっと、四千円掛ける五十だから……二十万！」

「まあ、そういう事だな」

雷斗の手が、パーからヴィクトリーを意味するチョキへと変わった。

「お前！ 凄いなんてもんじゃないな！」

若干のイラツと感があったのは否めないが、それでも俺の感心は本当の気持ちだった。

「でもまあ、造る時間も掛かってるし……それに今回は告知をかなり頑張ったからな」

「ふーん……ホンマに凄いやん！ で、どんな告知したん？ 今後の参考になるかも知れんし、ちょっと見せてや」

あからさまに雷斗の表情が曇った。ギクリって擬音が、俺には聞

こえたような気がした。

「ま、良いじゃないか、そんな事は……そんな事より、腹減らないか？ 儲けた金で、奢っちゃうぜ」

「確かに……お腹が空きましたわね」

「な、奉香ちゃん。そうだろ？ 善は急げだ！ 早く行こうぜ！」
「ちよい待った！ なんか怪しいな……あんた、なんか隠してるやろ？」

雷斗の顔は、ガガーリン大佐も驚くほどに青くなっていた。パソコンに近付こうとする朔来の肩に手を掛けたものの、一瞬で振り払われると、その顔色は青を通り越して、どす黒くなった。朔来の、マウスでダブルクリックをするカチカチッと言う音が、静まりかえった部屋に響いた、その刹那。

「このガキ！ エエ加減にせえよ、コラ！ いつ撮ったんじゃ、ワレ！ すぐ消せ！」

耳をつんざくほどの叫び声が壁に当たり、何度も何度もこだました。朔来の怒っている理由が気になり、モニターを覗いくと、そこに映っていたのは、画面一杯に広がったゴスロリ朔来（譜吟バージョン）と小さなメグたんだった。

『下界に降りた墮天聖、金鷄祭に來たる！』というタイトルが打たれ、朔来の口から出たフキダシには、「歓喜なさい下僕達。此の私が汝達に玩具を用意してあげたわ」とあった。

そりゃ怒られるだろうよ！ 俺の感心を返せ！

ふと床を見ると、雷斗が、武士でもここまでは無理じゃないかと思えるくらい、綺麗な土下座をしていた。

懲りない奴だねえ……それにしてもメグたんって、どっかで見た事があるような気がするんだよね……

パソコンのモニターを今一度見た俺だったが、それを思い出す事はなかった。

「俺の一ヶ月の汗と涙の結晶が……」

テーブルの上には桶が所狭しと並べられた。中にはいかにも高級そうな寿司達が、行儀良く整列している。金鷄祭も大過なく終わり、内輪での打ち上げを俺の家で催す事になったのだ。実行委員会の打ち上げがあったにもかかわらず、こっちの方が楽しそうという理由で、優羽乃も来てくれている。言うまでもないが、寿司は、雷斗の奢りだ。

「しゃべんな、アホ！」

雷斗をきつく見据えながら、朔来は罵声を浴びせた。

「朔来……もう勘弁して差し上げたら……」

なだめようと試みる奉香だったが、空振りに終わった。朔来の怒りは静まらなかった。

「いや、許さん。アンドロイド舐めんなよ。デリートせん限り、いつまでも覚えてるんやからな」

いつの間にか部屋の隅で小さくなっている雷斗を、朔来は見る事なく言った。

「朔来は大人気ないアルね……こうやって美味しいものを頂けるアルから、許してあげるアル」

「そうよ。シャオちゃんの言う通りだわ。朔来、そんなに怒ってたら可愛い顔が台無しよ。さあ、乾杯しよ。ね！」

優羽乃が促すと、朔来は仏頂面をしながら、渋々という感じでグラスを手を取った。

「よし、じゃあ僭越ながら。約一名深海を彷徨ってはおりますが、自業自得で御座います。楽しく金鷄祭を終えた喜びを、皆で分かち合おうではありませんか！ それでは、乾杯！」

俺の乾杯の音頭が終わり、皆がグラスを掲げると、カチーンとぶつけ合った。ちゃっかり雷斗も参加している。全く図太いもんだ。大トロを口に頬張りながら、そんな雷斗を見ていると、朔来との関係が妙に気になった。

朔来が怒っているのは、果たしてネットの告知が原因なのか？ それをしたのが雷斗だから怒っているのではないか？ 朔来の話

聞く限り、未来では仲良くやってそうなんだけど……まあ、深く考えても仕方ない……でも、早く仲直りをしてくれなきゃ、やりにくい事、この上ないよ。

「そういや、シャオの分析結果って、結局はどうなったんだ？ 金鶏祭の準備で忙しいって、少しは進んでるんだろ？」

雷斗と朔来によってもたらされる険悪な空気を少しでも変えたいと思い、そんな話を切り出してみると、

「その事なら、この前言った通りだよ。忙しかったってのはあるが、正直、今の俺には良く分からん。朔来は、あのデータ見てどうだった？」

「……………知らん……………」

朔来の目には卓上の寿司しか映っていないようだ。雷斗の悲しげな表情に笑いを堪えつつ、

「ふーん、そっか……仕方ないな。親父の事で、何か分かった事があったのかと、気になってたんだよな」

特に何も考えずに言ったのだが、雷斗は心底悔しそうに、

「力不足で、スマン。金鶏祭も終わった事だし、試験も俺には関係ないし、知り合いのプログラマーに、当たってみるよ」

プログラマー……って、お前に分からない事が分かるものなのか？ それにしても、こんなにも自信なさげな雷斗を見るのは初めてだな……

「もしかして、そのプログラマーって……」

優羽乃には、何か思い当たる節があったようだった。

「ああ、中学生天才プログラマーの^{おおだからあきのり}大宝明法だ。あんまり奴には、頼りたくねえけど、今度ばかりは仕方ない……」

「その名前……私達の中にあるOSを作った人と同じ名前アルね」

OS……ってパソコンとかに入ってるやつだよな？

「そうか。それでロゴマークの下にMHと書かれてあったのか。ったく、未恐ろしいとは思っていたけど、本当にやっちゃまうとは……ま、俺も人の事は言えないが、どえらいもんを作ったもんだ。ここ

まで完璧に制御出来るんだもん……」

ずっと不機嫌な面持ちだった朔来が、突如として口を開いた。

「ちょっと間違いがあるな。シャオのOSとうちらのOS、厳密に言えば、同じもんじゃない。ベースにあるのは、あくまでも雷斗が作った感情のないメイド用のOSや。各国で競った結果、全く違うもんみたいになってしもて、遂には感情を伴うまでになってしもたけど。そもそも、兵器であるアンドロイドに、感情なんか要らんかったんや。実際、うちらだって感情があるために困る事だってあるんやし」

言い終わると、朔来はチラリと雷斗を見た。雷斗は気付いていないようだったが、俺はそれを見逃さなかった。

朔来……やっぱ雷斗の事が……

そんな事を思っていると、大きく頷いた奉香が、

「朔来の言うとおりの感情がある事によって安定しない事もあるにはありましてよ。ですけど、想像するに、アンドロイドを只の兵器にしたくはない、そういう思いがあったのでは御座いませんこと？」

当然ですけど、私達は人を簡単に殺す事が出来ますわ。それも一瞬で、何千万という人を……」

上げられた凄い数字に、シャオは驚愕の表情を浮かべた。

「アイヤー！ そんなには無理アルよ！ せいぜい数十人が良い所アル」

朔来は分かっているという風に顔を横に振ると、

「奉香なら可能や。でも、そんなん出来んのは、奉香くらいのもんや。それに、感情の起伏が半端やないし、どうもうちらとは根本的に違うような気がするねん」

シャオは顔を真っ青にしながら、小刻みに体を震わせると、

「思い出したくもないアルよ！ どれだけ恐ろしかった事か……しかも、まだそんな隠し兵器を持っているなんて……日本の科学技術は化け物アルね！」

「そうよ！ 私を怒らしたら怖いんだからね！ ちょっと家事が出

来ないくらいで馬鹿にしてたら、いつか爆発しちゃうんだから！」

いつもの丁寧な口調とは違う奉香。俺には、朔来とシャオを睨み付ける目が、赤くなったような気がした。二人は蛇に睨まれた蛙のように、首を竦めている。明らかに動揺していた。

「うふっ。冗談ですわ、じょ・う・だ・ん……」

言葉の最後にハートマークが付きそうな、奉香の甘い声だった。

「質の悪い冗談や……まあ、なんにしても、失われた研究データの手掛かりが見つからん以上は、どうする事も出来へんな」

ばつが悪かったのか、朔来は話を強引に変えようと、俺を見た。

「そうだな……でも、そのOSってやつには、親父の研究成果が沢山詰まってる訳だろ？ 調べている内に、小さな手掛かりでも見付かるかも知れない」

俺のただならぬ期待に気付いたのか、雷斗は天井を見上げた。

「努力はしたし、これからもするさ。助っ人も来てくれるはずだし。でも、武尊には悪いが、俺にはそう簡単な話だとは思えない。楽観主義な俺だけど、あれを見てると、どうにもな……自分の馬鹿さ加減に腹が立って来るんだ。鳥のロゴマークに忌ま忌ましささえ感じるよ」

雷斗の気持ちをここまで見事に折ってしまうとは……

そんなOSの下支えをしている親父の研究に、不謹慎ながら誇りを感じた。

「雷斗！ そんな暗い顔をしないの！ もうその辺にして、お寿司、早く食べちゃいましょ。暖房のせいで、油が浮いてきてるじゃないの」

パンツと柏手を打って優羽乃は言った。寿司桶を見ると、確かに大トロやハマチが照明を浴び、油を爛々と輝かせていた。俺が箸を付けると、それが合図だったかのように、皆一斉に寿司を食べ始めた。あっという間に寿司桶は空になり、腹が満たされた俺は楊枝を咥えながら、ゴロンとソファの上で横になり、片付けを始めた奉香と朔来を、ぼんやりと眺めていた。

鳥のロゴマーク……

片付けを手伝おうと立ち上がった優羽乃だったが、急に動けなくなると、腕を組み何か考えているようだった。引き続き、ぼんやりとその様子を見ていると、優羽乃は小さく頷き口を開いた。

「鳥のマークって言えば……うちの校章も鳥が描かれているじゃない？ あれってさ、昔は違ったらしいのよね。お祖父ちゃんに見せてもらった事があるんだけど、昔の校章は黄色い丸の中に小さく鳥の絵が書いてあって……」

「それだよ！ そのマーク！」

優羽乃が言い終わらないうちに雷斗は目を丸くし叫んだ。満腹で眠気の妖精に完全包囲されていたのだが、雷斗の放つ大声に、飛び起きてしまった。

「それは恐らく、金鳥きんとうアル。我が国に伝わる伝説では、太陽には三本の足を持つカラスが住むと言われているアル。そのカラスの事を金鳥と言うアルが、黒点を表しているらしいアルよ」

「三本の足……」

奉香は小さく呟き、テーブルの上に、茶を入れ直してきた湯飲みを置こうとしている。絶対にやると思っていた。奉香はそんな俺の期待を裏切ることなく、茶をこぼした。ビックリしたのか、慌てて湯飲みが乗った盆をテーブルの上に置こうとして、それも全てこぼしてしまった。テーブルの上には、大きな茶だまりが出来ていた。

予想していたのか、朔来がフキンを持って奉香を睨んでいる。奉香は一つ咳払いをすると、

「それは、日本では八咫鳥と申しますわ。日本帝国陸軍中央情報隊のシンボルマークになっていましたよ」

八咫鳥って言うと、サッカーの日本代表のエンブレムのやつだよな……

「なんで八咫鳥なんかがOSのロゴマークになってんねやろうな」
朔来はテーブルの上を丁寧拭きながら、そう呟いた。

「あれだろ？ その中央情報隊だったっけ？ そこに頼まれて、そ

のOSを作ったって事じゃないのか？」

正直良く分かんが、少しでも天才達の役に立ちたくて、思いついた事を言っていた。

「それは違うだろ。だってシャオは中国製だぜ。何故、日本の軍隊が中国のためにOSを作る必要があるんだよ？ 味方ならまだしも、朔来の話では、世界中が日本の敵だったのに」

適当に言った訳じゃないのに、雷斗め、イライラしやがって！

ん？ ちょっと待て……この間の戦いの時……

「シャオの戦っている時の感じからすると、相当日本に対して恨みを持っているようだった。例えば、欠陥のあるOSを横流ししたとか、ウイルスを仕込んだとか……」

「そんな馬鹿げた事を仰るものではないですわよ。そんな事をする必要が、どこに御座います？ 未来の日本は現在の日本とは大きく違いましてよ。そんな汚い手を使わずとも、バブルが弾けて低迷を続ける中国なんて、恐るるに足らずですわ」

知らねえんだから、仕方ないだろ！ 三十年後どころか、一分先の未来だって知らねえの！

奉香の口調にイライラを覚えながら、雷斗を見ると、先ほどの優羽乃のように腕を組み、何やら考えているようだった。

「なるほど……中国は右肩上がりって訳には行かなかったんだな。経済的に弱いなら、尚更武尊が言ってた事も頷けるってもんだ。そうか、そうになると、朔来達のOSが気になる。朔来は自分のOSのロゴマークを見た事あるのか？」

「うちのは、羽を広げて向かい合う二羽の鳥がマークになってる。字は書いてなかったな」

羽を広げて向かい合う二羽の鳥……どこかで見たような気がするな……

頭にマークを想像し、そのマークを記憶に残っている映像に照らし合わせていく作業を淡々とこなしていった。すると、思い出した。

二羽の鳥、名札……病室！

「聖ギエナー病院のロゴマークだ。ナース服の胸に、二羽の鳥の刺繍があった。俺の親父は、その研究所で働いていたんだよ。ちょっと待っててくれ！」

ソファの上に立ち上がると、スリッパも履かず猛ダッシュで親父の部屋へと向かった。部屋は使っていた時のまま、放置してあった。綺麗に整理された机の引き出しを探ると、表紙に支給品と書かれた、新品のレポート用紙が出て来た。もしかと思い、レポート用紙をめくると、レポート用紙の右下に『S・G・B・S・I』と言うアルファベットと共に、向かい合う二羽の鳥のマークが小さくプリントされてあった。

「やった！」

無意識の内にそんな声が漏れ、それを手に取ると、急いでリビングへと戻った。

「これか？」

レポート用紙の右下を指し示しながら、朔来に聞いた。

「ちよつと違う。でも、形は一緒やわ。レポート用紙やから、書きやすいようにしてあんのかな？ OSのロゴの方は、こうもつと色がハッキリしてるねん。白い背景に、真っ黒いマークが……それこそカラスみたいに真っ黒の……」

「またカラスかよ……」

せっかく親父に繋がるヒントになると思ったのに……

無性に腹が立ち、レポート用紙を地面に投げつけてしまった。雷斗はそれをゆっくりと拾い上げると、表紙をめくり中を確認した。

「S・G・B・S・I……さっき聖ギエナー病院って言ってたよな？ って事は、『St・Gienah Brain Science Institute』つまり、聖ギエナー脳科学研究所ってなる訳だな。んー……初めて聞く名前だな……」

首を傾げながら言う雷斗に苛立つと、

「聖ギエナー病院の親機関なんだよ！」船戸先生からの受け売りの

言葉を叫んでいた。

「武尊、さっきは慌てて飛び出したから言えなかったんだけどよ、そもそも聖ギエナー病院ってなんだよ？ そんな病院聞いた事ないんだが、一体どこにあるんだ？」

「は？ 駅の向こうにあるじゃないか？ 商店街を抜けてしばらく歩いた所に、六階建ての白い建物がよ！ まあ、駅からも電車からも見えない位置だから目立ちほしくないがな……」

俺の言葉を受け、雷斗の表情が曇った。

「何言ってるんだよ、お前……夢でも見てたのか？ そんなトコに病院なんてねえよ。だいたい、あの辺は駅前開発のせいで、ゴーストタウンみたいになってんじゃないかねえか。確かにお前の言ってる所に六階建ての建物はある。けど、あれは廃ビルだ。しかも、どう見たって白くはない」

アニメの見すぎで、いよいよ頭がおかしくなっちゃったか！

「おい、優羽乃！ なんとか言ってるやつくれよ！ 雷斗はまだこの町に来て日が浅いから、良く知らないみたいだ」

優羽乃は無言だった。俺を見つめるその目は、憐れみで溢れていた。

「お前、退院してからその場所には行ったのか？ 行っていないにしても近くで見たとか……」

「行ってねえし、見てもねえよ！ へっ！ 分かったよ！ 今から見に行ってるやんよ。どっちが正しいか、行きや分かる事じゃねえか！」

コートを取りに行こうとした俺の前に、奉香が立ちはだかった。

「武尊、行っても無駄ですわ。恐らく雷斗の言ってる事が正しいのでしょう。あなたは洗脳を受けていますものね。ルナという妹が出ていってから、あなたは一切その名前を私達の前で口に出す事はなかった。私、迂闊でしたわ。自然と洗脳が解けたのかも知れないと思っていましたの。未来にも、ごく少数ではあるけど、そういう人がいますもので。でも、今のあなたを見てハッキリしましたの。あ

なたは私が言った事を気にして、口にも出さずに我慢してらしたの
でしょ？ 違いますか？」

奉香の正鵠を射る問いに、頭を掻き耑った。

「ねえ！ どうですか？」

奉香が俺の両肩を掴み、大きく揺すった。無理矢理その手を払い
のけると、

「ああ、そうだよ！ 洗脳？ そんなの知らねえよ！ ルナは俺に
とって、たった一人の家族だ。妹だ。俺はルナに会いたいんだ。と
んだシスコン野郎なんだよ！ 笑いたければ笑え！」 奉香の目は、
優しくなった。それが余計に悔しかった。もう、何がなんだか分から
なかった。

「俺は、お前達がいてくれて嬉しかった……家が暖かくて……賑や
かで。でも……でも、家に帰ればルナがいるんじゃないかって……
毎日毎日、ドアを開ける度に期待を膨らませていた。アイツの代わ
りはいないんだ。俺にはルナが必要なんだ！」

もう物事の分別なんて付かなくなっていた。

「お前達が……お前達が来たから……お前達が来なければ、ルナは
……」

一瞬だけ目が覚めたように、冷静になった。

最低の発言……俺は俺が嫌いだ……

「武尊！ いい加減にしなさい！」

頬が熱かった……

優羽乃の破壊的な平手打ちが浴びせられた。頬から広がるのは痛
さではなく、虚無感だった。力なく床に、膝から崩れ落ちた。

「なあ、優羽乃……コイツらに言ってやってくれよ。三人でよく遊
んだよな。裏の公園で……ルナは足が遅くてさ、鬼ごっこやって
いつも鬼ばかりでさ……悔し泣きしてるルナを、優羽乃があやし
てくれてたじゃないか……中学最後の剣道の試合も、ルナと一緒に
応援をしに来てくれていたじゃないか……棄権して凹んでいる俺を、
二人で慰めてくれたじゃないか……俺はハッキリ覚えてんだよ！」

幼い声、真っ白い肌、甘い匂い、柔らかい感触……これが嘘だってんなら、何が本当だってんだよ！　なあ！　優羽乃お！　教えてくれよ！　お前達は本当なのか？　これも嘘だってのか？　どうなってるんだよ……」

優羽乃は無言だった。俺の目から溢れ出る涙が、止まらなかった。俺は優羽乃の足にしがみついて、子供みたいにわんわん泣いていた。自分の目から出る涙なのに、その意味が分からなかった。悔しさなのかも知れない。悲しさなのかも知れない。とにかく俺は、泣きじやくっていた。

「武尊……ルナちゃんの手紙、覚えてらっしゃる？　信じたくなくとも、真実の一つですの。あの手紙が真実でしてよ。でも、諦める事が出来まして？」

聞くまでもねえよ……

「それは、無理だ」

「では、命令を付け加えて下さいまし。ルナちゃんを連れ戻せと。私達を未来から送り出したのは、他でもない、あなたですわ。私に、命を賭して遂げなければいけない命令を下す事が出来るのは、唯一、あなただけでしてよ。叶うかどうかは分かりません。でも、少なくとも私の中で、私の命よりもルナちゃんの命の方が重たくなる事は確かですわ」

涙で曇った視界でさえ、奉香の温かい笑顔が見えた。ルナの事を、こんなにも想っているのに何も出来ない自分が不甲斐なかった。自分のワガママを、一人の女の子が命懸けで叶えようとしてくれる、その事実が、情けなかった。

一番弱いのは、俺じゃないか……

「奉香……ありがとう。未来の俺は、やっぱり弱いかな？」

「決して強くないですわ。でも、弱いからこそ理解できることがあるものでしてよ。そして、私は、そんな未来のあなたが、大好きですわ」

奉香はそう言って、悪戯に爽やかに笑った。その時から、未来の

俺が俺のライバルになった。決して負けないと、心に誓った。

「命令……じゃなくて、頼みがある！」

俺の言葉に奉香は不思議そうな顔をした。

「これからの戦い。俺も一緒に戦わせてくれ！俺にとっては、奉香も朔来もシャオも、仲間なんだ。呆然と眺めていたくはない。それに、親父が蒔いた種を、俺が刈り取るのが筋ってもんだ。足手まといになると思うけど、頼む！俺を戦場へと上げてくれ！」

奉香と朔来は楽しそうに笑った。

「ほんま、何十年経っても成長せんもんやな」

「流石は博士殿ですわ。友達の事をよく分かっていらっしやる」

奉香は俺の襟元にあるペンダントを指差していた。

「心得ましたわ。元帥殿と共に戦えるなんて、光栄の極み。こちらこそ、宜しくお願い致しますの」

ようやく少し、胸のつかえが取れたような気がした。

「それと、もう一つ……さっき言った事、許してくれ！本当に、すみませんでした！」

雷斗ばりの綺麗な土下座を会得している自分に驚きつつも、床に頭をこすりつけていた。

「ちょ、やめて下さいな」

奉香は慌てて俺を抱き起こしてくれた。朔来は俺を指差して爆笑している。

「ほんま、難儀な御主人様やで。しかも、変態やし。ほんま、守りせなあかん奉香が、可哀想に思えてくるな」

そこまで言うか？

「朔来……武尊はあなたの主人でもありましてよ」

「はっ？知らんわ！そんな奴……」

腕を組んで、プイッと顔を横に向けた朔来の仕草が、なんとも言えず可愛くて、可笑しかった。

「ちよっと、朔来！なんて事を言いますの……」

怒った奉香の横顔が輝いて見えた。

そう。未来の俺は、情けない過去の俺を分かっているからこそ、
こんなにも素敵な仲間を寄越してくれたのだ。そう思うと、俺は情
けなくてよかったと、本気で思えるほど、二人は大切な仲間になっ
ていた。

第七章 満月の夜って、なんだかドキドキしない？

年の瀬が近付き、世間が何やら慌ただしくなっている頃、木枯らしの窓を叩く音が、五月蠅く響くほどの静かな部室で、いつもの五人に囲まれていた。それは俺にとって、決して楽しいひとときではなく、むしろ被告人のような気分だった。

「物理と化学、ちゃんと出来たか？」雷斗が静かに聞いてきた。

「問題ない……」俺は答えていた。自信があった。

「現代文、古典、歴史、公民は？」優羽乃の心配そうな表情が、顔立ちの良さを際立たせていた。

「うん、大丈夫」まあ、八割くらいかな……

「英語は大丈夫アルか？」中国語は英語と似ているそうだ。とは言っても、アンドロイドなんだから、勉強をしたって事はないのだろうが……

「ああ、多分な」俺は名前が示す通り、日本男児だ。異国の文化を、そう容易く受け入れてやるものか。

まあ、好物はハンバーグだけど……六割くらいは取れてるだろう。「数学は出来てんやろな？」浪速の商人は、数字に詳しいってか？でも実際、長距離砲の使い手だけあって、演算能力は、他の機体より群を抜いているらしい。

「うぬう、恐らく……」物理が出来るのに、数学が出来ないなんてって思うだろ？俺は事象から入るタイプなんだよ。でも、半分以上は出来てると思う。

「えーっと、えーっと……」奉香は腕を組んで、他の教科を思い出そうとしている。

「お前も……駄目そう……だな」

「そ、そんな事ないですわ！」

目が泳いでんじゃねえかよ……それにしても、やれやれだな。結果はどうあれ、期末試験が終わって良かった。ったく、このクソ忙

しい時期に試験なんてやりやがって……十二月は師走って言うんだ。師匠クラスが走っちゃうくらいに、忙しいって事なんだっての！

俺の答えを聞いても尚、心配そうな面持ちの仲間に囲まれながら、そんな下らない事を考えていると、全く持って頼りない俺を氣遣ってか、雷斗が口を開いた。

「明日から終業式までは、ひとまず休みだ。そろそろ本格的に、ルナちゃんの搜索を開始しないとな」

「そうだぜ！ 俺にとっては試験なんかよりも、ルナの方が、よーっぽど大事なんだから！」

息巻いて言っではみたものの、手掛かりがない以上どうする事も出来ない。あの金鵒祭の夜に、皆で話し合った結果、取り敢えず学生の本分とやらに注力しようという事になり、今に至った。

それなのに、この体たらく……注力を微妙に失敗してしまった。

ルナに合わせる顔がない。皆の時間を無駄にして、本当にすまん！
だいたい進学校だかなんだか知らねえけど、難しすぎるんだよな。優羽乃と同じ高校に通いたい、その一心が入試での奇跡を巻き起こしただけなんだよ。俺は基本、馬鹿なんだから……

頭の中に謝罪の気持ちと良い訳が入り乱れ、久しぶりに皆が集まったロボ研の部室を何となく見回していた。何を処理しているのやら、フル回転するパソコン。そのせいなのか、部室は暖房も付けていないのに、心地良い暖かさだった。

「パソコンと工具だけしかない、相変わらず殺風景な部室だよな。

こんな所にずっといたら、心にカビが生えちゃうぜ……」

「ほっとけ！ フィギュアやポスターを置いておくと、どこの誰だか知らねえが、勝手に捨てられてんだよ！ そもそも、お前ら部室に一切顔出しやがらないくせに。だいたい、お前らはロボ研の一員だと言う自覚があるのか？」

責めるような雷斗の視線。

だって、来たって何やって良いか分からねえんだもん。

「よう言うわ！ うち、ちよくちよく顔出したってるやんか！」

朔来の逆襲が始まった。

「ち、違うよ、朔来ちゃん……コイツらに言ってるの!」

雷斗は朔来以外の俺達に、一人ずつ指を指していきながら言った。ってか、朔来はたまに遅く帰って来ると思っていたら、部活してたのか……こんなキモイ部室に若い男女が二人……そんな子に、お前を育てた覚えはないぞ! 帰ったら、お説教だ!

「ああ、そんな事言っても良いのかしらね? 部費、減らしちゃおっかなあ……」

優羽乃の、雷斗を睨む目が光った。

「すいません! もう言いませんから!」

九十度に腰を曲げ、頭を下げる雷斗。

「弱っ!」反射的に言うと、雷斗はキッと睨み付けてきた。

ふーんだ! 試験が終わった以上、お前なんか怖くないもんね!

「チェッ!」

舌打ちをする雷斗だったが、もうこの話は部の存続を危うくするとも思ったのか、咳払いを一つすると、

「今日から、OSをもう一度詳しく解析しようと思ってな。この前言っていた助っ人を呼んであるんだ。そろそろ来るはずなんだが……」

雷斗の言葉を聞いていたかのようにタイミング良く、部室の扉をトントンとノックする音が聞こえた。

「噂をすればなんとやらってやつだな。入ってくれ!」

皆の視線が、開きゆく扉に注目している。そこに立っていたのは、幼い顔立ちをしたショートヘアがよく似合う、女の子だった。

ん? いや、ちょっと待て……明法かなんか言う名前だったよな……それに、着ているのは学ランだし。男……なんだよな? なんてるフェミニンフェイスだ……

「失礼致します。皆様にお世話になる前に一つ、言っておきたい事が御座います。あの、私、雷斗さんを愛しています!」

フェミニンのフェミニンによるフェミニンな第一声であった。

何言ってんだよ、コイツ……開口一番に愛の告白って！ しかも相手は男……マジで狂気の沙汰だな。いやいや、別にホモとかゲイとかを、批判してる訳じゃないんだからね！

「おい！ やめろって、メイホー……そんな事より、皆に挨拶しろよ……」

言葉とは裏腹に、満更でもない（俺にはそう見えた）表情で、頬を赤らめながら、雷斗はメイホーとやらに自己紹介を促した。

「あ、はい。私、天才中学生プログラマーの^{おおだからあきのり}大宝明法と申します。この度は他ならぬ雷斗さんに、是非とも協力を仰ぎたい旨の要請があり、参上仕った次第で御座います。是非とも皆様には、私と雷斗さんの関係を温かく見守って頂きたい所存で御座います」

普通、自分で天才って言うかね？ 自意識過剰な自己紹介だな。つたく、まともな奴はいないのか？ 蓋を開ければ、また変な奴じやん。

「コイツ、なんなん？」朔来は、明らかに不機嫌な表情で雷斗に問い質した。

「コイツは中学校の後輩でな……世界中にある、殆どのプログラミング言語をマスターしててよ、俺のロボ作りにも、かなり貢献してくれている。この歳にして、超が付くほど大手のソフト開発会社から、応援の要請が来るほどなんだぜ」

ふーん……見た目や発言はともかく、立派なもんじゃないか。

「で、その天才君にシャオのOSを調べて貰うって訳か？」

「そうだ。少なくとも、ソフトに関しては俺なんか比較にならないからな。ま、代償はかなり高く付いたが……」

俺の問い掛けに、伏し目がちに答えた雷斗。

怪しい……何かあるな。それにしても、明法に雷斗は全幅の信頼を置いているんだろうって事は分かった。基本、コイツは、なんでも自分で解決したい方だし。

何かあると思ったのは俺だけじゃなかったようだ。明法と雷斗を、例の射抜くような視線で見ている優羽乃が、目に映った。

「代償？」

雷斗へ向けた鋭い眼差しが、好奇に満ちた眼差しへと変わる。

「クリスマスを、私と一緒に過ごして頂くので御座います。それが私の出した条件で御座いましたもので。何分、私も多忙の身なので御座います。これぐらいの破格の条件で御座いませんか、愛する雷斗さんの依頼とあれど、そう易々と聞き入れる訳には、行かないので御座います」

「そ、そう……」

異なる方向から質問への答えが返ってきたものだから、優羽乃は困惑の表情を浮かべていた。皆が呆然とする中、雷斗は動揺を隠すように、慌ただしく一際熱を帯びたパソコンへと、明法を誘った。これ以上、事態を悪化させるべきではないという判断なのだろう。

「これだよ。どうだ？」

「どうだと仰りましても……少しお時間頂けますでしょうか？」

「そ、そうだな。慌てさせてすまない……」

「本当にもう。雷斗は気忙しいんだから……」

雷斗に向けて、ハートマークが飛び出しそうなウインクをした明法は微笑んでいた。雷斗はと言えば、唯々照れるばかりだった。

「ってか、二人っきりの時は、さん付けじゃないんだな。見てるこっちだって、照れるってんだよ！ ああもう、なんだかなあ……けどまあ、俺達に今出来る事は、明法も言ってたけど、温かく見守る事だけだしな。」

パソコンデスクの前で椅子に座り、肩を寄せ合って意見交換をしている二人を、生暖かい目で見守った。

しばらくなんとも言えない沈黙が続き、それを打ち破るように、奉香がホワイトボードの横に移動すると、

「せっかく一同揃った事ですし、今までのお復習いでもしようじゃ御座いませんか？ OS以外にもヒントがあるかも……ですわ」
「ヒントねえ……」

頭を高速回転させて見たものの、どこまでが本当の記憶なのだけ

見当が付かない。自分の事とは言え、力になれるかどうか怪しい所ではあった。

「せや！ シャオと一緒にあった黒尽くめの男は？」

奉香がホワイトボードに『黒尽くめの男』と書き込んだ。

「正体は不明アルが、案内役のような者アルね。朔来のような高性能なレーダーが付いていないと、一千万人以上もいる人の中から、武尊を探し出すのは困難アルから。時を超える前に、上官から説明されたアル。ただ、あの男、こっちで御座ると一言発した後は、黙り通しだったアルが……」

「案内役かぁ……一体誰の差し金なのかしら？ 朔来のレーダーには、その男は反応していないのよね？」

優羽乃が聞くと、

「うちのレーダーは高性能ではあるんやけど、ステルスを破るほどではないねんなぁ……こちら、性能の差はあるけど、皆ステルス機能が付いてるし」

悔しそうな表情を浮かべる朔来。

「いや、でもおかしいじゃん。そのレーダー、ルナには反応したんだよね？」

「それは、武尊の唇にチューしたからやんか。洗脳についてはよく分かってない所もあるけど、基本的には、アンドロイド同士の書き換えと同じやと言われてる。うちが、シャオにチューしたと同じって事やね。結構な力を使うから、ステルスなんてやってる余裕がなくなるねん」

「ふーん……そうなんだぁ……って！ え？ チュー？ チューってキスの事よね？ 相手はルナちゃん？ ルナちゃんって、妹って言う設定になっている訳よね？」

優羽乃の顔色が変わった。眼光炯々として、俺を見ている。

「そ、そうだよ……悪いかよ？ そんなの欧米では、普通の事じゃないか！」

「ここは日本よ！ 馬鹿じゃないの、あんた！ ほんと、ただの変

態ね！」

そう言った優羽乃の形相は、鬼のようだった。俺には角が見えていた。

ああ、俺の初恋よ、淡い恋心よ。さようなら！ 全てが今、消失した。想えば儚い、恋だった……

初めて優羽乃を見たのは、近くの公園だった。調子に乗って走り回り、転んでしまった俺。膝小僧をすりむき、血を見て半泣きの俺に、優しく微笑みかけ、ハンカチを差し出してくれたのが、優羽乃だった。真っ白いワンピースが、真夏の太陽を受け、輝いて見えた。鼻水を拭いたハンカチを返そうとすると、

「あげる。大切に使ってね」

微笑みながら言ってくれた。女の子から物を貰ったのは、それが初めてだった。今も机の引き出しには、あの時のハンカチがしまっている。受験勉強の時、幾度となくそのハンカチを見て、自分を奮い立たせた。天使のような微笑みを思い出しながら。

優羽乃……ああ、我が愛しの優羽乃！

生きている心地がしなかった。机に突っ伏してしまっていた。

朔来め！ 余計な事を……

恨み節を頭に唱えながら、ぼんやりと霞む目で優羽乃を見ると、気持ち切り替えようとしたのか、襟をキツチリと正し、

「ったく……で、最後にキスをしたのはいつなの？ それからの記憶は改変されていないって事よね？ 何か変わった事とかなかった訳？」

最後にキスをしたのは、ルナがいなくなった日の朝だったよな……

「変わった事……んー、そう言えば、ルナにそっくりな女の子と出会ったな。しかも二回。一回目は玄関先で、二回目は研究所だ」

俺の発言に、優羽乃の顔付きが変わった。俺には、気分が高揚しているように見えた。

そういや、優羽乃ってサスペンス物が好きだったな……出て来る映画の話題は『アイデンティティ』だの『ソルト』だの……『S

A W』なんて、何本あるんだよって、嫌になったもんだ。

「ルナちゃんにそっくりな女の子？　その子が家に来た理由は？
で、研究所って何？」

身を乗り出した優羽乃の矢継ぎ早の質問に、少し引いた。

「そんなに一度に聞くなって……そっくりって言っても、明らかに違うんだよな。でも、もう少し成長したら、本当にそっくりになると思う。それから……玄関に居た理由は分からない。ただ、家族写真がなくなった。そいつに盗まれたんだと思う。唯一四人で写った写真だったのによ……写真立てだって、親父の形見みたいなもんなんだぜ。兎の彫刻が施された、綺麗な写真立てだった。ま、写真立ての記憶は、どこまでが本当か、分からないけど……」

無意識の内に頭を振っていた。優羽乃はもう一つの質問の答えを待っていたようだったが、少し休みたかった。やんわりとだが、頭が痛かった。

ルナの置き土産には、困ったもんだ……

奉香は俺達の会話から次々とキーワードを拾い上げ、ホワイトボードに綴っていた。『黒尽くめの男Ⅱ案内役』、『ルナ(妹)とキスⅡ洗脳Ⅱ変態Ⅱ武尊』、『ルナに似た女の子Ⅱ？』、『研究所Ⅱ？』、『盗まれた写真立てⅡ父の形見？Ⅱウサギの彫刻』

(妹) ってなんだよ！　絶対わざとだよな？　奉香……

シャオはホワイトボードを見ながら、腕を組み、考え込んでいた。

「ルナ……キス……洗脳……変態……武尊……写真立て……ウサギの彫刻……」

書かれた文字を呟くようにして読んでいる

ってか、シャオ、お前もかよ……

「何か引つかかるアルな……ルナ……ウサギ」

「どうしたんだよ、シャオ……何が引つかかるんだ？」

「んー、ルナは日本語で月という意味アルね。月に兎……」

「団子でも食べたくなったのか？　十五夜なんて、とっくに終わってるぜ」

俺の冗談とおぼつかない言葉が溜飲を下げたのか、シャオは、「それアルよ！」

晴れ晴れとした顔をして叫んだ。何事かと、皆の視線がシャオに注がれる。

「玉兎アル！ 金烏の反対アルよ。月に兎、太陽に烏。中国に伝わる故事アルよ」

「また金烏かよ……それに玉兎ってなんだ？ 一つ一つ解決しているぞ……」

嘆く俺を尻目に、雷斗は何か気が付いたのか、パソコンの前で振り返ると、口を挟んだ。

「武尊。さっき研究所って言ったよな？ 詳しく教えてくれよ」

研究所……

「俺の親父が働いてた場所だ。病院で出会った、船戸って先生が教えてくれた。両親の葬儀で世話になったから、礼を言いに行ったんだ。そしたら悲鳴が聞こえて来て……裏の広場にナイフを持った少女と数人の研究員みたいな奴らがいた。そのナイフを持った少女つてのが、ルナに似た女の子だ。雰囲気から察すると、逃げ出したんだろうな……で、そこで船戸先生にまた会った」

「ふーん……行ってみる価値はありそうだな」

雷斗の言葉にペンを止めた奉香は、大きく頷いた。

「そうですね。もしかすると、その女の子が熱田博士が長年に渡って研究をされていた、例の被験者なのかも……」

別になんとも思っちゃんかなかったのだが、奉香は俺と目が合うと口をつぐんだ。なんとなく気まづくなって、目を瞑った。目蓋の裏には、ルナに似た女の子がいた。

なるほど……そんな考えがあったか。確かに年格好からすると俺達と同じ年くらい。辻褄が合う。人体実験が嫌で、ようやく逃げ出す事に成功したと……でも、それなら、何故家に来た？ しかも、そのまま逃げ出せば良いものを、再び研究所に戻っている。それは何故だ？

考えを巡らしている俺の姿を見て、奉香は何か勘違いをしてしまったようだ。

「ご、ごめんなさい」

頭を下げながら謝ってくれている。

「え？ いや、違うんだ……ちよつと頭を使いすぎて、変な顔に……とにかく！ その研究所に行ってみるか？ 真相に迫るには、それしか方法がなさそうだし……」

「そうだな。こっちの方もそろそろっぽいし……な？ メイホー」

雷斗は立ち上がりメイホーの肩を優しく叩くと、パソコンから離れ、俺達のいる机の方へと向かって来た。

「はい……完了致しました」

明法も立ち上がると、雷斗を追うようにして、こちらへとやって来た。皆の注目が明法に集まる中、眉一つ動かさず、咳払いを一つすると、静かに口を開いた。

「では、皆さん。手短では御座いますが、講じさせて頂きます。このOSを作ったのは、やはり、私で御座います。付け足させて頂くと、それは、そんなに未来の話では御座いません。何年後か、という所で御座いましょうか……眉唾物だと思われるかと存じますが、根拠が御座います。それは、今の私の知識でも近い物は作る事が出来るという事です。無論、脳の回路図があればという仮定の下で御座いますがね」

雷斗と言い、天才とはどうもあっけらかんとしすぎてるな……近い将来物凄い事をしでかすというのに……でも、ちよつと待て……「この前の話では、雷斗が作ったベースに感情を加えた物という話じゃなかったか？ 時系列がおかしくないか？」

明法が俺を見ている。その目は、明らかに下等な生き物を見る目だった。声にならない失笑を浮かべると、

「もう八割方出来て御座いますよ。私すら目を見張るような物がね。全く、雷斗さんの多才ぶりには脱帽で御座います」

「マジでか？ ってか、雷斗、それならそうと早く言えよ！」

雷斗は照れるように頭を掻くと、

「そんなたいそうなもんじゃないんだよ……しかもこれは朔来ちゃんの助言があったからだ」

今度は朔来の番だった。頬を紅く染め、大いに照れた様子である。

「朔来！ 何を考えておいでですか？ 過去には、無駄に足を踏み入れぬよう、あれほど申しましたのに……」

「だって……コイツ、怠いねもん……」

いやいや、それは言い訳にならないだろう？ 怠いからって、何年も時間を進めて良い物なのか？

「心配には及びません。未来から来た、お人形さん達。凄い事は確かです。御座いますが、雷斗さんがお作りに成られたのは、あくまでもロボット用で御座います。決して、人用では御座いません」

明法は悪戯な笑顔で俺達を見渡すと、奉香に向かってウインクをした。

「ちょっと、待て！ 人用ってのはどう言う意味だ？」

何故か挙手をして発言してしまった。

「言葉通りで御座いますよ。人にも転用可能であるという事で御座います。もう次の約束が迫っておりますので、私の見解を不躰ながら申しますと、やはり、この脳の回路図の所在が鍵で御座います。私がいつか手にするであろう回路図が、現在どこにあるのか？ 月を指せば指を認む……皆様の健闘、心より祈って御座いますよ」

皆に向かって丁寧にお辞儀をすると、明法は踵を返し、部室を出て行くとした。

「あなた、本当に今のが全てなの？ 他にも分かっている事があるんじゃない？」

優羽乃の言葉に歩を止めると、ゆっくりと振り返った明法。薄く開いた口元から覗く、白い歯が、とても気になった。

「三崎優羽乃様、全て、で御座いますよ。含みを持たせるような言い方をしていたとしたら、申し訳御座いません。あと、雷斗さん。約束、忘れないで下さい。クリスマス楽しみにしています。日本で

迎える、最後のクリスマスになるかも知れませんが」

「ああ、心配すんなって。男と男の約束じゃないか……それにしても、アメリカ行き、決まったんだな？」

「ええまあ。出来るならば、雷斗さんと学園生活を過ごしたかったのですがね……」

明法は少し悔しそうにしている。俺達に、初めて見せた表情だった。

「そっか……まあ、残念だけど、夢の方が大事だよ」

「いや……」

ギリギリ届くほどの小さな声で、否定し、何かを言いかけた明法だったが、雷斗は何も気にしてない風に、

「そういや、弟はどうしてんだ？」

明法は、再び悔しそうな表情を見せた。だがそれも一瞬の事で、
「文章は来年この学園に入学します。皆さん、御面倒かも知れませんが宜しくお願い致します。それでは、お暇させて頂きます」

明法は皆に対し丁寧に一礼をし、部室を出て行った。優羽乃の少し苛ついたような表情が、俺の目には映っていた。

「どえらい天才やけど、うちはあーいうタイプ好かん……」

朔来はそう呟くと、何か気になった事があったのか、パソコンを見に行った。

「そうアルねえ……まさか自分の脳を作った人に、こうして会えるとは思っていなかったアルよ」

「運命の悪戯ってやつなのかも知れんな。さて、ここからが肝心だ。明法が言ってた脳の回路図、そしてルナに似た女の子、研究所に行けば、何か手掛かりがありそうだ。まあ、正直、何があるかわからないけど……優羽乃、雷斗、どうする？ 一緒に来るつもりなのか？」

二人に投げ掛けると、一も二も無く、力強く首を縦に振ってくれた。二人の気持ちに、友達って良いもんだと感動していると、

「ちょい待った」

パソコンのモニターを覗いていた朔来から声が上がった。

「雷斗、ちょっと。これ見てみ」

「ん？ どうした？」

雷斗は朔来に促され、パソコンに近付くと、モニターを見た。

「メイホーめ……クリスマスプレゼント、奮発してやらないとな！」
何興奮してんだよ？

「何かあったのか？」

朔来は小刻みに何度も頷きながら、

「何か所っちゃうって。OSがアップデートされてる。うちがプロテクトしたシャオの戦闘能力が解除されてる上に、国籍の変更が可能になってる。アイツ、末恐ろしいガキやな……」

どこの大阪のオッサンだよ？

「と言う事は……私はまた戦えるアルか？ 本当アルか？」

シャオは勢いを付けて朔来に抱きついた。その目を輝かせながら。
「戦える。せやけど、中国人としては無理みたいや……あくまでも、日本人として……シャオ、どうなん？ それでええの？」

シャオとは対照的に、曇った表情で朔来は言った。その言葉を聞き、シャオの表情は百八十度変わった。真夏の夕立を思わせた。だけど、それは束の間の事だった。シャオは吹っ切れたように、

「お前達の私達に対するイメージは察しが付いているアル。それは現在でも未来でも同じアルから……でも——でもアル、本来の中国という国は儒教の国アルよ。あれだけ迷惑を掛けたのに、お前達は私に本当に優しく接してくれたアル。その恩義に報わずして、どうして胸を張って祖国に帰る事が出来るアル？ 私は中国人としての誇りを胸に、日本人として戦うアルよ！ いや、戦わせて欲しいアル！」

呟くようにでいて、しっかりと芯の入った言葉だった。そして、シャオはニカッと笑った。その笑顔は真夏の太陽のように、キラキラと輝いて見えた。そんなシャオの想い、応えない訳にはいかない。

「ありがとう、シャオ。そうだよ……国同士のゴタゴタなんか、知ったこっちゃない。今の俺達は仲間だ。友達だ。頼んだぞ、シャオ！」

大いなる誤解をしていた自分の愚かさに、気付いた。

ハッキリ言って、国同士の事なんか分からん！ 色んな情報だけが無理矢理にでも頭に入ってきて、それがいつの間にか頭を占拠する。そう、正に洗脳だ。でも、それはとても不完全な物だ。誰しものが薄々は分かっている。このままじゃ駄目なんだって事を……世界に平和を！ そんな大それた事じゃないんだぜ。シャオの熱さ、俺は凄いと思ったね。そして、どこの国にだって、こんな馬鹿みたいに熱い奴がいるんだよ……そんな奴らを失望させる訳にいかないよな？ 何が出来るかじゃない。何をするかなんだよ。今の俺はちっぽけな存在だ。でも、未来の俺は国を動かす力を持っている。なら、今が過去との決別の時なんじゃないか？ 日本という国でもって、世界に平和を、届けてやろうじゃないか！

朔来を見据え、

「シャオを、アップデートしてやってくれ！」

俺の眼差しは、朔来にどう映っていたのだろうか。朔来はだらしなく椅子に座っていたのを、正しい姿勢で座り直すと、

「了解しました、元帥殿！」

綺麗な敬礼をして、俺の言葉を迎えてくれた。しかし、朔来はそんな自分の態度に気付き、

「って、そんな真剣な目付きすんな、あほ！ あー、メツチャむかつく……」

何を怒っているのだから……

「もうええわ。シャオ、こっちおいで」

そんな朔来を見て、奉香は楽しげにクスクスを笑っていた。

「朔来に敬語を使わせるだなんて、大したものですよ。本当、懐かしい目だった……」

「そうか？ でも一瞬だけだったぞ……」

「それで良いのですわ。今の武尊は……」

「そんなもんかね？ ま、どうでも良いけどよ」

シャオのアップデートは、そんな他愛もない会話の間に終わってしまった。

「なんだか実感が沸かないアルね……」

シャオは自分の姿を窓に映して言った。

「そうやろうな。でもアップデートは成功してるから安心しい。それとコレ……あげるわ」

朔来は通学鞆に付いていた、銀色に輝くキーホルダーをシャオに差し出すと、

「矛の代わりや。奉香がぶった切ってもうたからな……メイドインジャパンやで！」

「これが武器アルか？」

シャオはキーホルダーを目線の高さに持ち上げると、半信半疑の表情でそれを凝視している。そのキーホルダーは蛇のような形をしていた。

「そんなじゃ、そろそろ帰るとするか？ 研究所へは、十分準備をしてから行ってみよう」

「ちよっと待つアル！ 今日満月アルよ……月兎……月に浮かぶ兎。何か関係があるに違いないアル。行くなら絶対に、今日が良いアルよ」

なんの根拠もないシャオの提言だったのだが、藁にもすがりたい気持ちでしばし考えてみた。

満月か……次の満月を待つと、年を越しちゃうし……それにどのみち夜中に忍び込む訳だから、満月の方が明るくて良いし……

「満月の夜って、なんだかドキドキしない？ 探検には打って付けかも！ それに今日は天気も良いしね」

ノリノリの優羽乃の言葉に、気持ちは固まった。

研究所には何かがある。きっと何かが待っている。それだけは何故か確信出来た。それが何かが分かれば良いのだが、無論それは分

からない。胸が千々に乱れる思い……だけど、それを皆に感じさせる訳には行かない。

「じゃあ、本日決行だ！ 十時に丘の上の公園に集合！」
自分自身を鼓舞するためにも、大声で叫んでいた。

第八章 あんまり手間を掛けさせるんじゃないわよ……バカ……

雲一つない空、小さな池に浮かぶ真ん丸の寒月が、それを教えてくれた。相変わらず木枯らしの吹き荒ぶ中、優羽乃を除く五人は、公園の頼りない水銀灯の下で立っていた。

「お待たせ！」

制服の上にコートを羽織った優羽乃が、大げさに手を振りながら、小走りでこちらに近付いてくる。

「ごめんね……寒いのに」

顔の前で手を合わせながら、弾む息を堪えつつ言った優羽乃に、「みんな今来たとこだよ。優羽乃は制服で大丈夫なのか？」と聞いた。

俺なりの優しさなんだよ。だって、動きやすい服装の方が良いだろ？ 大冒険の始まりになるかも知れないんだし。

「あの後、生徒会の仕事を少し片付けようと思っていたら、結構長引いちゃってね」

優羽乃は頬を掻きながら答えた。

「それにしても、変な一団よね……」

ん？ まあ、確かに……軍服、ゴスロリ、チャイナドレス、ベンチコート。そして俺がジーンズにダウンジャケット。どう考えても変な集団だな。これじゃ、サーカス団の夜逃げじゃないか……警察官に職務質問をされても全然不思議じゃないし。寧ろ、この集団を見て怪しいと思わない警察官がいるとするなら、すぐに辞表を提出すべきだよ。だって、向いてないもん。

辺りを見回し、警察官らしき人物がいない事を確認すると、皆の方を見やり、

「行こうか」

そう告げると、研究所に向けて歩を進めた。後ろには、そろそろと皆が付いて来ている。

歩き始めてほどなくすると、月明かりに照らされ不気味な様相を呈す、小汚い建物が見えてきた。

「あれが研究所だ」

あの女の子と出会って以降、この場所には来ていない。ここに研究所が存在してくれた事に、ホッと胸をなで下ろした。

「これが研究所なのか？ 汚ねえな……」

「ホントよね。薄気味悪いわ」

そんなささやきに構うことなく歩き続けると、鉄扉の前に到着した。ノブに手を掛け、力を込めてゆっくり押すと、スッと簡単に扉が開く。

なんて不用心な研究所なんだよ！ ワンドアツールックがデフォルトの時代だったのに……この前と言い今回と言い、オープンすぎるだろ！

鍵が開いているのは歓迎すべき事ではあったが、怖さもあってか、苛立ちを募らせていた。

そして俺達は、特に警戒することなく研究所の敷地内へと進入した。この前広場へと向かった道とは逆の方に、薄明るい光を放つ常夜灯が見える。

「あそこが入り口のようなだな」

指で明かりを指し示すと、再び歩き始めた。そこには観音開きの大きな鉄の扉があった。それをまたしても力を込めて、ゆっくりと開ける。勿論と言ってはなんだが、鍵は掛かっていなかった。

研究所の中は、夜に夜を足したような闇が広がっていた。今にも蝙蝠が群れて飛び出してきたような雰囲気だった。事の成り行き上、先頭を歩かざるを得なかった。正直、物凄く怖かった。

苦手なんだよな……オバケとか妖怪とかゴキブリとか。そんなのに遭遇するくらいなら、プロレスラーとかボクサーと喧嘩をする方が、まだマシだ。コテンパンにされるのは分かっている、その方が良い。それくらい苦手なんだよ！ ま、ゴキブリ以外は、見た事

もないんだけど……

「それにしても暗いな」

眩いた俺の目の前が、突然明るく照らし出された。

「こんな事もあるうかと、持ってきたんだよね」

雷斗がSWAT御用達の懐中電灯を手に持っている。

準備が良いじゃないか雷斗よ。さあ、先頭を歩くのだ。さあ、早く！

「ほらよっ」

懐中電灯が綺麗な弧を宙に描き、俺の手へとやってきた。

やっぱり俺が先頭なのかよ……仕方がないか……

流石に威力は凄まじく、目映いばかりの灯りが目の前に広がった。

「昼間に来た方が、よかつたんじゃないの？」

優羽乃は小さく身を震わせると、オドオドした様子で話し掛けてきた。

さっきはテンションマックスだった癖に……これだから女って奴は……先頭がどれだけ怖いのか、歩かせてやろうか？

「昼間なら人がいるだろう？ 中を見せて下さいって、簡単に応じてくれるような連中じゃねえよ」

「それはそうかも知れないけどさ……」

暗くて良く分からないが、不安気な表情をしているに違いない。

優羽乃は俺のダウンジャケットの裾をギュッと握りしめていた。

なかなか可愛い所があるじゃないか……

少しばかりの優越感に浸っていると、地下から微かに話し声が聞こえた。

「誰かいるな」

「そのようね……」

懐中電灯で前を照らしてるとは言っても、やはり暗いのは変わらない。俺達は小さく小さく歩を刻んでいた。そして、突然、廊下が割れた。

床に打ち付けられ、持っていた懐中電灯が手から離れ、金属音を立てながら地面を滑っていく。起き上がろうと、軋む身体に力を入れた。見上げると、優羽乃と雷斗は間一髪で奉香と朔来に助けられ、ゆっくりと地面に降りて来る。

だから先頭は嫌だったんだよ！ 俺だけこんな目に……

体の痛みがイライラを増長させる。小さく深呼吸をして、それを落ち着かせると、周りを観察した。真っ暗だと思っていたが、一カ所だけある薄明るい場所があった。それは決して懐中電灯の明かりではなかった。

「ようこそ。聖ギエナー脳科学研究所へ」

揺れる灯りの中から、湿り気を帯びた低い声が響いた。姿はよく見えないが、特徴のある声にピンと来た。

船戸先生……

「こんな夜中に、なんの悪ふざけですかな？」

「ちよつと野暮用でね……」腰に痛みを抱えながら言った。

「野暮用？」

「ああ、親父の研究データが欲しいんだ」

「それなら昼間に来て貰えませんか？ 今は神礼拝しんれいはいの最中でしてな……」

その言葉が合図だったかのように、船戸先生の後ろの松明に火が灯った。ハッキリと見えた、船戸先生は神父のような格好をしていた。松明に火を入れた祭服を着た二人の男が、走るほどの速度で歩き、次々と松明に火を入れていく。明るくなった部屋は広く、丸かった。そして、先ほどは息づかいすら感じなかったのに、丸い部屋の中央には数十人の白装束を着た信者のような物達がいた。その者達の視線は、船戸先生ではなく、二羽の大きな鳥を肩に乗せた巨大な顔のない立像に向いていた。

いや、違う……

像の前に立つ、シスターに向いている。着ている服が違うのですぐには分からなかったが、そのシスターは、千葉さんだった。

「改めまして、ようこそ聖ギエナー教会へ。理解して頂けたかな？
邪魔をしないで頂きたいのだがね」

船戸が放った言葉が、俺には最後通告のように聞こえた。
相変わらず、よく通る声だ……でも、あの時とは違う！ 俺には
頼もしい味方がいる！ 一人じゃないんだ。

「親父のデータを手に入れるまでは、ここを出て行く訳にはいかな
い。俺は息子だ。当然の要求だ。無論、こんな形になったのは、申
し訳ないと思ってはいるがな」

「おやおや、穏やかではないですね。その好戦的な物の言いようは
……」

船戸の話を遮るように、押し黙っていた千葉が口を開いた。

「船戸よ、いつまでくっちゃべってるつもりなんだ？ お前の役目
はとうに終わっている。ここからは私の仕事だ」

千葉の目は、船戸でもなく、俺でもなく、奉香を見ていた。

「ふっ、久しぶりだな奉香よ……」

奉香……？ どういう事だ？

「既視感があると思っていたら、やはりあなた……チハですのね？
軍服姿じゃないのですもの、分かりませんでしたわ」

「なんや、知り合いか？」

気になるのか、朔来が千葉をジッと睨み付けている。その視線は
しばし固まり、ハッと驚いたかと思うと、

「あれ！ メグたんや！」

メグたん？

雷斗は朔来の言葉を聞き、

「うおー！ マジだ！ 俺のオリキャラなのに、何故に……」

部室で初めてメグたんを見た時に感じた既視感、そういう事だっ
たのか……確かによく似てる。まあ、実物の方が……って、この場
合どっちが実物になるのかな？ 千葉の方が、より洗練されたデザ
インである事は言うまでもないのだが。

「メグたん……本当、瓜二つですわね。奈良原博士が作られたのだ

から、何も不思議な事はないのですが。彼女は、私より先に製作された人型戦闘兵器、陸戦特化甲型ですわ。でも、そのあまりの出力に手をこまねいた奈良原博士は、計画を凍結しましたの。一度だけですけど、一緒に戦った事がりましてよ。チハ、凍結が解除されて、良かったですわね」

奉香は、笑顔で手を差し出すと、千葉に近付いていく。

「さっきから人の渾名を気安く呼びおって！ 奉香よ、変わらぬな。温い、温いわ！」

千葉は奉香の手をパンツと払うと、シャオの元へと一直線に、目にも止まらぬスピードで駆け寄った。意表を突かれたシャオに、それを防ぐ手立てはなかった。千葉の手がシャオの喉元に食い込む。苦しさに顔を歪めたシャオ。

「チハ！ 何をしてるの？ その子は中国人だけど、私達の味方よ！」

「ちやう！ 奉香！ アイツは味方やない……リーダーには反応してるけど、個体識別が出来へんねや。日本の機体やったら、うちのデータに入ってるはずやし」

「嘘——ですわ……」

呆然と立ち尽くした奉香に群がる、白装束の軍団。瞬く間に、朔来の周りをも取り囲んでしまった。

「フッハッハッ！ これでお前達は、翼をもがれた鳥と同じ。人に対して攻撃する事が、出来ないのだからな！」

千葉は笑いながら言葉を吐くと、更に手に力を入れた。両手で千葉の手を開こうと、シャオは必死に抵抗しているのだが、焼け石に水だった。少し離れている俺にもシャオの首の軋む音が聞こえる。パチッ！

蛍光灯が点いた時の、それを何十倍も大きくしたような音がした。俺の背後から、レーザーが千葉の顔を目掛けて飛んだ。

「グハッ！」

千葉の顔にレーザーが命中すると、叫び声を上げた。シャオの首

に及ぶ手の力が、一瞬緩んだ。

「イヤッホー！ メグたんに命中！」雷斗の奇声が丸い部屋に轟く。シャオは、その瞬間を逃さなかった。千葉の手を開き喉輪から脱出すると、距離を取った。そして、朔来から貰ったキーホルダーを、胸元から取り出した。掌の上にそれを乗せ、シャオは目を瞑った。キーホルダーが目映く光り、巨大化する。やがてそれは、少し形が歪な矛になった。矛は蛇のようにクネクネしていると思えば、真っ直ぐ棒状になったりもした。シャオは、その動きの感触を確かめると、ニヤリと笑った。

「楽しい武器アル。朔来、謝謝アルよ！ この武器、名はなんというアルか？」

「礼なんかいらんし、武器の名前も知らん。こちらは身動きが取れんから、シャオ、頼んだで！」

背の小さな朔来は、人垣に囲まれて、姿が見えなくなっていた。

「シャオ！ 分かってらっしゃるでしょうけど、油断大敵ですよ！」

奉香の言葉に、シャオは大きく頷いた。

「奉香、朔来、分かっているアルよ！ 武器の名……張飛殿が使っていた武器から、名を頂くことにするアル。お主、チハと言ったアルか？ よくも卑怯な真似をしてくれたアルね！ 臥薪嘗胆、中国の故事アルよ！ 蛇矛、行くアル！」

蛇矛が千葉の元へと伸びた。未だ目を押さえ悶えている千葉の首にクルクルと巻き付くと、とぐろを巻くようにしめ付けていった。

「うぬう……小賢しい真似を！」

声にならぬ声だった。千葉は必死の形相で蛇矛に手を掛けると、引き千切ろうとした。

「どちらが小賢しいアルか！」

シャオのドロップキックが千葉を吹き飛ばした。地面に倒れ込む千葉。その首には、今なお蛇矛が巻き付いている。

「所詮は旧型アル……超最新型の私に敵う訳がないアルよ！」

シャオの反撃はこれだけでは留まらず、地面に這いつくばっている千葉の頭を何度も足蹴にする。烈火の如き、激しいストンピング攻撃だった。

この光景、この前と同じだ……あの後、奉香がブチ切れたんだよね？ でも、まさかね……

当たらなくて良い予感ほど、的中するものである。千葉の目が、赤く光った。着ていたシスター服が、超ミニのボディコンワンピースに変わる。体は筋肉で膨れ上がり、ボディコンも相まって、体のラインが分かりすぎるほど分かった。しかし、俺には、エロさよりも怖さの方が勝っていた。

「アイヤー！ 日本製はこれがデフォルトアルか？ こんなチート断じて許せないアルよ！」

チート……雷斗がしのののさんは、もはやチートだと言ってたっけ。データを改ざんして自分に有利にする事らしいが、浅田先生は違うだろうって思ってた。

シャオの言う通りだった。正にチート行為だ。奉香の時もそうだったが、千葉も同じだった。頭に乗せていたシャオの足は、まるで顔にたかったアブを払うように弾かれ、蛇矛もいとも簡単に首から解かれてしまった。

これをチートと言わずになんと言う？ ずるすぎるぜ、千葉よ！
ってか、雷斗、余計なギミックを付けるんじゃないよ！

「もうイヤんなっちゃう。人前にこんな姿を晒すだなんて……シャオって言ったわよね？ もう許さないわよ！」

って、奉香と一緒に話し方まで変わってるし！ シャオ、大丈夫か？

千葉は鬼のような形相でシャオとの距離を詰めた。しかし、先ほどよりもスピードが遅い。シャオはスツと後ずさり、余裕で距離を取った。

「力は認めるアルが、のろまアルね。これならなんとかなるかもアルよ！」

「のろまですって！ ムキー！ これでも食らうと良いわ！」

千葉がネックレスのペンダントに手をやると、ペンダントは銀色に輝く扇に変わった。

ボデイコン姿で扇って……なんてバブリーなんだよ？ もしや、次は、お立ち台が出て来たりなんかして？

千葉はシャオに向かって扇を投げると、おもむろに走り出した。余裕綽々でヒラリと扇を交わしたシャオ。だが、交わした先には千葉が待っていた。シャオのみぞおちが千葉の拳によってえぐられる。「うう……」

呻き声を上げ地面に倒れ込んだシャオ。不敵な笑みを浮かべながら、千葉はシャオに馬乗りになると、顔を思い切り殴りつけた。何度となく叩き付けられる千葉の拳。朔来と奉香は、苦渋に満ちた表情を浮かべていた。

ってか、俺は何をしているんだ……

シャオと千葉の戦いが始まってから、幾度となくペンダントに力を込めてはみたのだが、一向に刀へと姿を変える事はなかった。武器もなく闇雲に突撃すれば、きっと足を引っ張る事になる。そう思っ

って、ジッと我慢していた。それにしても、この信者みたいな奴等は、なぜ俺達を襲って来ない？

そんな疑問が頭を過ぎった時、

「ヒィ……」

漏れるような声に振り返ると、優羽乃が顔を手で覆っていた。余りにも悲惨なシャオのやられぶりを、見るに堪えなくなっているのだろう。

雷斗はどうだ？

辺りを見回し、雷斗の姿を探したが、すぐに見つける事が出来なかった。

どこに行ったんだ？ もしや、アイツ、また……

予感再び的中した。千葉の顔を真っ直ぐに狙える位置に、雷斗

は立っていた。左手を千葉に向け照準を合わせると、レーザーが飛び出した。

しかし、千葉は気付いていないふりをしていただけだった。レーザーを軽く避けると、

「あんた、可愛い顔をしてるじゃない！ コイツの始末が終わったら、覚えてらっしゃいよ！」

雷斗に向かって叫んだ千葉。雷斗の顔が、一瞬にして凍り付いた。ドン！

鈍い銃声が響いた……

「雷斗ォ！」

奉香、朔来、優羽乃、俺、四人の叫び声が、丸い部屋に共鳴し、こだました。見ると、雷斗のこめかみから、血が垂れている。雷斗は声を発することなく、床に倒れた。銃声の先には、手に消音器付きの拳銃を握った、船戸の姿があった。

「何勝手な事してくれてんのよ、あんた！ 自分の立場、分かっている訳？」

千葉は、カーペットに糞をした飼い犬に言うようにして、言った。「ふざけるな！ こっちは命が掛かっているんだよ！ お前達の目的は、人形を破壊する事じゃないだろ？ 俺が殺^やってやる！」

船戸は、俺に銃口を向けた。

「熱田君は本当に従順だった。それに引き替え、お前はなんだ！ 生意気にもほどがある！」

引き金が引かれた。銃声よりも先に、地面に火花が散った。しかし、俺に怖さはなかった。

「親父を馬鹿にするな！ お前に親父の気持ちの何が分かる？」

「ハハ……お前こそ、だろう？ 熱田君の何を知っている？ そして私の気持ちもだ！」

三度、拳銃が火を噴く。弾は、身体を掠めた。太股が、焼かれたように、熱かった。

シャオ……カッコ良かった。俺達のために、身を焦がしながら、

戦ってくれた。それなのに、俺が、こんな事で、膝を突く訳に、行かねえだろうがよ！

菌を食いしばっていた。ジッと立っている俺に、船戸は悠々と語り出した。

「始めは探求心だった。教団が資金を提供してくれた。潤沢な資金で見事に研究は進んだ。そして、熱田君に出会った。その才能に、惚れ惚れしたものだ。すぐに病院から引き抜いたよ。しかし、その才能に気付いたのは、私だけではなかった。教団も気付いてしまったのだ。私は、お払い箱になった。その時の、私の気持ち、君に分かるというのかね？ 一人の天才の前に、凡人の真摯な努力なんて、糞の役にも立たんのだ！」

声に、怒りや憎しみが、込められていた。

「それは違う！ おっさん、本当の天才なんて、この世にはいないんだよ！ 皆が天才だと思っている連中は、失敗を失敗だとは思わない、そんな馬鹿な連中なんだ！ って言うかよ、おっさんだって、そんな事くらい分かってんだろ？」

雷斗だった。たらたらと血の出るこめかみを押さえ、雷斗は悔しそうに言った。

「そうか、そうだったな……天才と呼ばれる種族が、ここにもいたか……若造が、いけしゃあしゃあと……確かに、言わんとしている事は百も承知だ。でもな、私は嫉妬した。まあ、そんな事はどうでも良い。話の続きだ。熱田君は、教団から提供された実験用の女性に執心した。やがてその女性は、熱田君の子を身籠もった。男女の双子だった。熱田君は、妻と二人の子と一緒に、家庭を持ちたいと教団に申し入れた。教団は当たり前だが、それを拒否した」

「船戸、いつまで戯れ言を……」

シャオの上に馬乗りになった千葉は、元の姿に戻っていた。

「うるさい！ 邪魔をするな、千葉！ 死に行く若者に、教えてやっているのだよ。自分の素性という物を。どこまで話したか……ああ、そうだ……」

船戸は、さも楽しげに、再び語り出した。

「熱田君は、その女性と心中しようとしたのだ。叶わなかったがね。だが、その行ためには教団を動かした。教団も、熱田君を失いたくはなかったのだろう。教団は双子の内の一人、優秀な方を実験用に捧げる事を熱田君に提案した。熱田君は、正に苦渋の選択だったに違いない。が、しかし、それを受け入れた。私がその子達のテストを行った。女の子のIQは一九〇、君は一一〇だった……フツ、フツ……武尊君……フツ……君は馬鹿だったんだ！ 本当に、馬鹿でよかったな！ ヒャーッハッハー！」

腹を抱え、心の底から笑う船戸。

「何がそんなに可笑しいのお？ 船戸……」

暗闇から声がした。女の声だった。その声が、船戸笑い声を止めた。船戸の首には、鈍い光を放つナイフが、突きつけられていた。

「い、いえ……」

船戸の口から出た潰れた声は、食用蛙のようだった。

「そう？ なら良いんだけど……聞きたい？ 続き……」

俺の口から声が出る事はなかった。

「沈黙は肯定と同じね……私は、ここで育った。数え切れないほどの実験を、受けたわ。ま、そのお陰と言っちゃなんだけど、人としての限界にまで達した訳だから、文句を言おうとも思わないけどね。そうそう、中には『性行為が及ぼす脳活動の変化』なんてのもあったわね。本当、嫉妬に狂った醜い豚の相手をするのは、ウンザリだったわ。ね？ 豚さん……」

声の主が暗闇から姿を現した。

ルナを大人にしたような感じ……

三度目の遭遇だった。

「武尊……いや、お兄さんと呼ばれた方が、嬉しいのかしら？」

不敵な微笑。鋭い視線。頭に、直接脳を鷲掴みにされたような激痛が走った。頭が真っ二つに割れるんじゃないかと思い、両の手で頭を押さえた。

「あらあら……普通の世界で普通に育ったヒトには、刺激が強かったかしら？ ふっ……じゃあ、こんなのはどうか？」

激しい頭痛で、視界が霞んでいた。だけど、船戸の喉から、血が垂れるのは分かった。

「ヒ、ヒィー！ や、やめてくれ……」

今度は、狂った鶏のような声だった。

「豚が偉そうに人語を話してんじゃないわよ！ ブヒーでしょ？ はい、言ってみて。ブヒーって」

少しずつ戻る視界に、太股に膝蹴りを食らわされる船戸が映る。その額に浮かぶ汗が、俺には黄色く見えた。

「ブ、ブヒー……や、やめて下さいブー……」

「キヤツハツハ！ あー気持ち悪い事……で、あんたさ、私がやめてって言った時、やめてくれたっけ？ やめてくれなかったよね？ 脂汗垂らしながら、必死に腰を振ってたわよね？」

船戸の喉にナイフの刃が食い込む。凹んだ所から流れる血が、目に見えて増えた。

「もう……分かったから——ルナ、もうやめてくれよ！ 頼むからさ……」

声を振り絞った。

「——分かった……？ 何が？ どう？ 脳が熱暴走でも起こしてんじゃない？ あんたの命令で、私がやめる訳ないじゃん！ それとも何？ 出会ったばかりで兄貴面って訳？ 馬鹿じゃないの？それに、私の名前はノゾミ。あんな糞の役にも立たない機械と、一緒にしないでよね」

「糞……役に立たない……機械………？ ルナは……俺の妹は………機械なんかじゃねえ！」

頭の中にある、理性を司る配線が、ショートした。両手の拳を力一杯に握り込むと、一心不乱に駆け出していた。千葉がシャオの上から退くと、俺の前に立ちはだかった。

「邪魔……すんじゃねえ！」

左手で千葉の顔を、鷲掴みにした。右手に握り込んだペンダントが、焼けるように熱くなり、光り輝く剣へと姿を変えた。

正に白刃一閃だった。千葉の頭が、地面を、サッカーボールのように、コロコロと転がった。俺の口の中には、景気付けに食べたトンカツが、上がって来ていた。

ヒューっと口笛を鳴らすノゾミ。

「で、どうする気？ 私を殺す訳？ こんな豚と引き替えに、唯一の家族を殺すの？」

ゴクリと口の中の物を飲み込むと、苦くてまた吐きそうになった。「お前は家族じゃない！ 妹じゃない！ 俺の妹は、ルナだけだ！」 ゆっくりとノゾミに近付いた。ノゾミは一切表情を変えず、俺の目を食い入るように見ていた。今、目の前に、鼻息が当たるほどの距離に、ノゾミがいる。

「もう、許してくれ……」

そう言って俺は、ノゾミのナイフを握る手に、手を添えた。その瞬間、頭を再び強烈な痛みが襲った。

「あんまり手間を掛けさせるんじゃないわよ……バカ……」

ノゾミが微笑んだような気がした。

「人の記憶ってのはね、そう簡単には消せないもんなの。少なくとも、私はあなたの事を覚えていたわ。玄関で出会った時、あなたの姿を見て、懐かしく感じた……どう？ 思い出せた？ それでも、私の事を家族じゃない、妹じゃないって言える？」

ノゾミの頬には、一筋の涙が伝っていた。何よりもそれが、俺の記憶を覆っていた深い霧を晴らした。

母さんに抱かれ、研究所を出て行く俺。見送る親父と手を繋ぐ、小さな女の子。その頬には涙が光っていた。家で母親に妹の所在を、幼い俺が問い質している。小学一年の時の宿題で、家族の似顔絵を描いた。親父と母さんと妹を。人かゾウリムシかも見分けられないほどの下手くそな絵だったけど、妹の下には名前を書いた。

張り切って漢字で書いたんだ。『望美』と……

「望美……」

小さく呟いていた。名前を口に出すと、記憶はパラパラ漫画をめぐっていくように、時代を遡っていった。

強い雨の降る細い峠道を、親子三人が乗る車が下っていた。慎重にハンドルを握る親父の横には、心配そうな面持ちの母さんがいる。フロントガラスに当たる雨粒の音を、かき消すような唸りを上げて、ダンプカーが坂を上って来る。あつと言う間の出来事だった。車はダンプカーに衝突すると、半分くらいに縮まっていた。後部座席でシャボン玉のような膜に包まれ、車内に飛び散った血を、夢を見るように俺は見ていた。隣には、ホッと胸を撫で下ろすルナの姿があった。ルナに促され、車外に出ると、入れ替わるように白装束に身を包んだ人達が、車の中へと入っていった。俺は、ただ呆然とその様子を見ていた。ダンプカーからは、船戸が降りてきて、白装束の人達と何やら話し込んでいた。俺は無性に腹が立ち、手に持っていた万年筆を、山へ投げ捨てた。そんな俺の怒りに気付いたのか、ルナが服の袖を優しく引いた。俺がルナへと視線を移すと、背伸びをしたルナの顔がすぐそばにあった。ルナの唇と、俺の唇が、当たった。

頭の中はいつの間にか砂嵐になっていた。それを振り払うように頭を軽く振ると、視界に映ったのは、望美と船戸だった。俺は船戸の顔に、あらん限りの力を込めた拳を、ぶちかました。鼻血を噴き出し、倒れる船戸を見て、記憶が正常化した気がした。

「望美……」望美を抱きしめた。力一杯、抱きしめた。

本当に申し訳ない……

目から溢れ出る涙で、望美の髪が濡れた。

「俺は、最低な、兄貴だな……大事な妹の事を忘れるなんて……」

心底思っている事を、言葉にしていた。

「ちよっ、何よ！　もう分かったって……離れなさいよね、気持ち悪い！」

抗う望美の力は、凄まじかったが、俺も負けじと力を振り絞り、抱きしめ続けた。

「もう……どうしようもないわね……私達の父親は超有能な脳科学者なんだから、記憶の中の不都合な真実を少し改変するくらい、訳ないのよ。まあ、完璧にはほど遠いけどね」

「そうか……でも、そんな科学の力に負けたと思うと、それはそれで情けなくて……」

手に込めた力を緩め、望美を解放した。望美は俺の顔を見るや、プツと噴き出す。俺の顔は涙に鼻水に、酷い事になっていたんだろうと思う。

「あー、なんかもう、どうでも良くなって来たわね。感動の再会も終わった事だし、そろそろ行くわ！　それじゃ、皆さん！　ごきげんよう！」

望美は倒れている船戸の顔を容赦なく踏みつけると、それが合図だったかのように天井が崩れ始める。一階部分だけでなく、建物全ての天井が崩れ出したようで、上から月明かりが差し込んだ。

「カラス！　行くわよ！」

声と共に、空から黒い忍者が降りてくると、望美を抱き上げた。

「あ、そうだ。お父さんの回路図は私達が頂いたわ。それと、早く逃げないと瓦礫の下敷きになっちゃうから、気を付けてね！」

「おい、望美！　待てよ！」

俺の制止なんて、望美が聞く訳がない。カラスと呼ばれる黒忍者は望美を抱き上げたまま宙に浮くと、上昇し始め、崩れる天井の瓦礫を巧みに交わし、黒い空の彼方へと消えた。

「私達も！　早く逃げるわよ！」

優羽乃の叫び声が飛んだ。辺りを見渡すと白装束の姿は、人っ子一人なくなっていた。船戸の姿さえもなかった。

俺は望美を追いたかった。空を飛ぶ手段がない俺は考えていた。奉香と朔来に頼るしかない。でも頼りたくないんだよ。人に頼ってばかりの情けない俺とは、もう決別したいんだ……

肩をポンッと叩かれた。振り返ると、そこには笑顔の奉香がいた。「武尊、何を悩んでいますの？ あなたらしくもない……さあ、行きますわよ」

「そやで、武尊。なんとなく察しは付くけど……でも、いつも自分で言うてるやん。今出来る事を、最大限にやるんやろ？ やらずに後悔するよりも、やって後悔したいんやろ？」

二人は俺の目を見ていた。

「そうだ……そうだよな！ 頼む！ 俺を連れて、望美を追いつけてくれ！」

「了解」朔来が指輪を外そうとすると、

「ちよっと待った！」雷斗の声だった。雷斗はシャオを背負っている。

「朔来！ キーホルダーの中に馬の形をしたのがないか？」

「えっ？ そんななかったと思うけど……」

不思議そうな表情をしていた朔来だったが、雷斗の真剣な表情に気押されたのか、ポケットを探ると、

「……あっ」小さく呟きポケットから手を出すと、そこには、小さな馬を象ったチャームがあった。

「ホラ見ろ！ なっ！ 武尊、後はお前次第だ……俺達に出来る事はない。がんばれよ！」

「武尊、頑張ってね！」

雷斗と優羽乃、俺の大切な二人の友達が笑顔で言った。大きく頷き、その気持ちに応えようと、朔来からキーホルダーを受け取り、それを拳の中に握り込みながら、十年以上も前に生き別れた望美への想いをぶつけた。目映い閃光を放ちながら膨れ上がった馬のチャームは、瞬く間に翼の生えた馬へと姿を変えた。

クリスマスはまだ先だつてのに、こんなプレゼント……

ゆっくりと馬へ跨がり、新たな相棒の首を優しく摩ってやると、馬は盛大にななきと共に、翼を大きくはためかせ、宙に浮いた。

ありがとう、雷斗……

奉香と朔来を従え、研究所の天井に開いた穴を一気に駆け抜けけると、天高く上昇した。こんなに近くで月を見たのは初めてだった。綺麗な満月に照らされた黒い闇。遙か遠くに軍用輸送ヘリと、それに向かう小さな影が見えた。

いた！

たてがみを持つ手に力を込め、馬に気合いを付けた。

「行っけー！」

寒さは微塵も感じなかった。生身で空を飛ぶという興奮。そして、何より、妹を、望美を失いたくないという想い。それが、感覚を麻痺させていたのだろう。

グングンと速度を上げる馬。しかし、ヘリまではまだかなりの距離があった。

「間に合ってくれ！」

そう叫んだ刹那、満月から一つの影が降りてきた。その影が俺の前に立ちはだかる。驚きでいなくなきながら立ち上がろうとする馬を必死でなだめ、影に目を凝らすと、その影の正体は、純白の軍服に身を包んだルナだった。

第九章 寝覚め悪なるから、殺されるのだけは勘弁してや

目の前に、ルナがいる。その目は俺をカッと睨み付け、気安く妹と呼べるような状態ではなかった。それでも、ルナに近付こうとした。ルナの温もりを感じたかった。ルナの匂いを嗅ぎたかった。

「ルナ……」後三メートル、二メートル……近付く俺を追い越し、灼熱の炎を上げたロケット弾が、ルナに直撃した。

耳をつんざく爆発音。ルナが黒い煙へと姿を変えた。余りに突然の出来事で、棒立ちになった俺は、ただ黒い煙を見ている事しかできなかった。

その時、風が吹いた。突風とも言えるような、猛烈な風だった。風が黒い煙を飛ばすと、そこには憮然とした表情をしたルナがいた。ルナの目は、サファイアのように青く光っていた。髪の色までも、青く染まっている。

ルナは侮蔑に満ちた目で俺を見ると、ニヤリと笑い、長い髪を鞭のように振り回した。伸びてくる、幾重にも分かれた先端部分は針のように尖っていて、その先が間もなく俺に到達しようとした時、目の前を刃が横切った。奉香だった。奉香が俺とルナの間に浮いている。なぎ払われた髪は、長さを元に戻すと、ルナの周りでウネウネと奇妙に漂っている。それはまるで、イカの触手のようだった。力なく馬に跨がる俺をよそに、ルナと奉香が対峙している。相変わらずルナは世界中の人達をバカにしているような顔をしていた。それを見て奉香は、

「ち、千歳……千歳よね？」小刻みに震える人差し指をルナに向けて言った。

「違うよ……私は、ルナだよ」薄く微笑むと、そう応えた。

奉香は酷く困惑した面持ちになると、

「朔来！ この子の識別は？」

「米国産。海戦特化甲型、名称はルナや！」

「――チハといい、千歳といい……一体どうなっていますの!」

戸惑いを通り越し、怒りに満ちた奉香の叫びが、闇夜に響いた。そんな混乱した空気を打ち破るように、烈火の如きルナの攻撃が始まった。振り乱された青い髪が針となり、霰あられのように俺達に降り注ぐ。奉香は必死の形相で、一つ一つを刀で払っていた。

「武尊。分かっていますわね?」

奉香は俺に背を向けたまま聞いてくる。俺は、答える事が出来なかった。

「お兄ちゃん! ボーツとしないでよ! 次に会う時は、敵だって言っただでしょ!」

ルナの掌が俺に向けられ、光の球が打ち出された。それを奉香が刀で弾き飛ばす。

「朔来、武尊にバリアを! 急ぎなさい!」

「……必要ない」

手に握っていたはずの剣が、なんの変哲もないペンダントへと姿を変えていた。どうしてなんだと考えている余裕もなく、ルナの強襲は続く。髪を打ち付けつつ、光の球を朔来に向けて発射した。ロケットランチャーを肩に担いだ朔来は、光の球を避け、応戦する。ルナに向けて放たれたロケット弾は、あっさりと避けられた。

「このままでは、埒があきませんわね……」

奉香の髪から覗くうなじには、うっすらと汗が滲んでいた。

「俺が囷になる」

「囷って……何を馬鹿な事を言っていますの? チハを倒したからと言って、勘違いされては困りますわ。あなたのその紙のような防御力では、一撃であの世行きでしてよ!」

「それでも良いよ……」ルナに殺されるんなら、本望だよ……下を向いていた俺だったが、襟を掴まれ強引に顔を上げさせられると、吐息が掛かる距離に、紅い瞳をした奉香の顔があった。明らかに、その表情は怒っている。

「私達の代わりはいくらでもいる……でも、あなたの代わりはいな

いの！　あなたが未来を作るの！　あなたじゃなきゃ駄目なのよ……」

奉香の頬を伝う涙の意味が、俺にはよく分からなかった。でも、俺の中で再び何かが始まった。

ルナと再会し、ごうごうと燃えていた物が消えたような気がしていた。でも消えてはいなかった。しっかりと、種火は残っていた。

風見鶏か？　俺は！　クルクル向きを変えやがって……圧倒的に強くなるんだよ！　殺すことなく、倒せるくらい圧倒的に！

掌の中のペンダントが熱く光った。俺の手には、光り輝く一筋の剣が、握らされていた。柄の感触をしっかりと確かめると、奉香を抱き寄せ、その唇に唇を重ねた。そっと唇を離すと、奉香の頬はほの紅く染まっていた。

「お前の代わりなんて、いやしない……見ててくれ」

馬には俺の意志が伝わっているようだった。何をする事もなく、俺はルナと対峙していた。「ルナ！　初めての兄妹喧嘩だな」兄妹喧嘩が殺し合いって……マフィアじゃねえか……

「負けないよ、お兄ちゃん」瞳が、一際青く輝いた。

ルナの髪がウネウネと蠢き束ねられると、一本の太い槍のようになり、飛んでくる。

「ルナはショートカットの方が似合うと思ってたんだよね……」

ギリギリで躲すと一気に距離を詰め、ルナの髪を根こそぎ切った。主人を失った槍は、その場でハラリとぼらけ、闇へと吸い込まれていく。ルナのショートカット姿は、やはり似合っていた。

手にバスケットボールなんか持っていると、最高だろうな。

「髪は女の子の命なのよ！」

ルナは頬を膨らすと掌を俺に向け、光の球を打ち出した。それを豪快にかっ飛ばし、人差し指を天に向けた。ルナはガックリと項垂れていた。

「ルナ……たった一つの年の差が、決定的だって事、もう分かっただろ？　頼むから、諦めてくれよ……」

「絶対にヤダ！」

強情だねえ、本当に……まあ、そういう所が、メチャクチャ可愛いんだけどな！

そんな事を思いながら、ふと満月を見ると、黒い影が急速にこちらに向けて近付いてきた。ジェット機のような轟音を上げ、俺とルナの間に、カラスが割って入る。

「間に合って良かったで御座る……」カラスは額の汗を拭っていた。

「望美様は？」

「無事にアメリカ軍に引き渡したで御座る。全く望美殿の我が儘には往生するで御座るよ」

ルナとカラスの目が合うと、二人は軽やかに笑った。置いてけぼりを食らった感があり、イラッとした。

「おい、黒いの！ 邪魔すんじゃねえよ！ もう少しだったのに……」

「黒いのって……拙者にはカラスという、れっきとした名があるで御座るよ。ルナ殿、遠慮などするから、こんな輩を付け上がらせる事になるので御座る」

遠慮？ 確かにルナは、もっと強いと思ってたけど……

「ルナ、遠慮してたのか？」ルナは俺と目を合わせようとしない。

「ルナ」ルナの視界に映ろうと移動するが、ルナはそっぽを向いてしまう。

それって、肯定してるのと一緒にゃん！ なんだよ、おい！ また調子に乗っちゃったよ、バカじゃん俺……

背後に気配を感じ振り返ると、いつの間にか朔来と奉香がそばまでやって来ていた。朔来は、うなだれた俺の肩にポンッと手を置くと、ご苦労さんとも言わんばかりの顔で、

「まあ、武尊。そないにしかけた面せんと……」

「そうよ、武尊。カッコ良かったわよ」

奉香の瞳と頬は、今も尚紅く染まっていた。そんな慰めの言葉を聞くと、俺の中の風見鶏はまたもクルクルと回り始める。

「おなごに情けを掛けられるとは……笑止千万！ ルナ殿、やりにくそうで御座るから、コイツの相手は拙者が致すで御座る」

カラスのむかつく発言だったが、ルナは小さく頷いていた。
分かったよ……やってやんよ！ このクソガラスが！

「朔来、奉香、ルナを頼む。カラス、お望み通り、相手になってやろうじゃねえか！」

カラスは俺を見て、不敵に笑った。

「寝覚め悪なるから、殺されるのだけは勘弁してや」

「へっ、言ってら……頑張って死なねえようにするよ」相変わらず酷い物の言いようだな、朔来は。

「そう、頑張れば良いのですわ。武尊なら、きっと大丈夫」

奉香は言うと、俺に手を差し出した。その手をギュッと握り、俺達は散った。

二人は更に上空に上がると、ルナを睨み付けている。ルナの手から放たれた光の球が合図となり、戦闘は再開された。ルナの髪は、再生されている。

俺はと言えば、大丈夫だと言われたものの、カラスの実力がいかほどなのか察しが付かず、正直、不安だった。そんな不安を振り払うように、叫んだ。声帯にピリッと痛みが走り、カラスを見た。カラスの目はカメレオンのように、上下左右に動いた。そして、その動きは俺を真っ直ぐに見た所で止まった。正眼に剣を構えると、手に自然と力が入る。

「ふふっ……なかなか良い面構えで御座るな。拙者の名は、カラス！ お命、頂戴致す！」

「金鷄学園高校一年、熱田武尊！ そう簡単に、殺らせはしない！ 張り詰めた空気の中、間合いを探るように、ゆっくりと旋回していると、剣の輝きが先ほどよりも、更に増し始めた。

いける……

俺とカラスが保つ距離の、丁度真ん中に、朔来の放ったロケット弾が突き抜けた。カラスはその弾道を目で追うことなく、先に動い

た。両手に短剣を一振りずつ持ち、一弾指の間に距離を詰める。

よく見えていた。

カラスが俺の間合いに入った瞬間、俺の体は自動的に反応した。カラスの肩を目掛け、剣を振り下ろしていた。その一閃は、カラスの肉に辿り着かず、服を掠めただけだった。露わになったカラスの肩口は、よく鍛えられた事が伺える筋肉が、盛り上がっていた。

ずっと不敵に微笑みを湛えたカラスの口が、真一文字に結ばれた。カラスの動きは、より慎重になっていた。そんなカラスを見て、剣道の試合を思い出していた。中学三年の時の、夏の県大会を。

自分でも驚くほどに調子のよかった俺は、準決勝までの試合全てを秒殺で終えていた。そんな調子で迎えた準決勝も、一本目を開始数秒で取った。勝利を確信していた。負ける事なんて、微塵も考えられなかった。そして、二本目が始まった。俺は一人の武士となっていた。荒野で決闘をしている、そんな感覚に陥っていた。

手に握られていたのは竹刀ではなく、真剣だった。無論、身を守る防具もなかった。相手の放つ頭部への一撃に、本気で殺されると感じた。瞬時にその剣を弾くと、返す刀を脳天へと振り下ろしていた。俺は、狂気に満ちた奇声を、上げていた。

決勝戦は棄権した。試合が、戦うのが、怖かった。心底、怖かったのだ。殺される怖さでなく、殺す怖さを、猛烈に感じていた。その日を境に、俺はただ一度も、竹刀を人に向けて握った事はない。そう、先ほどの千葉との戦いまでは……

千葉は人ではなかった。だけど、ルナ、奉香、朔来、シャオ。皆命を懸けてでも守りたいと思っている仲間がいる。千葉にも、そんな仲間がいたのかも知れない。俺はそんな千葉を、なんの躊躇もなく、殺してしまった。そして、今、目の前にいるカラスを、殺そうとしている。人ではないと言え、そう簡単に、斬ってしまっても良いのか……

俺の中の風見鶏は、グルグルと回り続けていた。方向を指し示すことなく、ただグルグルと。勝ち負けなんてものは、付録みたいなもんだ。肝心なのは、どんな相手に対しても敬う心を持ち、ただ全力で挑む事。剣道の先生が言っていた。それが武士道なのだと。でも、敬う気持ちがあれば、相手の未来を終わらせて良い物なのかと、俺は常に自問自答していた。強すぎるが故の苦悩だったのかも知れない。自分が十年以上続けた剣道。たかが剣道の試合でも、そう考えていた。生死をかけた戦いなら、尚更の事だ。圧倒的な力を持って、殺すことなく倒すと言う事すら、空虚だ。綺麗事だ。

ふと上空を見上げた。ボロボロになりながら、戦っている女の子達が見えた。三人とも、必死の形相をしている。

未来のために？ どう転ぶか分からないのに？

「馬鹿みてえだな……」

怪しく輝く望月に、厚い雲がかかり、空の暗さが増す中、呟いていた。カラスは、その瞬間を見逃さなかった。一気に間合いを詰められる。

死んだと思った。だけど、悲鳴を上げたのはカラスだった。またもや俺の体は自動的に、剣を振り下ろしていた。手に伝わる、斬った感触が、気持ち悪かった。月にかかった厚い雲がすぎ去り、剣は月明かりに輝く。おびただしい量の血が、刃に付着していた。

「えっ？」

カラスを見ると、左足がなくなっていた。溢れんばかりの血が流れていた。カラスは慌てて懷からスプレー缶のような物を取り出すと、傷口にそれを吹きかける。暫くすると、血は止まった。俺は、足下に広がる闇に、胃の中の物を吐き出していた。吐きながらも、カラスを見ると、その目はカメレオンのようにクルクルと回っていた。その表情は、苦悶に満ちたものへと変わっていく。

「ここまでやるとは、誤算だったで御座る……流石は望美殿の兄上。このままおいそれと死んで行くのも一興では御座るが、しかし！」

カラスは見上げると、月を指して飛んだ。俺もなんとか後を付

いて行った。カラスは奉香の放つ光の球を巧みに避けると、ルナへと近付き、背後に回る。カラスの手には短剣が握られ、それをルナのこめかみに突きつけた。

「さあ、どうするで御座るか？ 動くところの者の命はないで御座るよ」

「どうして……」ルナは青ざめた顔で、小さく呟いた。

「なんだそりゃ？ どの世界に、味方を人質に取るやつがいるんだよ……」

武士道の風上にも置けない愚行だ。

「ほんまやで……何を考えてんねんな」朔来は唾然としている。奉香の顔には、悔しさが滲んでいた。

「武尊殿、ルナ殿を助けたいので御座るか？」

カラスの目がクルクル回るのをやめると、俺の目を見た。

「当たり前だ！ ルナを離せ！ そうしないと……」

「そうしないと？ どうする気で御座る？」

力なく構えを解いた。俺にはどうすれば良いのか、分からなかった。カラスはニヤリと笑うと、

「そうで御座ろうな。では武尊殿、アンドロイドを殺す方法をご存じで御座るか？」

知るかよ、そんな事……

「アンドロイドを殺す方法は、急所を突くか、武尊殿の持つ剣で斬るか……たった二つしかないので御座る」

「何が言いたい？」

「拙者はルナ殿を、今、殺す事が出来るので御座る。そこで提案が御座る。武尊殿、その剣で朔来殿を殺しては貰えませぬか？ さすればルナ殿を解放し、拙者は消えましょう」

「は？ 何言うてんねん！ なんでうちやねんな……」

朔来の声が聞こえていないかのように、奉香は俺を探るような目付きで見っていた。俺はその視線に堪える事が出来なかった。目を逸らせてしまっていた。

「お兄ちゃん……」

ルナの青い瞳から、一筋の涙が頬を伝う。俺の柄を握る手に、力が入る。俺は、朔来を見た。「アマテラスシステム起動……システム正常……」

機械じみた声がした。奉香から発せられた物だった。奉香の背から、真っ黒の薄いパネルが次々と開かれていく。

「我ハ、守護者ナリ……」

黒いアゲハ蝶のような羽を纏い、奉香は言った。その髪は白磁に輝き、右目は紺碧に左目は深緋に、煌めいていた。

「迎撃、準備ヨシ……」

奉香の左手が、ルナとカラスを捕らえている。掌から発せられる熱が伝わり、空間が歪む。黒い羽は月明かりを浴び、金色に染まった。

奉香、どうしたんだよ？ どうなってんだよ！

ルナの視線が俺の方に向けられているのを感じたが、目を合わす事は出来なかった。

「目標、補足、ヨシ……熱量、確保、等級、四……発射、準備、ヨシ……」

「お兄ちゃん！ 出会えてよかった！ ありがとう！」

ルナの嗚咽の混じる声が、響いた。奉香の手は青白く、一際輝く。「すまん！」

素早く奉香に近付くと、その左腕を切り落としていた。奉香は俺を見て、一瞬頬を緩めると、瞳の輝きを失い、切り落とされた腕と共に落ちていった。

「奉香！」

必死で追い掛け、腕と奉香をしっかりと抱きしめる朔来。朔来が俺を見る。その目が俺を打ち守る。その目から、目を背けなかった。

小さな笑い声が聞こえた。カラスだった。薄ら笑いが大きな笑い声へと変わった。

「アーツヒヤツヒヤー！ コイツは真性の馬鹿で御座る！ こんな者が未来の首領とは！ 国の未来と機械を天秤に掛けるだけでも馬鹿馬鹿しいで御座るのに、まさか機械の方を選ぶとはな……馬鹿以外の何者でもないで御座るよ！ 愉快で御座る！ 滑稽で御座る！」

「なんとでも、言えよ……」自分自身へ向けられた、自らの嫌悪感に、そう呟いていた。

「武尊、うしろお！」

朔来の叫び声に促され、力なく振り返ると、目に映ったものは、猩々緋に目を輝かせ、紫紺の髪を四方八方に棚引かせた、ルナだった。金色の月を背景に纏い、それは神秘的な物だった。

「殺ス……」

ルナはカラスの腕を掴んだ。カラスは短剣をルナのこめかみに突き刺そうとしたが、何かに弾かれるように刺さらなかった。ルナはそのまま、更に月に向かって上昇していく。追おうとする俺を朔来が制止すると、指輪からシャボン玉を出した。

「ここから上は、生身では無理や……閣下、ご武運を！」

「朔来、ありがとう……」

馬に祈りを込めながら、気合いを付けた。

「頼む！ 追い付いてくれ！」

地鳴りのようないななきと共に加速していく。何千メートル上昇しただろうか。地上を見ると、地球が丸い惑星である事が、ハッキリと分かった。月を見上げると、二つの黒い影が映っていて、グングンとそれが大きくなっていく。白い兎、黒い鴉。俺の目には、そんな風に映っていた。

ようやく追いついた！

そう思った瞬間。ルナの手に浮かんだ光球は、宇宙に浮かぶ月よりも大きくなった。そして、それは放たれた。

俺はカラスの前に立ちはだかった。刀で光球を受けると、月を目掛けて跳ね返し、返す刀でカラスを斬った。頭部から下肢に掛け、

真っ二つになったカラスは、体中の液体が蒸発し、干からびて落ちていった。断末魔の叫び、一つすら残さずに……

刀でシャボン玉が破れてしまった俺も、息が出来なかった。そんな俺を見て、ルナが慌てながらもシャボンの膜を張ってくれた。七色に輝くシャボン玉の中で、何度も謝るルナを、俺は力の限り、抱きしめていた。ルナの涙が、俺の肩から腰に掛けて、流れ落ちている。

「謝んじゃねえよ……」

抱きしめる力を抜き、そっと肩を掴み、ルナの上体を起こした。意識が多少混濁しているのか、朧気ながらに見るルナの顔。ルナの涙を拭うと、その頬にキスをした。

「ルナ……もう二度と、出て行くんじゃねえぞ……」

ルナは嗚咽を繰り返しながらも、微笑むと、二度頷いた。ルナの笑顔を見て安心し、俺は意識を失った。

第十章 ヒトが生み出した、最も綺麗なモノ（第一部完）

眼下に広がる、摩天楼の光。車が、ミニカーにすら見えない。シムシティーをやっている気分だった。

意識を取り戻した俺は、東京スカイツリーの第二展望台の屋根に、腰を掛けていた。当たり前だが、自力で空を飛ぶ事が出来ない。だからと言う訳でもないのだが、ルナの手をギュッと握りしめていた。「綺麗やなあ……」隣に腰掛けている朔来が、乙女表情で呟いた。「いつもそういう顔をしてりゃ良いのに……でも、未来の夜景は、もっと綺麗なんだろう？」

「そうやなあ……似たようなもんな。でも、夜の空気を感じながら、夜景を楽しむのは、空を飛ぶ事が出来るもんだだけの特権やで。このタワーかて、地震でなくなってもうたし。通天閣の上からなんか知れてるやろ？ 阿倍野のビルかて、もう一つやしな。って言うか武尊、今なんか失礼な事を言わなかったか？」

ちらりとこちらを見る朔来は、詮索するような目をしていた。

「い、いや、言うてへんで……」

「なんや？ その下手な大阪弁は……アホ」朔来は笑った。その笑顔が眩しかった。

生きてて、本当に良かったなあ……

ルナの顔を見ると、朔来とは対照的に、表情を曇らせていた。

「まだ気にしているのか？」

「そ、そりゃそうだよ……こんなに大事な人を。命令だからって言い訳にならないよ……」

ルナは膝小僧の辺りを見ていた。

「気にすんな！ 変な言い方かも知れねえけど、ルナが出て行っただからこそ、今がこんなにも幸せに感じるんだから。それで良いじゃないか。それにしても、なんでこんな所に連れてきたんだ？」

「お兄ちゃんと見たかったの……ヒトが生み出した、最も綺麗なモノ」

ノを……身体ボロボロなのに、ゴメンね」

今度は俺を見て、ルナはペコリと頭を下げた。

「謝らんでええって。武尊は気を失ってたし、うちらも体力が限界に近かったし。どっかで休憩しようってなってな。どうせやったらルナの行きたい所にしようって……聞いたところここが良いって言うもんやから、人目に付かんし丁度ええやんって」

「そっか……迷惑掛けてばっかだな、俺は。すまん」

朔来の目を真っ直ぐに見て謝った。奉香の事もあるし、何度謝ったって足りるものではない事は分かっているつもりだった。

「男がそう簡単に謝んな！ ええねん。もう終わった事やんか。今がよかったら、それで良いって、さっき自分で言うてた癖に」

「そ、そうだな……すまん」

朔来は小さな拳を俺の頭に振り落とすと、そっぽを向いてしまった。

さっきまで意識を失ってた人間に対して、なんて事を……でもまあ、心地良い痛さではあるが。

「そういや、ルナ。なんであんな上空まで行ったんだよ？ 追い掛けるの、必死だったんだからな」

「分からないよ……でも、多分、見られなくなかったんだと思うよ。カラスさんを殺す所。お兄ちゃんは見なかった？ 私のそんな姿」

「そりゃ、見たいかどうかって言われれば、見たくはないってのが本音だけど……でも心配じゃねえか……」

「なるほどなー。やっぱそうやってんや」朔来がしたり顔で呟いている。

兄妹の会話に、でかい呟きで入ってくるんじゃないかって。

「何一人で納得してんだよ？」

「あんたら、ホンマの兄妹みたいやな。よう似てるわ！ 見られなくなかったルナ。見たくなかった武尊。そういう事やねん」

「うるせえ……」

「でもな、武尊。次はないからな！ また同じような事やってみい、

絶対に殺したるから」

朔来にそんな宣言をされ、俺の目には、横たわっている奉香が映った。左腕の、肘から先がなくなっている。露出された骨格部分の金属が、プラチナなんて目じゃないほどに神々しく輝いていた。

「それは超鉄や。もっとマシなネーミングあったやろって思うけど。この前、もう一度大きな地震が来るって言うたやん。その地震で出来た島に、この鉱石が山ほどあってん。世界は超鉄の採掘権を巡って、戦争を始めよる。下らん話やけど、それが現実や。でも、それがあったから今、こうしてうちらがここにおる。時空を超えられるのも、超鉄のお陰やし。未来では普通に会うてる訳やから変な話やねんけど、あんた等に会えて、うち、ホンマ良かったなって思ってるねん」

奉香は夜景を見ながら言うと、眠ったままの奉香を背負い、奉香の左手を手握り締め、微笑んだ。

「ほな！」朔来がゆっくりと宙に浮き、少しずつ離れていく。

そんな朔来の姿を見ているといてもたってもいられなくなった。

「俺だって、同じ事思ってる……そんなでもって、もっと思われるようにになりたい……」

口に出すと、尚のこと溢れる気持ちが、心を掻き立てる。

「朔来！二度とこうならねえよう、俺は絶対に強くなってみせる

！奉香が言ってた、誰もが笑って暮らせる世界を、俺も目指す！

未来の俺を、俺は超える！」

屋根の端っこに立ち、朔来に向かって叫ぶと、下を見た。背筋が凍るなんてもんじゃない。

「I can fly！」

闇に向かって、飛び降りた。あつという間に近付いてくる地面。死んだって思った瞬間、ルナが俺を捕まえてくれた。

「アホー！でも、あんたのそんな心意気、うちは好っきやでー！」
遠い頭上から、そんな声が聞こえた。分かって貰えたようで何よりだった。

まあ、気持ち的には、一回死んだけど……

抱きかかえられながら、ふと見ると、ルナは頬を紅潮させていた。何やら興奮を隠しきれない様子だった。

「なかなかやるもんだね、お兄ちゃん！ 私も、お兄ちゃんを守れるように強くなる！」

ルナは小さな拳を振り上げていた。

これからどうなるのか？ そんな不安もあるにはあるが、そんな事言ってもらえない。約束したんだからな！

もし、未来を変えられるほどの力が自分にあるんだとしたら？

有意義に使う事が、俺の責任だし、義務なんだ。

そんな事を考えながら、ルナに抱きかかえられ、家へと戻った。

家は真っ暗だった。誰もいないのだから当然ではあるが。玄関の鍵を開け、中へと入り、電気を点けた。ルナは玄関の先で、モジモジしていた。

「ルナ、おかえり」微笑みかけると、

「ただいま、お兄ちゃん」ルナも笑顔で応えた。

ルナを先に風呂に入らせ、俺はリビングのソファに座っていた。

色んな事が頭に浮かんでは消えていく。その内ドツと疲れが押し寄せ、いつの間にか、寝てしまっていた。

携帯が鳴り、目を覚ますと、隣にはルナが寝ていた。ベッドの上だった。ルナも携帯の音で目が覚めたようで、寝ぼけ眼を手でこすっている。携帯の画面を見ると、雷斗の名前が出ていた。

「おはよう」まだ少し頭が痛かった。疲れのせいなのかも知れない。

「おお！ なかなか出ないから、死んだのかと思ってたぜ。急で悪いんだけどよ、今すぐうちに来られるか？」

目覚まし時計は、九時を指していた。今日が休日でよかったなんて思いながらも、

「分かった……出来るだけ、早く行くよ」

「ルナちゃん、連れて来いよ。じゃ！」電話が切れた。

ふとルナを見ると、また寝息を立てていた。

「ルナ、起きろ。出掛けるぞ」

ルナはうつすらと目を開けると、ふにやっと表情を崩し、

「お姫様は、口付けで目覚めるのです」

とんでもなく可愛かった。つい赤面しながらも、

「早く準備しなきゃ、置いていくからな」部屋を出て行こうとする
と、

「えー！ ちょっと……」

ルナは慌ててベッドから飛び出だした。

インターホンを押すと、すぐに雷斗が出迎えてくれた。雷斗はルナを見るなり、

「確かに、よく似てるな……メチャクチャ可愛いじゃん！」

望美の事が頭に痛烈に過ぎった。望美を連れ戻せなかったのが、
本当に心残りだった。

「まあな……ルナ、コイツが俺の友達の雷斗って言うんだ」

「はじめまして！ よろしくね！」元気な挨拶だった。

「うん。こちらこそ、よろしくな！」雷斗は朗らかに返した。

「そういや、昨日、あれからどうしたんだ？」雷斗に聞くと、

「無事に帰還出来て、よかったよ。まあ、レーザーがどっかに行っ
ちまったのは、勿体なかったけど」

あっけらかんとしていた。

「そっか……迷惑掛けて、すまん」

「は？ 何言ってるんだ？ 興味がなかったら、付いていたりしね
えよ」

雷斗は言うど、部屋のドアを開けた。その部屋は前に通された事
があった。部屋の中に入ると、奉香と朔来とシャオがいた。三人は
俺を見るなり、笑顔を浮かべてくれた。奉香の左手は、何事もなか
ったように繋がっていた。その視線に気が付いたのか、

「本当に、スゲエ科学力だよ。超強力な接着剤で骨を繋いだら、そ

れを覆うように肉が形成され直したんだ。あつと言う間だったもんな」

接着剤って……大丈夫なのか？ そんなもんで……

とは言え、文句を言える立場でない事は承知している。奉香を見て、

「なんて言えば良いんだろ……その、ゴメン……」

「何をおっしゃってますの？ あなたは誰ですの？」

え……？

雷斗を見ると、

「高エネルギーをショートされちゃったもんだから……ちよつとした記憶障害がな……」

マジか……？

頬に、熱い物が伝わるのを感じた。

なんて事をしちゃったんだ、俺は……

ガックリと肩を落とした俺に、奉香はゆっくりと近付くと、
「そう。記憶がなくなりましたの……武尊の唇の柔らかさも、ルナへの嫉妬心も……」

ん？

俺の脳裏には、昨晚の戦闘の最中、奉香としたキスの味が蘇った。
甘い、味がした。

っつか！

「うふっ。騙されましたわね。腕を切り落とされた仕返しですわ」
奉香は楽しそうに笑った。

「清い男心をもてあそぶなんて、奉香は女狐アルね」
シャオは呆れている。

「でも、少し記憶を失っているのは本当みたいだぜ。明法が言っていたから、間違いない」

「明法？」 どうしてアイツが？

「いや、どうしても奉香が目覚めないもんだから、明法に来て貰ったんだ。ま、代償は高く付いたがな」

何故か雷斗は頬を染めていた。

「ほんま、男同士のチューなんて、二度と見たないわ……」

雷斗の鋭い視線が朔来を襲った。

マジかよ？ 無茶苦茶じゃねえか……

「その甲斐あって、奉香を復活させられたんだろ？ 俺の判断はナノも間違っちゃいないね」

「そうか……色々ありがとうね」

「礼には及ばん。だいたい俺はお前のためにやった訳じゃない。俺は奉香ちゃんの笑顔を、もう一度見たかっただけなんだから。ねえ、奉香ちゃん！」

そうだ。そうだったよな……お前はそういう奴だったな。頼もしすぎる友達だよ。

奉香はそんな雷斗を見て、ニツコリと笑った。雷斗の気持ちが痛いほど伝わっていた。

「じゃあ、みんな家に帰ろうか！ 帰りにスーパー寄って、焼き焼きの材料を買おう！」

「おー！」 小さな歓声上がる中、

「ちょ、待てよ！」

だから、お前はキムタクかってんだよ！

「いやいや、それじゃルナちゃんを連れてきた意味がないだろ？

いや、可愛いから良いんだけどさ。そういう問題じゃないよな？ 分かるだろ？」

「分からねえって……」 素直な気持ちだった。

「ピンと来いよ！ 俺が明法と、その……キスしたんだぞ！ そりゃ奉香ちゃんも大事だけど、それだけじゃないんだよ」

ふむ……確かに、明法の求める対価がデカすぎるか？

「ルナ、こっちおいで」 朔来は部屋の中で一際熱を帯びたパソコンの前へと、ルナを誘った。

「お兄ちゃん……」 不安そうな顔をしている。

そうか！ そういう事か！

シャオを見ると、ルナを見て微笑んでいた。俺はルナに対して、大きく頷いた。ルナも小さな頷きを返し、朔来に伴われパソコンの前に行った。

「多分、シャオの時より時間が掛かると思うから、まあ、ビデオでも見て待っていてくれ。マイ・モスト・フェイバリットを準備していたから」

時間が掛かるって、ビデオ見るほどのかよ……

そんな事を思いながらも、雷斗によって点けられたテレビを見ると、やはり、と言うべきか、アニメだった。それは女子高生の戦闘モノだった。とてもありがちなストーリーで、主人公らしき人物の友達が怪物に襲われ、陵辱されそうになっているのを、主人公が変身し助けるという物。

ってか、これ……エロアニメじゃんか……どんな顔して見りゃ良いんだよ！

隣には奉香とシャオがいて、退屈そうに画面を見ていたのだが、主人公のピンチのシーンで二人の顔付きが変わった。猛烈な攻撃を受け、ボロボロになった主人公の目の色が突如として変わる。髪の色までもが変わっていた。そこからの主人公の強さは圧巻の一言だった。あっと言う間に怪物を倒し、エンディングテーマが流れ始める。

「ってかさあ、雷斗」振り返って雷斗を見た。

「どうした？ 面白いだろ？」自信満々の笑みを浮かべている。

「いやいや、ギミック凝りすぎだろ……まあ、事実は小説より奇なりって言うけどさ」

「何言ってるんだお前？」不思議そうな顔をしていた。

いや、アニメの事じゃないってば……

「出来たで！」

朔来の声がして、見ると、見た目にはなんの変化もないルナが立っていた。

「お兄ちゃん……私の名前を呼んでみて……」
瞳には涙が光っている。

「ルナ」

なんだか凄く気恥ずかしかったけど、ルナの希望に応えない訳には、いけない。

「うん……凄く良く聞こえる」

ルナは俺に駆け寄ると、抱きついた。

「どうしたんだよ……」

「命令が聞こえないの……機械みたいな声が、お兄ちゃんの声が邪魔をしないの」

ルナは、どうしようもないくらいに、泣いていた。

「ま、ルナはルナで、色んなものと戦ったちゅう訳やな」

「そ、そうなのか？ ルナ」

ルナは、ただ泣くばかりだった。

ようやく泣き止んだルナの頭を撫で、

「帰ろうか」そう言うと、皆一斉に大きく頷いた。

「本当に、色々とありがとう」

心を込めて、雷斗に言うと、綺麗に折りたたまれた紙切れを一枚差し出した。

なんだこれ？

「礼を言うのは俺の方だ。退屈は苦手なんだな」雷斗はぎこちなく笑うと、何事もなかったようにパソコンをいじり始める。

「じゃあ、また、学校でな。終業式、さぼんなよ！」

雷斗は何も言わず、手を上げた。

外に出ると、粉雪が舞っていた。

「もうすぐクリスマスですわね」

「ああ、そうだな……みんな何か欲しい物あるのか？」
そんな俺の問いかけに、

「服」朔来が言った。

服か……またあの店に、みんなで行ってみるかな……

「没落する前の祖国を見てみたいアル」

旅行はちよつとな……俺も中国に行ってみたいけど……

「ルナは、お兄ちゃんのをそばにいられるだけで良い」

頬を赤く染めていた。寒いからというのもあるかも知れない。

「私もルナと同じですわ……」平然と奉香は言った。顔が熱くなった。寒いからという訳ではなさそうだ。

それなら俺も、同じだよ……

なんとなく目のやり場に困り、思い出したかのように雷斗から貰った紙切れを開いてみた。そこには『聖ギエナー教団 調査報告書』と見出しがあった。

親父の働いていた……

紙には題名以外に、たった三行しか書かれていなかった。

所在地……東京都

創立者……三崎完治みざきかんじ

関連施設……聖ギエナー科学技術振興機構、学校法人金鷄学園

粉雪はやみ、空はどんよりとした灰色の雲に、覆われていた。

第十章 ヒトが生み出した、最も綺麗なモノ（第一部完）（後書き）

一応、これで終わりです。続きの更新はいつになるかわかりませんが、でも、きつと最後まで書きたいと思っています。それでは、また！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860u/>

渡り鳥

2011年6月26日20時55分発行